



ラブレター

吉田 来世子

夕暮れ時を過ぎた居酒屋の店内は、物凄い喧騒で満ちていた。建物に入った時も階段を上っている時も通路はとても静かだったのに、ドアを開けた途端に人の笑い声や話し声、食器の触れ合う音や調理場の音が有線から流れる音楽と一緒にたになって雪崩れ出す。生まれて初めて呑み屋に入った拓夢（ひろむ）は、その毒々しい音の洪水に思わず怯むと、店内に入るのを一瞬躊躇った。

「ここで間違いない……よね……」

握り締めていた『お知らせ』をもう一度開き、店名と地図を確認する。すると、後から階段を上って来た客が拓夢の後ろで立ち止まった。

「すみません。通ってもいいですか？」

その低音の魅力的な声音に、拓夢は思わず顔を上げる。いったいどんな人なのだろうかと思って振り返ると、そこには俳優顔負けのイケメンが立っていた。

体つきはスラリと背が高く細身だが、半袖のTシャツから覗く肩や腕にはしっかりと筋肉が付いている。これ見よがしに付けたのではない、肉体労働で付いたと思われる筋肉の盛り上がりはとてもしなやかで綺麗だ。キリッとした眉とすっきりと通った鼻梁の下には、ちょっと薄めだが形の良い唇が薄い笑みを浮かべている。その唇から、なだらかなラインを描いている切れ長の目へと視線を戻した拓夢は、その黒瞳が不思議そうに自分を見詰めているのに気付いて思わずドキリとした。

「あ、すみません」

慌てて脇に退こうとすると、男が目元を緩める。途端にちょっと冷たそうに見えた美貌が優しそうなそれに変った。

「どうした。誰か探しに来たのか？」

拓夢の顔を見た途端、男の口調がぐだけた親しげなものに変わる。

「え？」

拓夢は小首を傾げると、その言葉の意味を問うた。

「まさか、中学生が居酒屋に呑みに来たわけじゃないだろ？」

男は冗談を言うと、キョトンと大きな目を見開いて自分を見上げている拓夢に笑い掛ける。その男の魅力的な笑みに思わず見惚れていた拓夢は、しかし言われた言葉の意味に気付くと、途端に目尻を吊り上げた。

「高校生です！」

身長百六十五センチの拓夢は、今までにも何度も中学生に間違われている。大きな瞳や童顔もさることながら、いつもTシャツにジーンズという飾り気の無い服装がいけないのかもしれない。今着ているフード付きのダッフルコートも学校指定を思わせるような薄いグレーで、袖の先からチョココンと指先だけ覗かせている姿は、いかにも『お兄ちゃんのお下がりです』風でとても可愛い。男もそう思ったのか、目を細めて笑うと、拓夢の頭を優しくポンポンと叩いた。

「そうかそうか高校生か、悪かったな。で？ 誰か探しに来たのか？」

その言葉に拓夢は再びハツとして大きな目を見開く。

（しまった！）

「じゃなかった！ 大学生です！」

慌てて声を張り上げ、訂正すると、男は一瞬キョトンとしてからプツと吹き出し、ワッハッハと声を上げて笑った。

「なんだ新生か。悪い悪い！」

男はひとしきり笑った後で、目尻に涙を滲ませながら拓夢に謝る。拓夢は羞恥に顔を真っ赤にすると、まだ肩を小さく震わせている男を上目遣いに睨んだ。

（最悪だ……！）

さっさと店に入っていればこんな変な男に遭うこともなかったのに、と拓夢は思わず顔を顰める。中学生に間違えられたことも腹が立つが、初対面の相手をこんなに大笑いするとは何事か。そう思うと、声が素敵だとか凄くハンサムだとか思った自分にも腹が立ってくる。

（最低だ！）

すると、ようやく笑いの波が去ったらしい男が目尻を拭いながら店内を指差した。

「新入生ってことは新歓コンパだろ。こんな所にいるのもなんだから、とりあえず中に入ろうぜ」

男の言葉に、拓夢も別の客が階段を上って来たことに気付く。出入り口にいつまでもいては店にも迷惑だろう。男と一緒に入るのは不本意だが、中に入れば別々なのだ。拓夢は渋々自分に言い聞かせると、先に立って店内に入った。

ワンフロアの広い店内は、大学が近いせいか学生と思われるグループでいっぱいだった。客席にはあちこちに衝立（ついたて）が立てられ、別グループが顔を合わせないように配慮されている。その間をバイトと思しき従業員が一人、忙しそうに走り回っている。これは自力で探すしかなさそうだった拓夢は、必死で客席を見回す。すると、後から入って来た男が拓夢に尋ねた。

「そういえば、どこのサークルなんだ？」

もちろん聞かれても教えるつもりなど毛頭無い。拓夢は男の言葉を無視して店内を見回す。なにぶん入部したての拓夢は部長の顔しか知らない。その記憶もあやふやで、この中から見つけるとなると実はかなり自信が無い。もしかしたら部長の方で自分を見つけてくれないだろうかと期待したが、しかし、いくら待ってもこちらに手を振ってくれる者は無い。どうしたらいいのだろうかと半ば呆然としながら立ち尽くしていると、後ろで自動ドアが開いて、先程階段を上って来た客が店内に入って来た。

「おっ」

男が拓夢の肩をそっと引き寄せ、脇に退かしてその客を先に行かせる。

「あ……」

礼を言おうとした拓夢は、しかし、視線を上げた途端に思わず息を呑んだ。

「この店で間違いないのか？ なんていうサークルなんだ？」

男が拓夢の肩を抱き寄せたまま、優しい眼差しで見下ろし尋ねる。拓夢は間近に迫ったその男の顔を陶然と見上げると、先程まで腹を立てていたことも忘れて呟くように答えた。

「……ビデオサークルです」

「マジでか……！」

途端に男が驚愕したように……と言うよりも、呆れたように拓夢を見る。そして、暫しジッと色白の小さな顔を見詰めていたが、不意に訝しそうに眉をひそめると尋ねた。

「お前……もしかして男か？」

その言葉に、年齢ばかりか性別まで勘違いされていたことに気付いた拓夢は真っ赤になる。

「もしかしなくても男です！」

今度こそ本気で怒って目尻を吊り上げると、男は妙に納得をした顔をして、そうか男か、そうかそうか、と言いながら、店の一番奥を指差した。

「お前が今から行く『地獄の一丁目』はあそこだ。ちなみに俺の名前は『須崎（すぎき）基央（もとお）』。

お前の先輩な」

「え！」

拓夢は驚いて男を見上げる。男は引き寄せていた肩から手を離すと、先にたって奥へと向かいながら拓夢の小さな尻をポンと叩いた。

「今日から一週間で勝負だぞ。ケツの穴しっかり締めとけよ」

「ケツ……」

拓夢は男の言葉に啞然として呟く。しかしすぐに我に返ると、慌ててその長身を追い掛けた。

「それではこれより新入部員、佐保（さほ）拓夢（ひろむ）クンの歓迎会を行ないます！ 皆の者、乾杯ッ！」

「カンパーーーイッ！」

部長の号令と共に野太い声上がる。ガシャンガシャンと大きなビールジョッキが拓夢のグラス目掛けて突進して来て、拓夢はハラハラしながら引き攀った笑みを浮かべた。

宴が始まってからわかったのだが、どうやらまだ新入部員は自分一人だけらしい。それなのにもう歓迎会などしてもいいのかと聞くと、いいのいいの、誰か入ったらまたやればいいんだから、と軽く部長に返された。

「そうすれば新入部員の数だけ宴会が出来るでしょ」

そんなものなのだろうかと首を傾げた拓夢は、しかしすぐに理解する。長い座卓の周りには拓夢を入れても全部で六人。しかも、みんな男だ。いわゆる『弱小サークル』に、そんなに新入部員が押し寄せて来るわけもなく……。拓夢は何となく納得すると、お通しのナムルを箸で摘んだ。

一週間前の入学式。式も滞りなく終わって会場を出ようとした拓夢は、出口で待ち構えていた大勢のサークル勧誘員に他の新生と共に捕まった。サークルには是非入っておいた方がいいとガイダンスでも言われたので、どこかに入ろうとは思っていたのだが、これと言って特にやりたいことも無い。すると、そこへビデオサークルの勧誘員がやって来てこう言ったのだ。

「ウチはタダで映画が観放題だよ～♪」

映画を観るのは好きだ。しかも、年に数本だが自分達でビデオ製作もするのだと聞いて、拓夢は俄然興味が湧いた。決して『今なら入会金・年会費無料！ 呑み代もタダ！』という口上に釣られたわけではない。その『佐竹』と名乗った勧誘員が、今日の前で旨そうにビールを呑んでいる部長である。まだ数回しか会ったことはないが、いつもにこにこして温厚そうで、人望も厚いのか、みんな佐竹にだけは敬語で話している。ガタイが良くて金色の髪を逆立てている姿はまるでライオンのようなようだった。そう思って見ると、他の部員もみんな動物に見える。

「じゃあ順番に紹介してくぞー。まずは副部長の高科！」

佐竹はそう言うと、自分の右隣を見て名前を呼んだ。

「よろしく」

長めの黒髪を後ろで一つに束ねている男が、拓夢を見て優しく微笑む。ヒョロッと背の高いその先輩はキリンだ。長い睫毛と優しそうな瞳が更にキリンを連想させる。

「そんでもって、書記の細川！」

次に呼ばれたのは拓夢の左隣の男だった。

「どうも」

細面で目のつり上がったその先輩は、眼鏡の奥からチロリと拓夢を見て小さく頭を下げる。いかにも頭の良さそうなその先輩はキツネだ。ちょっとオタクっぽい雰囲気をしているが、しかし、そういった意味では右隣の先輩の方がアブないかもしれない。そう思っていると、佐竹がその男の名を呼んだ。

「会計の丸山！」

「ほいほーい」

佐竹に呼ばれて、そのアブなような先輩がビールを呑みながら答える。太めで腹の突き出たその先輩は

まるでタヌキだ。しかも、キツネが電腦系オタクだとすると、こちらは……。

「あ、こいつはロリコンオタクだから」

佐竹がサラリとタヌキのプライバシーをバラし、その言葉に途端にタヌキが憤慨する。

「ロリコンなんて言わないでください！ 俺はモエキャラをこよなく愛しているだけです！」

ロリータとモエキャラの違いがわからない拓夢は、愛想笑いを浮かべながらそれとなく視線を逸らす。

すると、順番にメンバーを紹介していった佐竹が、最後に自分の左隣に視線を向けた。

「ここまでが四年だ。そして、コレが三年の須崎。年は一番下だが態度は一番デカイ」

「別にデカくないですよ」

佐竹の言葉に、須崎がシレッとした顔で耐ハイのグラスを傾けながら言う。

「よく言うぜ」

佐竹は笑うと、須崎の頭を小突いた。

「見てわかると思うが、須崎はウチの看板俳優だ。お陰で我侂言いたい放題」

「我侂なんて言ってませんよ。注文通り何でもしてるじゃありませんか」

佐竹の言葉に、須崎が眉をひょいと上げて心外そうに言う。佐竹は笑うと、再び拓夢に視線を戻した。

「いや～、君が入ってくれて良かったよ。CGだとどうしても臨場感が出なくてねえ」

「はあ……」

確かにCGは動きや表情に違和感が出る。だが、それと自分が入ったこととどんな関係があるのだろうかと思っていると、須崎が空になった耐ハイのグラスを目の前に上げた。

「おかわり」

「はい！ レモンハイ、おかわり一丁～！」

すかさずタヌキが厨房に向かって声を張り上げる。

(……確かに態度は一番デカいかも)

当然のような顔をして先輩を顎で使う須崎を見て、拓夢は思わず心中で呟いた。

「ウチは自作ビデオの売上金でサークルを運営しててね」

旨そうな料理が次々と運ばれて来て、拓夢の前に並べられていく。

「遠慮しないで食べてよ。タダだから」

佐竹はそう言うと、拓夢の取り皿に唐揚げや春巻きをサクサクと取り分けた。

「あ、すみません」

拓夢は恐縮して礼を言うと、さっそく唐揚げを頬張る。揚げたての唐揚げはアツアツで、生姜とニンニクが効いていてとても美味しかった。

「でも凄いですね。売上金だけで運営資金を賄えるなんて」

運営資金を賄えるということは、売れているということである。思わず感心して言うと、佐竹が得意そうに笑う。

「これでも学内では結構人気があってね。お陰で会費を集めなくても何とかやっていける」

「台本はどなたが書かれるんですか？」

「こいつ」

拓夢の問い掛けに、佐竹が隣に座っている副部長を指差す。

「高科がホン書いて、細川が音付けて、丸山が編集。俺以外はみんな有能なんだ」

そしてハンサムな須崎が売れっ子の俳優ということらしい。視線を向けると、須崎は山盛りのチャーハンをモリモリと食べていた。

「以前は前の部長が書いてたんだ。脚本作家目指してた人です」

「俺のアニキなんだ」

佐竹の言葉に、副部長が付け足して微笑む。

「そいつがずっとラブストーリー撮りたくて女優を欲しがってたんだけど、とうとう叶わないまま卒業しちゃってね。拓夢ちゃんが入ったこと知ったら羨ましがらるだろうなー」

「女優？」

何のことかと拓夢は首を傾げ、すぐにハッとして焦る。

「すみません先輩ッ。僕、男なんです！」

また女の子と間違われたかと思い、慌てて訂正すると、佐竹が驚いたように目を見開いてからアハハと笑った。

「知ってるよー。拓夢クンでしょ」

そしてそう言うと、ビールを水のようにゴクゴクと飲む。

「君が可愛い子で助かったよ。いっぱい働いて貰うから、そのつもりでいてね〜」

「働くって、映画とか撮るんですか？」

途端に拓夢はキラキラと目を輝かせる。

「作るよー。もう撮影カメラ頼んじゃったしね」

佐竹の言葉に、途端に他のみんなが目を見開いた。

「とうとう買ったんすか、部長！」

「いくらしたんですか」

身を乗り出したタヌキとキツネを、佐竹は、まあまあ、と言って手で制する。そして徐に正座をすると、目の前にビールジョッキを掲げて声を張り上げた。

「今年は本気でいくぞ、みんな！ 頼りにしてるからな！」

佐竹の言葉に、みんながウオーッと叫んで自分のジョッキを突き出す。拓夢は何が何だかわからないながらも、周りに合わせて自分のグラスを遠慮がちに合わせた。

宴会が進むごとに男達の酒量も増えていく。周りにいたグループはみんな二次会に移動したらしく、店内はすっかり貸切り状態になった。タヌキとキツネは隣の席に移動して、先程からオタク談義に花を咲かせている。すると、こちらはかなり酔って半目状態になった佐竹が拓夢を見てニヘラと笑った。

「拓夢ちゃんはさ、今付き合ってる子とかいんの？」

「えッ？」

突然問われた拓夢は質問の内容に慌てる。

「いえ……今のところいませんけど……」

どちらかという可憐系の拓夢は、中学までは結構モテたが、高校になると伸び悩んだ身長がネックになってか、告って来る女の子が激減した。人並みに恋愛したいという気持ちはあるが、だからといってその目的の為だけに女の子に声を掛けようとも思わない。モゴモゴと答えると、途端に佐竹が驚いたように目を丸くした。

「えー、もったいない！」

そしてそう言うと、不意に笑みの種類を変えて拓夢を見詰める。

「じゃあさ。俺と付き合ってみない？」

「「は？」」

その言葉に、拓夢となぜか副部長が同時に声を上げる。

「何言い出すんですか、部長」

「僕、男ですからッ！」

副部長と拓夢の言葉に、しかし佐竹はヘラヘラと笑った。

「俺、優しいよー。セックスも上手いよー。絶対に幸せにするよー」

「なに言ってんだ、この酔っ払いは」

途端に須崎に大きなメニューでペコンと頭を叩かれる。

「酔うとホント見境い無いな、あんたは」

「ひでえなあ。部長の頭をメニューで殴る奴がいるか〜？」

佐竹は座卓の上で頬杖を突くと、ヘラヘラ笑いながら須崎を見た。

「じゃあさ、一週間やるよ」

その言葉に、須崎が眉をひそめて酔っ払いを睨む。

「一週間後にもう一度告るから、その時に返事聞かせてねー」

佐竹は須崎から拓夢に視線を移すと、そう言って嫣然と微笑んだ。

「え……ええッ？」

拓夢は佐竹の言葉に驚愕してのけぞる。

『ケツの穴しっかり締めとけよ』

店の入り口で須崎に言われた言葉を思い出し、拓夢は思わず愕然として青褪めた。

『今日から一週間で勝負だぞ。ケツの穴しっかり締めとけよ』

新歓コンパの翌日、拓夢は須崎から言われた言葉を思い出しながら、おずおずと部室のドアを開けた。

「……こんにちはぁ」

昔は定員五十名ほどの講義室だったらしいその部屋は、外に面している側が全てガラス窓だということに、目の前に建てられた新講義棟のせいで恐ろしく日当たりが悪い。部屋の中央には大きなテーブル兼作業台が置かれ、右手奥の壁際に並べられた学生机の上には数台のパソコンと周辺機器が並んでいた。どう見てもビデオサークルには見えないその部屋の中で、唯一左手の壁に掛けられた白いスクリーンだけが、ここが映像を研究するサークルであることを主張している。部室のドアは左手にあるので、スクリーンに映っている映像までは見えない。そっと声を掛けると、部屋を暗くしてスクリーンを見詰めていた佐竹が寄り掛かっていた椅子からパッと体を起こした。

「おっ、拓夢ちゃん」

拓夢の顔を見とめると、嬉しそうに破顔して手元のプロジェクターを止める。

「昨日はお疲れさん。ちゃんと帰れたかい？」

そして、そう言うのと立ち上がって、入り口脇にある照明のスイッチを入れた。

「はい」

途端に薄暗かった室内がパッと明るくなる。拓夢は勧められるまま中に入ると、テーブル脇の椅子に腰掛けながら笑った。

「先輩方はあの後どうされたんですか？」

須崎はともかく、キツネとタヌキは完全に出来上がっていた筈である。そう思って尋ねると、佐竹がウハハと笑って言った。

「慣れたモンさ。タクシー呼んでポイポイと詰めて、高科を乗せてブー」

「……押し付けたんですね」

思わず気の毒になって苦笑すると、佐竹が、心外な、と言って口を尖らせる。

「高科家は面倒見がいいんだよ。いつも奴らは酔い潰れると高科んちに泊まるんだ」

確かに副部長が一緒なら朝も起こして貰えるし、朝食にもありつけそうである。拓夢は笑うと、佐竹にも尋ねた。

「部長はまっすぐ帰ったんですか？」

しかし、そう尋ねながらも、頭の中では別の人物の顔がよぎる。

(須崎先輩もまっすぐ帰ったのかな……)

すると、まるで拓夢の胸中の呟きが聞こえたかのように佐竹が言った。

「帰った帰った。須崎も俺もあの店からすぐのアパートなんだ」

「え、もしかして同じアパートなんですか？」

驚いて尋ねると、佐竹が、うん、と言って頷く。

「あの店から五分もかからないよ。すんごいボロアパートでさ。四部屋あるんだけど入居者は俺と須崎しかないから、いつも俺の部屋に部員呼んでドンチャン騒ぎしてんだ。楽しいよ〜」

君も遊びにおいでよと言われ、拓夢は躊躇いながらも、はい、と頷く。それにしても、学校至近でそれなりに賑わった地域だということに誰も借り手がいないとはどういうことか。余程のボロ屋か家賃が高いか。もしかして幽霊でも出るんですかと尋ねると、佐竹はハハハと声を上げて笑った。

「拓夢ちゃん、面白いこと言うねー。別にそんなんじゃないよ。ただ、うちのアパートはトイレが共用だから、いまどきの学生には敬遠されるらしいんだ。俺は風呂があるだけマシだと思うんだけどねえ」

そしてそう言うと、すぐに何か思い出したように人差し指を立てる。

「いや、須崎の場合は風呂も必要ないな。あいつ、フロ代が勿体無いからとか言っていていつも俺んところ来て入ってくるから」

「えッ？」

佐竹の言葉に拓夢は驚いて目を丸くする。

「ホントホント。しかも、貰い湯しに来るならともかく、勝手に風呂汲んで一番風呂に入ってくるんだぜ。ふてぶてしいにもホドがあるだろ？」

佐竹は顔をしかめてそう言うと、眉をヒョイと上げながら拓夢を見て笑う。つられて拓夢もアハハと笑ったところへ、ガチャリと音がして部室のドアが開いた。笑いながら振り向くと、その噂の人物がひょっこり顔を出した。

「ちわ」

「あれ、須崎クン。珍しいじゃん」

その顔を見て、佐竹が驚いたように目を丸くする。須崎は佐竹の顔を見ながら部屋の中に入って来ると、チラリと拓夢に視線を向けた。

「昨日はちゃんと帰れたか？」

須崎に尋ねられ、拓夢は、はい、と答えて頷く。

「そうか」

その瞬間、ほんの一瞬だけ須崎が目元を和らげたような気がして、拓夢は驚いて目を瞬（しばた）かせた。

「今日はバイト、休みなのか？」

佐竹の問い掛けに、再び須崎が視線を戻す。

「いえ、今からです。ちょっと顔出ただけで……」

須崎はそう言うと、じゃあ、と言ってドアに向かう。

「おいちゃんとおばちゃんによろしくな」

佐竹がその背に声を掛けると、須崎はヒラリと手を上げて出て行った。それを見送った拓夢は、先程の佐竹の言葉を不思議に思って尋ねる。

「須崎先輩はあまり来ないんですか？」

「ああ、あいつはいつもバイトがあるからね」

佐竹はそう答えると、クスリと笑う。

「いつもは撮影がある時以外は顔すら出さないんだけど、どうした風の吹き回しかねえ」

そしてそう言うと、面白そうに拓夢を見た。

「これは凄いモンを手に入れちゃったかな〜」

「？」

佐竹の言葉に、拓夢は何のことかと首を傾げる。

「そう言えば、他の先輩も来ないんですか？」

「うん。映像を編集する時以外はあいつらもバイトがあるからね。と言っても、奴らは本職だけど」

「本職？」

キョトンとして尋ねる拓夢に、佐竹は、そっ、と答えて頷くと言った。

「あいつら、もう企業で働いてるんだ。身分はバイトだけど、技術屋として主戦力で働いてる」

「えッ！」

拓夢は驚いて目を丸くする。どう考えても昨夜の飲んだくれて酔い潰れていた姿からは想像出来ない。
「さっき観てたのが、その作品ですか？」

声は消していたのでどんな内容だったかはわからないが尋ねると、佐竹はニヒヒとイヤな笑みを浮かべてプロジェクターを見た。

「これは、ア・ダ・ル・ト」

そして、語尾にハートマークまで付けそうな声音でそう言うと、ボタンを押してDVDを取り出す。拓夢は思わずウツと呻くと顔をしかめた。

「あれっ。拓夢ちゃん、そういうの苦手派？」

その顔を見て、佐竹が意外そうに眉を上げる。

「苦手って言うか……あんまり観ないです」

拓夢がボソボソと答えると、佐竹は途端にプツと吹き出した。

「なんか拓夢ちゃんてさ、ホント無菌培養で育つたみたいに純真無垢だよね〜〜」

「なんですか、それは」

拓夢は唇を尖らせると、ふと気付いて廊下側の壁を見る。そこには壁一面に棚が作られており、ビデオやDVDがびっしりと詰められていた。

「これ、全部映画ですか？」

驚いて尋ねると、佐竹が、ああ、と答えて笑う。

「どれでも好きなモン観ていいよ。どうせ誰も来ないからさ」

拓夢はその言葉に目をキラキラさせて棚の前に歩み寄る。

「あ、これがいいかも」

古い外国もののラブストーリーを選んでジャケットを見せると、佐竹はなぜか懐かしそうに目を細めて笑った。

次の日も須崎は一瞬顔を出しただけで、すぐにバイトに行ってしまった。佐竹の淹れてくれた紅茶を飲んでいた拓夢は、その後ろ姿がドアから出て行くのを黙って見詰める。いったいどんなアルバイトなのかは知らないが、よほど忙しい仕事らしい。せめてひと言くらいは話したかったな、と思いながらティーカップに視線を落とすと、佐竹が拓夢を覗き込んで笑った。

「元気無いな、拓夢ちゃん。今日は映画観ないのかい？」

「いいんですか？」

拓夢はパツと顔を輝かせると、棚の前に立って背表紙を眺める。昨日に引き続き、今日も外国もののラブストーリーをチョイスすると、佐竹が再び優しい目をして笑った。

「好きなの？ 恋愛もの」

「あー……」

佐竹の言葉に、拓夢は困って笑い返す。すると、佐竹が、違う違う、と言って再び笑った。

「おんなじチョイスをする奴がいたからさ。前の部長だけどね」

「ああ」

その言葉に、拓夢は新歓コンパの時の会話を思い出す。

「確か、副部長のお兄さんでしたよね」

そう言うと、佐竹が、そうそう、と答えて頷いた。

「俺の同期だったんだ。あいつは四年で普通に卒業したけど、俺は二年も留年しちゃった」

「え、じゃあ」

拓夢は驚いて目を見開く。

「そ。六年生なのよ、俺。今年で満期」

その言葉に、なぜ四年の先輩たちが佐竹に敬語を使うのかがわかって納得した。

「今年は撮るよお。凄いのを撮る」

佐竹は白いスクリーンに視線を移すと、どこか遠くを見るような目をして言う。二年留年したと言うことは、佐竹が大学ににられるのは大学院にでも進まない限りは今年が最後ということになる。思わずすぐ隣にある精悍な横顔を見上げると、佐竹が不意に拓夢に視線を戻してにっこりと笑った。

「だからさ、力になってよね、拓夢ちゃん。絶対にみんなでいい作品を撮ろう！」

佐竹の力強い言葉に、拓夢は思わず頬を赤くして、はいっ、と答えて頷く。新歓コンパの時は突飛な言動にいったいどんな人なのだろうかと危ぶんだりもしたが、あれは酒の勢いというヤツだったのだろう。やはり第一印象通りの素敵な人だなあとと思い、拓夢は佐竹を見詰めながらにっこりと微笑み返した。

次の日も、そのまた次の日も拓夢は佐竹と二人きりで映画を見た。見終わった後は二人でその映画について色々語り合う。ストーリーの感想だけでなく、佐竹は脚本の作られた時代背景や監督の生い立ちなども教えてくれるので勉強になる。専門的な話になると難しくよくわからなかったが、目をキラキラさせて話す佐竹は子供のように生き生きしていて、本当に映画が好きなのがよくわかる。知識が豊富で感性が豊かで話し上手聞き上手の佐竹と話している時間はとても楽しく、いつしか遅くまで話し込んでから二人並んで夜道を帰ることが日課となった。

その日も拓夢は、暗くなった夜道を佐竹と並んで歩いていた。大学構内にある遊歩道は真っ暗で、ポツリポツリと立っている街灯の灯りだけを頼りに拓夢は自転車を押す。遊歩道の脇には大きな街路樹が並んでおり、生い繁った葉に遮られて頭上の月明かりもアスファルトまでは届かない。先ほどまで点いていたグラウンドの照明も今は消えて、車が数台走り去った後は人通りもほとんど無くなった。しかし、一人では心細い夜道も佐竹と二人でなら怖くはない。不思議な安心感を覚えながら自転車を押していると、佐竹が不意に、あ、そうだ、と言って拓夢を見た。

「明日は金曜日だから、みんなで俺のアパートに集まるんだ。良かったら拓夢ちゃんもおいでよ」

「え、いいんですか？」

拓夢は押していた自転車から視線を上げると、パッと笑顔になって佐竹を見上げる。佐竹は頷くと笑った。

「手ぶらで来ていいからね。食べ物とかは全部こっちで用意するから」

「はい」

とは言っても、本当に手ぶらで行くわけにはいかないだろう。どこかでアイスでも買っていこうかと考えていると、佐竹が続けて言った。

「副部長は用があって来れないけど、他の奴らは来るからさ。須崎もバイトが終わったら来るって言ってたし」

「須崎先輩……」

その名前を聞いて、拓夢は途端に顔を曇らせる。

「まあ、あいつはタダメシを食いに来るだけだけだな」

佐竹はそう言って笑うと、不意に黙り込んでしまった拓夢をどうしたのかと覗き込んだ。

「拓夢ちゃん？」

須崎はあれから毎日のように部室に来たが、顔を出しても佐竹と二、三言葉を交わすだけで、すぐにバイトに行ってしまう。拓夢が挨拶をしてもチラリと視線を向けて、よお、と返すだけで、他に言葉を掛けてくれるでもない。しかも、なぜかいつも物凄く不機嫌そうな顔をしていて、とても拓夢の方から声を掛けら

れる雰囲気ではない。少なくとも新歓コンパの翌日に会った時には自分を心配して声を掛けてくれたのだ。自分では気付かないうちに何か気に障ることも言ってしまったのではないかと思い、佐竹にそれとなく尋ねると、反対にニヤリと笑いながら『気になる？』と問い返された。

「そういうんじゃないんですけど……何か失礼なことでもしちゃったかなあとって……」

思わず声を落として言うと、佐竹が眉を上げて笑う。

「ああ、心配ないよ。アレが怒ってるのは俺にだから」

「え？」

拓夢が驚いて目を見開くと、佐竹は意味ありげな目をしてフンと笑った。

「でも、これ以上は教えてあげない。フェアじゃないからね」

そしてそう言うと、不意に前方に視線を移して目を細めて笑う。

「やあ、綺麗だな」

見ると、大きな街路樹に挟まれて、桜の木がポツンと一本立っている。別の通りにある桜並木はキレイにライトアップされているが、この木は一本だけなので見向きもされないのだろう。昼間なら綺麗な花に目を細めて立ち止まる人もいるだろうが、こんな暗がりでは誰の目にも留まらない。思わず歩み寄った拓夢は、重たいほど咲き誇っている小さな花々を見上げて、うわあ、と小さく声を上げた。

「綺麗だなあ……」

見れば、満開を過ぎた花びらが風も無いのにヒラヒラと舞い下りている。ほんのりと薄ピンク色に染まった花びらが街灯の薄明かりを受けてクルクル回りながら落ちていく様を眺めながら、拓夢はそのあまりの美しさに思わずうっとり目を細めた。

「綺麗ですね、部長」

思わず感動して隣を見ると、しかし佐竹は桜ではなく拓夢を見ていた。いつにない真剣な眼差しに、拓夢の心臓がドキリと大きく音を立てる。思わず声も出せずに見上げていると、暫しジッと拓夢の顔を見詰めていた佐竹が、やがてそっと口を開いた。

「拓夢ちゃん、あの時の約束……憶えてる？」

「あの時……？」

拓夢はそう尋ね返しながらも、その場面をしっかりと思い出していた。そう、あの新歓コンパでの佐竹の言葉である。

『じゃあさ、一週間やるよ』

そう言って、佐竹は拓夢に告白の予告をした。一週間後にもう一度告白をするから、その時に返事を聞かせて欲しいと。てっきりアレは飲み会のノリだと思っていた拓夢は、佐竹の真剣な声と眼差しに狼狽える。なんと答えていいのかわからなくて戸惑っていると、瞳を揺らす拓夢を見て佐竹が笑みを深めた。

「そんな可愛い顔してると食べちゃうよ、拓夢ちゃん」

そしてそう言うと、不意に屈み込んで拓夢の額に素早く口付ける。

「うわッ……！」

拓夢は慌てて手の平で額を押さえると、真っ赤になって佐竹を見上げた。

「ぶ、部長ッ？」

大きな目を更に大きくして責めるように言うと、佐竹がハハハと笑いながら再び歩き出す。

「二人だけの内緒ねー」

(完全に揶揄われてるし……！)

拓夢はムウと唇を尖らせて暫くその場に立っていたが、早くおいでー、と呼ばれて慌ててその後を追いつけた。

「じゃあ、気を付けて帰ってね」

大学の敷地を出ると十字路になっている。最初の頃は送って行くよと言われたのだが、さすがに女の子ではないので断ったので、拓夢はいつもここで佐竹と別れる。佐竹はここを右に曲がり、拓夢は間逆の左に曲がる。

「部長もお気を付けて」

そう言って小さく手を振ると、佐竹は嬉しそうに笑って手を振り返した。

(しまった、怒ってたんだっけ……！)

うっかり忘れて手を振ってしまった拓夢は、しかしすぐに諦めて苦笑する。おデコにキスなんて、きっと大人の佐竹にとっては何でもないことに違いない。そのまま自転車に跨り、漕ぎ出そうとした拓夢は、何気なくもう一度佐竹を振り返った。

(あ……)

スタスタと歩き去る後ろ姿を想像していた拓夢は、驚いて一瞬目を見開く。きっと自分のことを心配しているのだろう。視線の先で、こちらを見ながらゆっくりと後ろ向きに歩いていた佐竹が再び笑顔を浮かべて手を振った。

(いい人……なんだよね……)

郷里を離れて知人のいないこの大学を選んでしまったことを寂しく思ったのは入学初日だけで、今では毎日が楽しくて仕方がない。それはひとえに、佐竹が毎日拓夢の相手をしてくれたからだ。佐竹と映画を観たり、他愛ない話をしたり、時には勉強を見てもらったりして過ごす時間はとても楽しく、拓夢は部室に行くのが楽しくて仕方がなかった。

拓夢よりも五つ年上の佐竹は、とても大人で魅力的な先輩だ。生来のリーダー気質が人を惹き付けるのか、学内を歩いているとすぐに何人もの人が声を掛けてくる。それらに明るく返事をしながら、佐竹は、どこの誰々だよ、と拓夢に紹介してくれる。もちろん全員など覚えられるわけではないが、相手はなぜか拓夢のことを覚えてくれていて、教室がわからずにウロウロしていたりすると、すぐに誰かが声を掛けて助けられることが増えた。何だか凄い後ろ盾が出来たようで、これもひとえに佐竹の恩恵と思い感謝している。人としてもリーダーとしても素晴らしい佐竹を、いつしか拓夢も尊敬し、慕うようになっていた。

しかし、だからと言って同性の佐竹と付き合えるかと言うと、それとこれとは話が別である。どうしたらいいのだろうか拓夢は真剣に思い悩む。ふと脳裏に浮かんだのは、なぜか不機嫌な顔をして口をへの字に曲げている須崎の顔だった。

(やっぱり断るしかないよね……)

翌日、近所のスーパーでアイスを買った拓夢は、佐竹が書いてくれた略地図片手にそのアパートへと向かった。大学の構内を出て繁華街を過ぎると、すぐに同じようなアパートがいくつも立ち並ぶ一角に出る。その一番外れにある木造のアパートを見た拓夢は、すぐにそこだと確信した。

「すごいボロ……」

元は黒かったであろう屋根瓦は緑に苔むし、壊れた雨樋からはペンペン草が生えている。木造の壁板はかなりの年代もので、蛇腹に組まれた板の隙間からはベージュ色の土壁や藁のようなものが覗いていた。窓枠も板チョコのようなレトロな格子で、もちろんアルミサッシではなく木製だ。これだけは頑丈な造りの一枚板を使った扉は、元は茶色かったようだが真っ白に色褪せている。その一階の右側、開け放された玄関の奥から賑やかな笑い声が聞こえるのに気付き、拓夢はその戸口に恐る恐る近付いた。中からダハダハ聞こえる大きな笑い声は、間違いなく丸山のものである。

「こんにちはあ……」

呼び鈴は見当たらないので声を掛けると、すぐに拓夢の声を聞きつけたらしい佐竹が、ほいよ一、と答えながら顔を出した。

「おっ。拓夢ちゃん、いらっしやい。すぐにわかったかい？」

「はい」

拓夢は常と変わらぬ佐竹の笑顔にホッと笑みを浮かべると、持って来た袋を差し出す。

「差し入れです。アイスだからすぐに冷凍庫に入れてくださいね」

「お、サンキュー。気を遣わせちゃって悪かったね」

佐竹は笑顔で袋を受け取ると、さっそく拓夢を自分の部屋へと招き入れた。狭い三和戸の奥は六畳ほどの板の間で、ダイニングキッチン兼居室スペースになっているらしく、真ん中にコタツが置かれている。右手にトイレと風呂場らしき擦りガラスのドアがあり、左手はキッチンスペースになっていた。正面に襖があるところを見ると、きっとその奥が寝室になっているのだろう。拓夢が物珍しげにキョロキョロしながら入っていくと、コタツの両側に座っていた丸山と細川が拓夢を見上げた。

「おっ、来た来た～。拓夢ちゃん、今日も可愛いね～～～」

いつから飲み始めたのか、真っ赤な顔をした丸山がロレツも怪しく目尻を下げる。

「げっ。丸山先輩、もうでき上がっちゃってるんですか？」

驚いて尋ねると、真っ赤な丸山とは対照的に、こちらは青い顔をした細川が目を半目にしてフツと笑った。

「なんたって俺たち、昼過ぎから飲んでるからねえ」

見れば、コタツの上には食べ散らかした食べ物の残骸と空になったビールの空き缶がたくさん並んでいる。

「こいつら、午後は講義が無かったみたいでさあ。帰ったらもうこの状態だったんだよ。でも大丈夫、拓夢ちゃんの食べ物ちゃんと死守してあるからねー」

どうやら佐竹の家は誰でも出入り自由らしい。佐竹はそう言うと、奥の席に散らばっていた菓子袋を足でどけて拓夢を呼んだ。

「とにかく座って座って。改めて乾杯しよう！」

促され、拓夢はとりあえず指定された席に座る。

「ほい、丸山！」

佐竹に促されて、丸山がニヒヤニヒヤ笑いながらビール缶を持ち上げた。

「では、我がサークルのお姫さま、拓夢しゃんの美貌と健康と健やかな下半身の成長と〜……」

「あーはいはいはい」

丸山のセクハラまがいの言葉を佐竹が遮る。

「んじゃ、お疲れさ〜〜〜ん」

佐竹はそう言ってビール缶を目の前に掲げると、拓夢の炭酸飲料の缶にコツンと当ててから喉を逸らしてグイッとあおった。ゴクゴクと旨そうに一気飲みし、プハーッと盛大に息を吐く佐竹の豪快な飲みっぷりを呆気にとられて見詰めていた拓夢は、ほら飲んで飲んで、と促されてようやく我に返る。拓夢は細川と丸山のビール缶にも遠慮がちにチョココンと当てると、ジュースの缶に口を付けた。次に佐竹はあらかじめ避難させておいたらしい食料を奥の部屋から運んで来ると、それを拓夢の前に並べ始める。大きなピザやサンドイッチ、豪華なオードブルの数々に、拓夢は驚いて目を瞬（しばた）かせた。

「な……なんか豪勢ですね」

てっきり酒のつまみが出て来るのだらうと思っていた拓夢の言葉に、佐竹が笑いながら返す。

「隣のアパートに住んでるオバさんがスーパーの惣菜に勤めててさ。顔出すといつも安くしてくれんだ」

佐竹はそう言うと、さあ食おう食おう、と言って、さっそく大きなピザを手を取った。

「須崎は何時頃来るんですか？」

ピザを頬張る佐竹に、細川が尋ねる。

「今日はフルコースだから一時過ぎになるって言ってたなー。食いモン残しといってくれて言われたんだけど、こんだけあればなんか残るだろ」

佐竹はそう言うと、それでもピザやサンドイッチを別皿に移し始める。それを何とはなしに見詰めながら、拓夢は尋ねた。

「須崎先輩はバイトを掛け持ちしてるんですか？」

「そうそう。酒屋とフロ屋とパチンコ屋。勤労学生だからね、アレは」

佐竹の言葉に拓夢は驚く。親の仕送りに頼りきりの自分とは大違いだった。

「ちょっとオヤジさんとイロイロあったみたいでさ。親を頼りたくねーんだろ、きっと」

佐竹はそう言うと、ヒョイと眉を上げて拓夢を見る。

「気になる？ 拓夢ちゃん」

「別にそういうんじゃないですけど……」

拓夢は慌ててそう言うと、缶ジュースをグイと空けた。次の飲み物を探してコタツの上を見ると、オレンジの絵の描いてある綺麗なビンが目に入る。

「これ、飲んでもいいんですか？」

誰にともなく尋ねると、隣の丸山が、いいよ〜、と答えた。

「それは拓夢ちゃんの為に持って来ただから〜」

丸山の上機嫌な言葉に、拓夢は遠慮なくアルミキャップを捻る。途端にビンの中で細かな泡が立ち、オレンジの甘い香りが鼻腔をくすぐった。

「あ、いい匂い……」

グラスについて飲んでみると、すっきりと甘くて飲みやすい。どこのメーカーだろうと思って裏を見ると、どうやら外国のものらしく、英字がズラリと並んでいた。

「須崎に何か用なのか？」

佐竹がオードブルのエビフライにかぶり付きながら尋ねると、細川が頷く。

「本格的に撮るとなると、その前に資金集めをしなくちゃなりませんからね」

「うおッ、撮るのかッ？」

途端に丸山が色めき立ち、反対に佐竹は腕を組んでウウムと唸る。しきりに何事か考えていたが、やがて顔を上げると頷いた。

「よし、撮るか」

「前回の須崎の『蕎麦打ち』は至上稀に見る売り上げでしたからね」

佐竹の言葉に細川が返す。黙ってみんなの会話を聞いていた拓夢は、ちょっと驚いて目を丸くした。

「須崎先輩って蕎麦打ちも出来るんですか？」

途端に佐竹が、まさか、と言って笑う。

「それこそ図書館で本借りて来て、必死になってマスターしたんだよ。ああいう、何事に対しても手を抜かない性格は実に素晴らしいと思うね」

佐竹の言葉に、細川も大真面目な顔でしきりに頷く。

「あれは真面目にやればやるほどウケますからね」

「ウケる？」

『蕎麦打ち』と『ウケる』が繋がらずに拓夢が小首を傾げて尋ねると、丸山がイシシとイヤな笑い方をして言った。

「蕎麦打ちビデオには、オマケビデオが付いたんだよ。これがみんなに大ウケでね～」

拓夢はますます意味がわからない。キョトンとしていると、丸山が説明した。

「蕎麦打ちを撮ったビデオをチョチョイと加工して、裏ビデオにしたんだよ～。これの前評判が意外に良くてね～。あっという間に予約だけで全部売り切れちゃったの～」

「はあッ？」

拓夢は驚いて目を丸くする。その顔を見て佐竹が笑った。

「ビデオって言ってもDVDなんだけどね。そのうち見せてあげるよ」

佐竹はそう言うと、須崎がいない時にね、と付け加えてウプブと笑う。

「須崎先輩は知ってるんですか？」

思わず問うと、佐竹は、もちろん、と答えて頷いた。

「初めからそのつもりで撮ってるからね」

拓夢はその言葉に、新歓コンパの席での須崎の言葉を思い出す。

『我侬なんて言ってませんよ。注文通り何でもしてるじゃありませんか』

あれはそういう意味だったのかと、拓夢はようやく納得する。そして、ハタと気付いた。

「もしかして僕も撮るんですかッ？ 蕎麦打ちビデオッ？」

慌てて尋ねると、丸山がイッシッシと目尻を下げて笑う。

「拓夢ちゃんは蕎麦打ちなんか撮らないよ～」

その言葉に拓夢はホッと胸を撫で下ろしたが、しかし、安心するのはまだ早かった。

「拓夢ちゃんは何にしましょうね」

細川の言葉に、佐竹がウウムと唸って腕組みをする。

「可哀相だから簡単なのにしてやろう」

その言葉になんとかホッとしたのも束の間、バナナ、ソフトクリーム、チュッパチoppス、と三人が口々に美味しそうな名前を並べ出したのを聞いて拓夢は慌てた。

「もしかして食べるんですかッ？」

思わず尋ねると、細川がうっすらと目を細めて笑う。

「違う。舐めるんだよ」

(ひえッ……！)

拓夢はその言葉に思わず仰け反る。すると、拓夢の引きつった顔を見て佐竹がアハハと笑った。

「大丈夫。拓夢ちゃんは普通にしていっていいからねー。後はこの二人が上手に加工してくれるから」

「後で声を貰うね。裏ビデオなんて『あ行』と『ん』があれば作れるんだから」

細川にサラリと言われて、拓夢は思わず顔を赤くする。

「カツラ着けてメイクして、絶対に拓夢ちゃんとはわからないようにしてあげるから大丈夫だよー」

そう言って佐竹に頭を撫でられたが、いったいどこが大丈夫なのかがわからない。これではビデオサークルではなく『エロビデオサークル』ではないかと思った拓夢は、新歓コンパの店の入り口で『ビデオサークルです』と言った時の須崎の呆れたような顔を思い出し、その表情の意味を理解してどどんと落ち込んだ。(AV好きだと思われてたらどうしよう……)

今更ながらに焦る拓夢を尻目に、しかし先輩たちの打ち合わせはどんどん続いていく。

「じゃあ、高科に言ってちょっと台本書いて貰うか。須崎とのデートなんてのもいいな」

「自己投影しますからね。ファンが喰いつくこと間違いなしですよ」

佐竹の言葉に、細川がフッフッフと笑って言う。

「お前もワルよの～、細川屋」

「いえいえ、お代官様こそ」

よくわからない三文芝居を始めた二人を尻目に、丸山はバッグの中からノートを取り出すと、それを広げて鉛筆を構えた。

「拓夢ちゃんは卵型の顔してるから～、髪はこんな感じでこんな風にメイクして～、服はこんな感じでこうこう。どう？」

サラサラサラッと描いて見せられた絵は、とてもむさ苦しい男が描いたとは思えないほど可愛くて、拓夢は驚いて目を丸くする。

「特技ですね！」

思わず力を込めて言うと、丸山は絵を持った手を少し離して眺めてからニヘラと笑った。

「任しといて～。自分で観てもヌケちゃうくらいの凄いビデオにしてあげるからね～」

「や……それは……」

拓夢は丸山の言葉に思わずヘドモドする。コメントに困ってグラスの中のオレンジジュースをクイッと飲むと、途端に目の前がクラリと揺れた。

「あれ……？」

一瞬地震かと思って天井を見るが、木製の格子で出来た古い電気の傘はピクリとも動いていない。再び視線を下に降ろすと、再び目の前がグニャリと揺れた。

「あれ？」

拓夢の言葉に、細川とあれこれ打ち合わせをしていた佐竹が視線を向ける。

「どうしたの、拓夢ちゃん？」

「ちょっとなんか変で……」

拓夢はそう言うと、クタリとコタツの上に突っ伏して目を閉じた。

「あッ！」

その頭上で、佐竹が慌てたように声を上げる。

「誰だよ、拓夢ちゃんにアルコール飲ませたの！」

「え、それってジュースじゃないんですか～？」

「こういうのって意外とアルコール度が高いんですよね。飲み口もいいし」

三人の声が急激な眠気と共にどんどん遠ざかっていく。こんな所で眠ってはいけないと思ったのも一瞬で、拓夢はすぐにどうでもよくなると、自分からさっさと意識を手放した。

目を覚ますと、黄色い豆電球が目に入った。一瞬、田舎にある母親の実家に来たような錯覚を覚えた拓夢は、すぐにここが佐竹の部屋なのを思い出す。どうやら自分は布団に寝かされているらしく、既に誰の話し声もしなかった。

(やば……)

体を起こそうと思った拓夢は、不意に何かが視界の隅で動いたのに気付いてドキッとする。見ると、枕元にある座卓の横で、佐竹が一人で缶ビールを傾けていた。

「部長？」

遠慮がちに声を掛けると、佐竹がひょいと拓夢を見る。

「お、起きたのか？」

「はい。すみませんでした」

申し訳なく思いながら謝ると、佐竹はニッコリ笑って再びビールを傾けた。

「あんまりよく寝てたからさ、拓夢ちゃんの寝顔を肴に吞ませて貰ったよ」

佐竹の冗談に、拓夢は思わず苦笑する。

「今何時ですか？」

寮の門限はとっくに過ぎてしまっただろう。今夜はここに泊めて貰おうかと思って尋ねると、佐竹はそれには答えずに、拓夢の寝ている布団に手を突いた。

「部長？」

佐竹がゆっくりと身を乗り出して、電気の傘と重なる。豆電球の光が遮られて逆光になり、佐竹の表情が見えなくなった。

「拓夢ちゃん……あの時の返事、聞かせてくれる？」

「え……」

途端に拓夢はドキリとして慌てる。すぐ上に佐竹がいるので体を起こすことも出来ないまま、大きく目を見開いて見上げていると、佐竹の顔がそっと近付いてきた。

「拓夢ちゃん」

「ぶ、部長ッ？」

拓夢は慌てて声を上げると、両手を伸ばしてその胸を押し返す。

「すみません、部長ッ。部長のことは尊敬してますし大好きですけど、そういう意味では考えられなくて……！」

必死に言葉を選びながら断ろうとすると、手首をやんわりと掴まれた。

「いいよ、それでも。少しずつ好きになってくれればいいから」

優しい声音でそう言いながら、黒い影が拓夢の上にのし掛かって来る。

「すみません、部長。でもッ……！」

「優しくするよ。絶対に大切にする」

必死で押し留めようとする拓夢に佐竹はそう言うと、ゆっくりと顔を近付けてきた。

「部長ッ……！」

拓夢は夢中で顔を背けると、座卓の上を見てハッとする。

「いったい何本飲んだんですか、部長！」

座卓の上にはビールの五百ミリリットル缶が何本も立っている。その全てのプルが外れているのを見て

拓夢は慌てた。目の前の佐竹は完全に酔っていて、既に正気の『たが』が外れている。

「あッ？」

突然温かな手の平で腹を撫でられ、拓夢は慌てる。シャツの内側に入ってきた手はまっすぐ胸まで上がって来ると、小さな突起を探り当てて指先で摘んだ。

「やめッ……部長、やめてくださいッ……！」

必死に手首を掴んで引き剥がそうとするが、佐竹の手の平は拓夢の胸の上から動こうとしない。再び敏感な部分をコリりと捻られて、拓夢は思わず声を上げた。

「あッ！ む、無理です、部長ッ！ 部長ッ……！」

「大丈夫。痛いことはしないよ、拓夢ちゃん。気持ちイイことだけしよう」

佐竹が拓夢の耳元で甘く囁く。拓夢は思わずゾクリと身を震わせると叫んだ。

「や……やだッ！ 助けてッ……！」

（須崎先輩ッ……！）

その時。

ドンドン、とドアの方で大きな音がして、佐竹の動きがピクリと止まる。

「遅くなりましたー」

聞き覚えのある声がして、誰かがドカドカと襖一枚隔てた隣の板の間に入って来た。

「悪いが取り込み中だ。こっちには入って来んなよ」

佐竹が隣に向かって声を掛けると、途端に目の前の襖がスパンと音を立てて開けられる。

「遅くなってすみません、部長」

入って来るなど言われたにも関わらず、襖を全開にした須崎はそう言うと、佐竹に組み敷かれている拓夢をチラリと見た。

「食いモンは向こうだ。何でも好きなモン持ってっていいから、何も見なかったことにして早いところ閉めろ」

いつにない硬い口調の言葉に、須崎が再び視線を戻して言う。

「何でもいいんですね」

そしてそう言うと、ズカズカと部屋の中に入って来て拓夢の手首を掴んだ。

「じゃ、コレ貰って行きます」

「はあッ？」

須崎の言葉に、途端に佐竹が目を見開いて声を荒げる。

「お前にはちゃんと一週間あげただろッ？」

その言葉に、それまで無表情だった須崎がムッと顔をしかめた。

「俺が毎日バイト入ってるの知ってるくせに、よく言いますよね」

ツケツケとしたその言葉に、今度は佐竹が顔をしかめる。

「何も時間は放課後ばかりじゃねえだろ。努力しないお前が悪い」

佐竹の言葉に、途端に須崎の頬がヒクリと震えた。拓夢は何が何だかわからないまま、呆然と二人の顔を交互に見る。

「来い、拓夢」

須崎が視線を向けて拓夢を呼ぶ。

「行くな、拓夢ちゃん」

佐竹が静かな声音で拓夢を引き止めた。

「拓夢」

よく響く低音の声音で再び名前を呼ばれて、拓夢は弾かれたように起き上がる。そして、須崎に引き寄

せられるまま思わずその体にしがみ付くと、それを見た佐竹が驚いたように口をポカンと開けて言った。

「いったいいつどこで手を出したんだ、須崎」

呆れたような佐竹の言葉に、須崎が心外そうに顔をしかめて返す。

「決まってんじゃないですか。新歓コンパの店の前ですよ」

「もう泣くな」

門限を過ぎると寮には入れないので、須崎が部屋に泊まらせてくれた。隣に佐竹がいると思うと気が引けたが、それでも他に行く所が無いのだから仕方が無い。寝室の隅で膝を抱えて顔を伏せていると、須崎にポンポンと頭を優しく叩かれた。

「……泣いてません」

拓夢は膝の上に顔を伏せたまま答えると、更に膝を抱え寄せる。

「じゃあ、俺が怖いのか？」

思わぬことを聞かれて驚いた拓夢は、慌てて顔を上げると首を横に振った。

「すみません。そうじゃありません。ごめんなさい」

親切で泊めてやったのに警戒されては須崎だって心外だろう。慌てて謝ると、須崎がフッと笑って隣にしゃがむ。

「冗談だ。別に謝らなくていい」

そしてそう言うと、手に持っていたマグカップを拓夢に差し出す。

「ホットミルクだ。体が温まる」

須崎の優しい声音に拓夢はホッとすると、手を伸ばしてそれを受け取った。

「……ありがとうございます」

そっとマグカップに口を付けると、温かい湯気が鼻先を撫でる。思わず目元を緩めると、須崎が再び口を開いた。

「部長はいい人だが、酒が入ると人が変わる」

「知ってます……」

拓夢は須崎の言葉に小声で返す。佐竹が酔うと理性が吹っ飛ぶことは新歓コンパの時に見て知っていた。「なら、なぜ部長の部屋に一人で泊まった。部長には一度口説かれてる筈だ。それとも部長になら抱かれてもいいと思ったのか？」

責めるのではなく真意を問うような静かな声音に、拓夢は思わず顔を上げる。

「違います。ジュースだと思って飲んだらお酒だったみたいで、いつの間にか眠ってしまって、それで気が付いたら……」

「他の先輩たちに置いて行かれた後だったってわけか……」

拓夢の説明に、須崎が小さく舌打ちをする。

「ったく、何考えてんだよあいつら……」

細川も丸山も佐竹の酒癖をよく知っている筈である。須崎は思わず視線を外して毒づくと、再び拓夢を見て言った。

「じゃあ、部長には『俺が貰った』と言っておく」

「は？」

拓夢は須崎の言葉の意味がわからずに目を見開く。意味を問うように見上げると、須崎は至極真面目な顔で説明した。

「俺と付き合っているとさえ、部長ももう手を出しては来ないだろう」

「それって、僕と須崎先輩がってことですか？」

慌てて問うと、須崎が心外そうに眉を寄せた。

「俺が相手では不服か？」

「や、そうじゃありませんけど……！」

真面目な顔で問われて、拓夢は慌てる。

「でも、変な噂とか立てられてしまったら須崎先輩に迷惑が掛かってしまいますし……！」

必死に考えながらそう言うと、須崎は、なんだそんなことか、と言って眉根を解いた。

「じゃあ決まったな。俺から部長に言うておくから、明日は普通に部室に行くんだぞ」

「え、でも……！」

佐竹とこんなことになってしまっは、もうサークルを辞めるしかないと思っていた拓夢は戸惑う。

「大丈夫。部長はフラれたくらいでヘソを曲げるような人じゃないから。それに……」

須崎はそう言うと、不意に言葉を切って拓夢を見た。

「それに……？」

拓夢が問うと、須崎はそれには答えずに再び口を開く。

「とにかく、後は俺に任せておけ。お前は今まで通りにしていればいい。いいな？」

須崎はそう言うと、わかったな、と言って拓夢の頭の上にポンと手を載せる。

「はい……」

拓夢はその言葉に小さく頷くと、思わずそっと溜息をついた。

「……こんにちはあ」

そっとドアを開けると、今日も佐竹は部屋の真ん中にあるテーブルに頬杖を突いて、壁際に下がっているスクリーンを眺めていた。

「おっ、拓夢ちゃん」

拓夢が声を掛けるとパッと体を起こし、手を伸ばしてプロジェクターを止める。その顔が嬉しそうに笑んだのを見て、拓夢はホッとしながら室内に入った。入り口脇にある椅子の上に荷物を置き、既に自分の指定席となっているスクリーン正面の席に腰を下ろす。佐竹はさっそく窓辺に行くと、湯沸しポットの湯で拓夢の大好きな銘柄の紅茶を淹れてくれた。

どうやら須崎は昨夜の言葉通り、佐竹と話をつけてくれたらしい。気まずい雰囲気だったらどうしようかと思っていたが、佐竹の笑顔には屈託が無かった。それでも昨夜のことに触れるのはやめておこうと思っていた拓夢に、突然佐竹が尋ねる。

「拓夢ちゃん、本当にあんな奴でいいの？」

「え？」

拓夢は驚いてその顔を見返す。

「須崎なんて、ちょっと顔が良くて、ちょっとスタイルが良くて、ちょっと頭が良くて、ちょっと女にモテるだけだぞ？」

その言葉に、途端に拓夢はカアッと赤くなって狼狽えた。

(そういえば……)

自分は須崎と付き合い始めたことになっているのだと思い出して、拓夢は急に恥ずかしくなる。耳まで真っ赤にして見上げると、途端に佐竹が、ありゃりゃ、と言って溜息をついた。

「こりゃ『ゾッコン』かあ。まいったなあ」

そう言って笑った顔は全然『参った』顔ではなくて、どちらかと言うと喜んでいるようにも見える。

「いったいどこが良かったの？」

突然問われて、拓夢は答える。

「声……が……」

思わず言ってしまうしてから、カアアッと更に赤くなった。ドッと全身に汗をかきながら俯くと、そこへガチャリとドアを開けて須崎が入って来る。

「お、須崎ちゃん。昨日はどうもね～」

佐竹が片手を上げてヒラヒラ振ると、須崎はそれへ、どうも、と返し、真っ赤になっている拓夢にチラと視線を向けた。

「……なんで赤くなってんだ？」

理由を問われて、拓夢は一瞬答えに窮する。まさか佐竹の質問にバカ正直に、須崎の声が好きだと答えてしまったからだとも言えずに狼狽していると、須崎は微かに眉を寄せて視線を外した。

「今日もこれからバイトなのか？」

佐竹の問い掛けに、須崎がその顔をジッと睨むように見詰めてから小さく頷く。

「すみません。生活かかっているもんで」

皮肉めいたその言葉に佐竹は驚いたようにヒョイと眉を上げて、おいおい、と言うと、苦笑しながら須崎を見た。

「どうした。なにイライラしてんだ？」

佐竹の言葉に、途端に須崎の頬がヒクリと震える。拓夢は驚いて須崎を見詰めた。

「なに言ってんですか」

須崎は唇を横に引いて笑いながらそう言うと、テーブルの端に座っている拓夢に歩み寄る。そして、不意に手を伸ばすと、指先で拓夢の頬に触れた。

「悪い。今からバイトだから」

その言葉に拓夢は慌てて首を横に振る。須崎はジッと拓夢を見詰めると、クシャリと頭を撫でてから体を反した。じゃ、と手を上げて部屋を出て行く後ろ姿を見詰め、拓夢は我知らず溜息をつく。すると、それを眺めていた佐竹が同じように大きな溜息をついた。

「ほんとにあの男でいいのか、拓夢ちゃん？ 貧乏暇無しよ？」

拓夢だって出来れば須崎と一緒にいたい。付き合っているのは嘘だとしても、須崎といろいろ話したいし、須崎のことも知りたかった。趣味は何か。好きな食べ物は？好きな音楽は？好きな本は？

でも、須崎は自分で学費も生活費も稼いでいると言っていた。勉強しながらのバイト生活は決して楽なものではないだろう。それは凄いことだと思うし尊敬もしている。俯き考えていた拓夢は、顔を上げると佐竹を見て笑った。

「僕は須崎先輩のこと尊敬してます。だから大丈夫です」

拓夢の言葉に、しかし佐竹は複雑な顔をする。ポンと拓夢の頭に手を載せると、再び大きな溜息をついて苦笑した。

「我慢するだけの恋なんてツライだけだぞ？」

(恋……?)

拓夢は驚いて佐竹を見上げる。佐竹は場の雰囲気を変えようとしてか明るく笑うと、さて、今日は何を観る、と問いながら拓夢の頭をポンポンと優しく叩いた。

次の日も、そのまた次の日も、須崎は一瞬だけ部室に顔を出してからバイトに出掛けて行った。ただ以前と違うのは、行く前に必ず拓夢に触れて行くことだ。部室を出て行く前に頭を撫でるのはいつもだが、その前に必ず拓夢のどこかに触れる。頬を軽く指先で触れることもあれば、前髪を掻き分けるフリをして額に触れる時もある。昨日などはいきなり首筋に触れられて、拓夢はくすぐったさに思わず首を竦めてしまった。(なんでだろ……)

最初は佐竹に二人が付き合っていることを疑われないようにする為の偽装なのかとも思ったが、昨日は佐竹は会議があってまだ来ていなかった。部長は少し遅くなる、と言った時の須崎の言葉を思い出し、拓夢は瞳を曇らせる。

『毎日楽しそうだな』

そう言って須崎は、どこか辛そうに笑ったのだ。

『部長はいい人だろ』

須崎に問われて、拓夢は思わずその顔を見上げる。確かに酔った時の佐竹は始末に終えないが、普段は面倒見が良くて優しい、いい先輩である。素直に、はい、と答えると、須崎は微かに眉を寄せて拓夢の首筋に触れたのだ。すぐに佐竹が入って来たので須崎は入れ違いに出て行ってしまったが、拓夢はその時の表情が忘れられずにいる。あんなに複雑な顔をした須崎を見たのは初めてだった。

「どうしたの？」

不意に佐竹に声を掛けられ、拓夢はハッとして顔を上げる。

「今日の映画は面白くなかった？」

尋ねられて視線を向けると、画面はエンドロールになっていた。

「いえ、面白かったです」

今日は大好きなSF映画のシリーズものだ。封切の時に観たのだが、もう一度観たくてチョイスしたのだ。

「そう？」

佐竹がプロジェクターに手を伸ばし、映像をストップさせながら言う。途端にスクリーンが真っ白になり、拓夢は思わず視線を落とした。

「悩みなら相談に乗るけど？」

佐竹がディスクを外しながら拓夢に問う。拓夢はキュッと眉を寄せると、膝の上で両手を握り締めた。

「須崎のこと？」

佐竹の言葉に、拓夢は俯いたまま唇を引き結ぶ。

「ま、それしかないかー」

佐竹は笑うと、溜息をつきながら椅子の背にもたれた。

「どこがいいの、あんな冷たいの」

「つ、冷たくなんかないです……！」

佐竹に問われて、慌てて拓夢は言い返す。新歓コンパで迷子になっていた拓夢に声を掛けてくれたのは須崎だった。別に他人なのだから素通りすればいいものを、須崎は困っている拓夢に声を掛けてくれ、一緒にメンバーを探そうとしてくれた。決して冷たい人などではない。

「無愛想だし」

「無愛想じゃないです……！」

そうだ。あの日の須崎はよく笑っていた。親しげに目を細めて話し掛けてきた須崎の柔らかな笑顔を思い出し、拓夢はキュッと眉を寄せる。そう言えば、最近では須崎の笑顔を見ていない。なぜかいつも硬い表情をしていて、普段は強い光を宿している黒瞳も日増しに暗く沈んでいくように思えた。

「オレ様だし」

「や、それはちょっと……アレですけど……」

須崎の顔を思い浮かべていた拓夢は、佐竹の言葉に思わず口籠る。しかし、酔った佐竹に押し倒されそうになった時にドカドカと踏み込んで来た須崎は、それはそれは頼もしくてカッコ良かった。スパンと障子を開けて入って来た須崎に腕をグイと掴まれた時のことを思い出し、拓夢は思わず赤くなる。すると、その顔を見た佐竹がブハッと吹き出した。

「そんなに好きなのか！」

そして、楽しそうに笑いながらそう言うと、拓夢の頭に手を載せてクシャクシャと掻き回す。

「や、やめてくださいよ！」

慌てて佐竹の手を掴み、逃げようとしてもがいていると、そこへ突然ドアが開いて須崎が入って来た。

「お、須崎ちゃん」

佐竹が戸口を見てニカッと笑う。しかし、須崎は無言で目を細めると、ツカツカと二人に歩み寄って来て佐竹の手首を掴んだ。

「部長……俺、ちゃんと話しましたよね」

「へ？」

佐竹が何のことかと、キョトンとして須崎を見返す。須崎は更に目を眇めると、掴んでいた手を拓夢から引き剥がして払い除けた。

「俺達は付き合ってます。拓夢に手を出さないでください」

「違います、須崎先輩！ これはッ……」

須崎が誤解したことに気付き、拓夢は慌てて声を上げる。しかし、すぐに佐竹に腕を引かれて止められた。

「へえ。お前の『付き合う』ってのは、一日中放りっぱなしにしておくことなのか？」

佐竹が突然声音を落として尋ねる。途端に須崎の頬がヒクリと震え、それを見た拓夢は慌てた。

「違うんです、部長！」

しかし、慌てて言ったものの、次の言葉が続かない。須崎が自分と付き合うフリをしてくれているのは、拓夢が佐竹のアプローチから逃れる為なのだ。とてもじゃないが、佐竹本人に言うわけにはいかない。しかし、このまま須崎が悪く言われるのもイヤだった。

「調子イイのは口説く時だけで、釣った魚にはエサはやらないってか」

佐竹が更に須崎を責める。その言葉に、須崎の顔が怒りで青褪めた。

「やめてください、部長！ 違うんです！」

拓夢は慌てて佐竹の腕を掴むと、必死にそれを止めようとする。

「ごめんなさいっ、僕が悪いんです！」

すがるように見上げると、佐竹は須崎を睨んだまま首を横に振った。

「違う、こいつが悪いんだ。そうだろ、須崎」

佐竹の言葉に須崎がグッと唇を引き結ぶ。そこへ、ガチャリとドアの開く音がしてドカドカと複数の足音が入って来た。

「ち～っす。あれ、修羅場っすか～？」

呑気な声に振り向けば、大きなビニール袋を提げた丸山がニヤニヤ笑いながら立っている。その後ろには高科と細川もいた。

「お、久し振り～。よく部室の場所憶えてたな」

佐竹はそう言うと、三人にこやかに手を振る。途端に須崎が体を反して早足で戸口へと向かった。

「あッ……！」

慌ててその後を追おうとした拓夢は、佐竹に腕を掴まれて引き止められる。

「バイトだよ。放っとけて」

「でもッ……！」

困惑しながら戸口を見ると、佐竹に頭をポンポンと優しく叩かれた。

「今は頭に血が昇ってるから近付かない方がいい。人間、頭に血が昇ると、思ってもいないことをしたり言ったりしちまうもんだ。傷付けたくない人間を傷付けちゃったら、傷付けた方も傷付けられた方も心にわだかまりが残っちゃうだろ。うまくいくモンもいなくなっちゃうぞ」

「でも……」

佐竹の言葉に、拓夢は思わず泣きたくなる。須崎は佐竹のことを誤解したまま行ってしまった。それだけでも解きたいと思った拓夢はハッとす。もし須崎が自分と佐竹とのことも誤解してしまっていたら？

自分と付き合うフリをして断った筈なのに、やはり佐竹と付き合うつもりなのかと思われてしまっていたらと思い、拓夢は慌てた。

「やっぱり僕ッ……！」

居ても立ってもいられずに後を追おうとした拓夢は、しかし今度は高科にポンポンと頭を優しく叩かれる。

「何があったのか知らないけど、須崎は賢い子だから大丈夫。少しして頭が冷めればちゃんと反省するよ。話をするのはそれからでも遅くないだろ？」

高科ににっこりと笑われて、ようやく拓夢は追うのを諦める。どちらにしても、もう須崎に追いつくの

は無理である。こっそり溜息をつく、佐竹にそっと耳打ちされた。

「後でバイト先教えてやるよ。帰りに寄ってみな」

「えっ」

拓夢は驚き、目を見開いて佐竹を見る。佐竹はニカッと笑うと、さて、打ち合わせ始めるぞー、と言って、既にテーブルの周りに椅子を寄せて待っている部員たちに向き直った。

佐竹に教えられた酒屋は、飲食店や飲み屋が立ち並ぶ大通りから一本中に入った細い通りにあった。間口が一間半しかないそのこじんまりとした酒屋は、下が店舗、二階は住居になっているらしい。タバコと清涼飲料水の販売機の間にある、開けられたままの引き戸から中を覗くと、ちょうどその店の夫人と思いき初老の女性が出て来るのが見えた。小柄でほっそりとしたその女性は、白いブラウスに紺のスカートをはき、レースの縁取りのある白いエプロンを掛けている。肩の上で緩く波打っている髪はかなり白くなっていて、白髪混じりと言うよりは、ほとんどグレーに見えた。

「あら？」

その夫人は拓夢を見つけて目を丸くすると、にっこり微笑みながら頭を下げる。

「須崎君のお友達ですか？」

尋ねられて、拓夢は慌てて、はい、と答えた。

「彼の後輩で佐保と言います」

「あ、拓夢ちゃん？」

途端に夫人が嬉しそうに言い、手を合わせて微笑む。驚きながらも、はい、と答えると、夫人は、どうぞどうぞ、と言って拓夢を店の中へと招いた。

「え、いえ、そんな……」

恐縮して顔の前で手を横に振ると、歩み寄って来た夫人に反対の手をやんわりと掴まれる。

「そんなこと言わないでどうぞ。須崎君は今、主人と配達に行ってるんですけど、すぐに戻りますから、それまで良かったら私の話し相手になってやって下さいな」

年老いた手は細くて節が目立つが、柔らかくてとても温かかった。郷里にいる母は彼女よりもずっと年下だが、何となく共通のものを感じて顔を上げると、自分を見詰める柔らかな瞳と目が合った。

「ああ、素敵。本当にとても素敵な目をしているわ。須崎君から聞いていた通りね」

「え……」

拓夢は須崎が自分のことを他人に話していたのを知って驚く。いったいどんな風に話したのだろうかと考えて、ちょっと焦った。

「僕の話……ですか」

拓夢はドキドキしながら思わず尋ねる。夫人はクスリと笑うと、拓夢の手を引いて店内に入った。店の奥には四畳半の座敷があり、小さなコタツが置かれている。右手の壁際には茶筆筒とテレビと小さな仏壇が置かれ、コタツの上には蓋の付いた丸い菓子容器と、この家には不似合いなノート型パソコンが置かれていた。

「普段はあまり学校のこととか話さない人なんですけどね」

勧められるまま、上がってすぐの座布団に腰を下ろすと、夫人がその向かいに腰を下ろす。店の戸口がまっすぐ見えるその席は、きっと夫人の指定席なのだろう。夫人は慣れた手付きですぐ脇にある茶筆筒から湯飲みを二つ取り出すと、急須からコポコポと緑茶を注いだ。

「サークルの集まりがあるからと言って、珍しくバイトを休んだ次の日だったかしら。なんだかニコニコと機嫌がいいから『いいことでもあったの？』って聞いたら」

夫人はそう言うと、その時の様子を思い出したのかクスリと笑う。

『可愛い後輩が入ったんですよ』って言って、それは楽しそうに笑ってね。『よく笑うし、よく怒るし、ほんとに可愛いんですよ』って言って」

夫人の言葉に、途端に拓夢は真っ赤になる。すると、それを見た夫人が、あら本当ね、と言って再びにっこりと微笑んだ。

『笑ったり怒ったりするとすぐに真っ赤になるんだけど、その時の潤んだ目がとっても可愛いんですよ』って言って、須崎君ったらそれはそれは優しい目をして笑うのよ。須崎君は優しいけどクールな子だと思ってたから、おばさん凄くびっくりしちゃって」

それは拓夢とて同じだった。途端に座り心地が悪くなり、拓夢は正座した足をモジモジと動かす。目の前の湯飲みを手にとって熱い緑茶をひと口啜ると、その様子を柔らかな眼差しで見詰めていた夫人が再び口を開いた。

「しかも、私も主人もてっきり女の子の話だと思って聞いていたら、出て来た名前が男の子みたいでしょ？」

確認したら、『俺も最初は女の子と間違えちゃったんです。それでかなり失敗しました』って言って、かなり困ったように笑っていたわ。彼、あなたに何か失礼なことでも言っちゃったのかしら？」

夫人に問われて、途端に拓夢はまたまた赤くなる。新歓コンパの店の前で中学生の女の子と間違われた拓夢は、その後で須崎にポンと尻を叩かれたのだ。

『ケツの穴しっかり締めとけよ』

今にして思えば、それはかなり過激な忠告の言葉だったのだが、それよりも他人に尻など触られたことのない拓夢は、そのことを思い出しただけで顔が熱くなる。そう言えば、自分は須崎に尻を触られたのだ。

(うわっ……！)

拓夢は思わず赤くなって俯く。するとそこへ、こんにちは一、と言って客が店に入って来た。

「はい、いらっしゃいませ」

夫人がその声に立ち上がる。客は、これから飲み会らしい数人の若者だった。

「昼にビールを注文したんですけど。おやじさんに箱で冷やしてもらってるんです」

「ああ、はいはい」

夫人はそう言うと、店の横にある大きなドアを開ける。中は冷蔵室になっていて、缶ビールの入った大きな箱がいくつも見えた。拓夢は急いで座敷から降りると、その冷蔵室に入る。

「これですか？」

そして夫人に尋ねると、それをヨイショと持ち上げて店のカウンターまで運んだ。

「どうもありがとう。とても助かったわ」

夫人がにっこり笑って拓夢に礼を言う。

「年を取ると重いものが持てなくなってしまって。主人も腰をやってからは、もっぱら須崎君が荷物の運搬をやってくれているのよ」

夫人の言葉に、拓夢はすぐに納得する。だから須崎は講義が終わるとすぐにバイトに飛んで行くのだ。確かに老夫婦だけで酒屋をやるのは大変だろう。

「いつもありがとうございます」

夫人がレジスターを叩いて、つり銭を客に渡す。

「ありがとうございました」

にっこりと微笑むその姿を見て、拓夢も自然と笑顔で頭を下げていた。

「ただいまー」

店番をしながら二人で談笑していると、そこへ初老の男性が戻って来た。

「おや、お客さんかい？」

店主は拓夢を見とめると、目を細めてにっこり笑う。拓夢は慌てて振り返ると、座り直して頭を下げた。

「佐保です。お邪魔してます」

「拓夢ちゃんですよ」

夫人が名前を付け加えると、途端に店主が目を丸くして笑った。

「おっ、須崎君の彼女かい！」

「えっ……！」

店主の言葉に拓夢は驚いて目を丸くする。途端に夫人がクスクスと笑った。

「須崎君に毎日のようにノロケられてるんですよ。可愛い可愛いって」

「ええッ？」

夫人の言葉に、今度こそ拓夢は仰天して声を上げる。すると、その声を聞きつけて、回収したビール瓶を店の裏に片付けて来た須崎が慌てて店内に入って来た。

「拓夢ッ？」

座敷にちょこんと座っている拓夢を見て、須崎が心底驚いたように目を見開いて口を開ける。

「どうしてここにッ？」

「ご、ごめんなさい……！」

拓夢は慌てて頭を下げると、急いで座敷から降りようとした。すると、それを見た夫人が、ダメよ、と言って拓夢を引き止める。

「拓夢ちゃんは私のお客様です。まだ帰ってはダメよ」

そしてそう言うと、立ち上がってにっこりと微笑んだ。

「拓夢ちゃんも一人暮らしなんでしょ？ 良かったら一緒にご飯を食べて行きなさい。お店番を手伝ってくれたお礼よ」

「え、でも……」

拓夢は慌てて須崎を見る。須崎は気まずそうに視線を逸らすと、ボリボリと頭を掻いた。

「……食わして貰え。奥さんのメシは旨いぞ」

ボソリと言われて、座敷から降りようとしていた拓夢は再び足を上げる。

「あ、ありがとうございます」

戸惑いながらも礼を言うと、夫人は嬉しそうに微笑んで襖の奥にあるキッチンに入って行った。

「今日はすみませんでした……」

帰り道。自転車を押しながら歩いていた拓夢は、隣を歩く須崎に頭を下げる。

「いや……」

黙って歩いていた須崎は、少し間を置いてから小さく返した。

「どうせお節介な先輩の誰かが教えたんだろ」

それがバイト先のことだとわかり、拓夢は俯く。

「部長が教えてくれました」

小声で答えると、途端に須崎が変な顔をして拓夢を見た。

「部長が？」

コクリと頷くと、須崎は再び前を向いて黙り込む。暫し難しい顔をして何事か考えていたようだが、すぐに、まあいい、と言うと、口元を緩めた。

「二人とも楽しそうだったしな……」

夫人の作る料理は須崎の言葉通りにとても美味しく、そしてとても温かかった。

『拓夢ちゃんがいると場が華やぐわねえ』

彼女はそう言って、食事中もずっとニコニコしながら拓夢の顔を見ていた。

『そうだなあ』

店主も嬉しそうに笑いながら、拓夢の顔を肴に晩酌のビールを傾けていた。二人にあまりにもまじまじと見詰められたので、食べたものがよく喉を通らなかった拓夢は、その光景を思い出して思わず笑う。それに、須崎もとても楽しそうだった。店主の晩酌に付き合いながら、須崎もいつになくよく笑い、よく喋っていた。話の合間に向けられる視線に思わずドキドキしてしまったことを思い出し、拓夢は隣を歩く須崎の横顔をそっと見上げる。端正な横顔は夜目で見てもハンサムで、拓夢は半ば陶然としながら黒曜石のような瞳を見詰めた。

その艶やかな瞳が、不意に自分に向けられる。拓夢がドキリとして胸を躍らせると、須崎も慌てたように視線を逸らしてゴホンと小さく咳払いした。

「その……すまない。悪気は無かったんだが、つい……」

「え？」

拓夢は突然須崎に謝られて目を見開く。問うように見上げると、須崎は視線を逸らしたまま言った。「どうせ会うこともないだろうと思って、言っちゃったんだ。その……お前と付き合うことになったって……」

須崎の言葉に、拓夢は耳まで真っ赤になる。

「すまない。イヤだよな。二人にはちゃんと訂正しておくから」

須崎が慌てて言い、拓夢は首を横に振った。

「別に構いません。二人から聞いた時はちょっと驚きましたけど、全然イヤじゃなかったです」

イヤどころか、とても嬉しかったのだ。しかし、それは言わずにおく。

「いや、でも……」

拓夢の言葉に、須崎は視線を向けてまだ何か言おうとする。しかし、拓夢がニコニコ笑っているのを見ると、ホッとしたように目元を緩めた。

「撮影の日にちは決まったのか？」

照れ臭いのか、須崎が話題を変えて拓夢に問う。

「はい。今度の土曜日だと言っていました」

撮影日は前から決まっていたのだが、決定は天気予報次第となっていた。週間の天気予報では二日後の土曜日は晴れである。拓夢の言葉に須崎は、そうか、と返すと、何ごとか考える風に前を向いた。

「バイトは大丈夫なんですか？」

心配して尋ねると、須崎が、ああ、と答えて頷く。

「忙しいのは夕方からだからな。それまでは大丈夫だ」

「良かった」

拓夢はホッとして微笑むと、足を止めて須崎を見上げた。

「もうここでいいです。後は一人で帰れます」

大学の敷地に面したこの十字路は、サークル帰りにいつも佐竹と別れる場所である。ここを左に曲がると須崎たちのアパートが、右に曲がると拓夢のいる学生寮がある。

「先輩はまだ仕事残ってるんでしょ？　すぐに戻ってあげてください」

売り上げの管理や受注発注も、今は全て須崎の仕事だ。店を心配して言うと、須崎は拓夢を一瞬見詰めてから、ああ、と言って頷いた。

「じゃあ、気を付けて帰れよ」

そして、そう言うといつものように手を伸ばして拓夢の髪をクシャリと撫でる。その指先が、手を下ろそうとした拍子にスイと拓夢の耳を掠めた。

(あ……)

その感触に、拓夢は思わずピクリと震える。そう言えば、今日はまだ須崎に触れられていなかった。

(え……?)

その自分の思いに拓夢は慌てる。須崎に触れられることを意識しないうちに待っていたのだと気づき、愕然とした。途端に、須崎に触れられた耳郭がじんわりと熱くなる。その熱はすぐに頬に伝染し、拓夢の瞳を潤ませた。

「じゃあな。本当に気を付けて帰れよ」

須崎がそう言って拓夢に背を向け、繁華街へと戻って行く。拓夢はその場に突っ立ったまま、走り去る後ろ姿をジッと見詰めた。

「どうしよう……」

やがて須崎の背中が小さくなり、角を曲がって見えなくなる。

「どうしよう、僕は……」

途端に拓夢は寂しくなる。寂しくて寂しくて、すぐにでも須崎を追い掛けたくなる。あの角を曲がれば……あの店に行けば須崎はいるのだ。

(僕は、須崎先輩のことが、好きなんだ……)

須崎も自分も男なのに……。二人が付き合っているのは佐竹を騙す為の『見せ掛け』でしかないのに……。

一陣の夜風が吹いて、頭上の梢をザワザワと揺らす。絶望的な恋に戸惑い、拓夢の心も激しく揺れた。

「お、拓夢ちゃん。こっちこっち！」

駅に着くと、白いTシャツにGパン姿の佐竹が拓夢を見つけて大きく手を振った。

「部長っ？」

拓夢は驚いて目を見開く。

「もしかして、待っててくれたんですか？」

思わず尋ねると、佐竹はニカッと笑って券売機の方へと向かった。

「拓夢ちゃん、地元じゃないから不安だろうと思ってさあ」

どちらにしても同じ駅だしねー、と言って佐竹が笑う。しかし、何時に来るかわからない拓夢を待っていたということは、随分前から待っていてくれたということだろう。

「ありがとうございます」

恐縮して頭を下げると、佐竹が「いやいや」と言いながら券売機に札を入れる。そして、二枚指定してボタンを押すと、一枚を拓夢に差し出した。

「大丈夫。交通費も経費だからね」

佐竹は安心させるようにそう言うと、先に立って改札口に向かう。

「須崎先輩は一緒じゃなかったんですか？」

佐竹と須崎は同じアパートだ。てっきり一緒に来るのだと思っていたので尋ねると、佐竹はハハハと笑って拓夢を振り返った。

「寂しいかい？」

尋ねられて、拓夢は途端に赤くなる。

「別にそういうんじゃないですけど……」

思わず口篋ると、佐竹は再び楽しそうに笑った。

「昨日はパチンコ屋が月に一度の大掃除だったらしくてさ」

それで、遅くまで働いていた須崎はまだ寝ているのだと言う。

「どっちにしても撮影が始まるまでには準備があるからね。一時間後に来いって言ってあるから、それまでには来るだろ」

「そうですか……」

遅くまで仕事だったのでは仕方がない。そう思いながら自動改札口を抜けると、拓夢の頭を佐竹が優しくポンポンと叩いた。

「拓夢ちゃんも着替えて化粧しなくちゃね。準備が大変だぞ」

「そうだった……」

拓夢は思わず溜息をつく。これから自分は女の子の格好をして化粧をしなければならないのだ。いったいどんな顔になるのだろうかと思い、かなり憂鬱になった。

その遊園地は私鉄に乗り換えて暫く行った先の、都内とは名ばかりの僻地にあった。出来てからかなり経つと見えて、園内の雰囲気も遊具も随分古い。客層も小さな子供を連れた家族連れがほとんどで、ぼかぼかした日差しの下を園内の花々を眺めながらそぞろ歩いている姿は実にほのぼのとしていた。

「じゃあ、先に着替えちゃうからね～」

園内に入ると、さっそく丸山が拓夢を呼ぶ。どこに行くのだろうかと思いながらついて行くと、そこは予想に違わず、ログハウス風のトイレだった。恐る恐る中に入った拓夢は、意外に綺麗に掃除されている

のを見てホッとする。中はわりと広くて、男子用便器が並んでいる脇には個室が三つあり、洗面台の付いた鏡も三つ付いていた。

「はい、これね～」

丸山がそう言って、拓夢に白い布の塊を渡す。それを受け取って広げた拓夢は、思わずドキドキした。

「これって、ワンピース……ですか？」

「うん。服脱いだら、ワンピース着る前にコレ着けてね～」

そう言って渡されたものを見て、拓夢は思わず、うわッ、と叫ぶ。

「これッ……これッ……」

言葉を継げずに口をパクパクさせていると、それを見た丸山が笑った。

「ブラジャーだよ。パッド入れないとね。拓夢ちゃん、胸無いでしょ～？」

「う……」

確かに胸は無い。拓夢は思わず口籠る。

「後ろのファスナーは締めてあげるから、ワンピース着たら出て来てね～」

丸山はニコニコ笑いながらそう言うと、俯いてしまった拓夢を問答無用で個室に押し込んだ。

薄いパーカーとTシャツを脱ぎ、ベルトを外してGパンも脱ぎ捨てる。それらを脱ぎながら畳んで丸山から渡された紙袋に入れていくと、拓夢はそっとブラジャーを手に取った。

(ど……どうやって付けばいいんだろう？)

ワンピースの形を考慮してか、そのブラジャーには肩紐が無かった。パッドの部分を胸に当てて後ろでホックを留めようとした拓夢は、しかしすぐに断念する。暫し逡巡した後、それをクルリと背中に回すと、胸前でホックを留めてからグルグルと戻した。

「出来た……！」

パアッと顔を輝かせた拓夢は、しかし、自分の胸元を見下ろした途端に急に恥ずかしくなる。

(うわッ……！)

まるで本物の女の子の胸を見てしまったようで、思わず真っ赤になると、早くブラジャーを隠したい一心で急いでワンピースを被った。

真っ白なワンピースは肌に触れる部分だけが木綿の一重で、スカート部分にだけシースルーのサラリとした生地が重ねられていた。襟ぐりは横に大きく開いていて、細い鎖骨が少しだけ覗く。腹部にはピンクのサテンのリボンが縫い付けられており、両脇でタランと垂れ下がっていた。ワンピース自体はノースリーブだが、丈の短い半袖の上着が付いている。とりあえずワンピースだけ着て上着は手に持ち、いたたまれない気持ちで俯き加減に個室を出ると、その姿を見た丸山が目を丸くして笑った。

「お、よく似合ってるよ～」

そして、ニコニコ笑いながらそう褒めると、拓夢に再び個室の方を向くように言う。ジーンとファスナーの上げられる音がして、左右に垂れ下がっていたリボンが後ろでキュッと結ばれた。

「はい、オッケー。次はこれね」

丸山がそう言って、サクサクと次の物を渡す。それは踵にバンドの付いた白いサンダルだった。

「……か、踵が高くないですか？」

五センチ以上はありそうなサンダルの踵を見て、拓夢は恐る恐る尋ねる。

「これでも低い方だよ～。女の子は凄いんだから～」

丸山は笑うと、ほら履いて、と言って、そのサンダルを拓夢の前に揃えた。

(女の子のサンダル……)

拓夢は気後れしながらもスニーカーを脱ぐ。片足だけ靴下を脱いでそっと爪先を伸ばすと、白いサンダ

ルにスルリと足を滑り込ませた。

「わ……」

想像以上に踵が高くて、拓夢は爪先立ちになって思わずよろける。丸山に支えて貰いながら、もう片方のサンダルも履くと、自力で立って足下を見下ろした。

「お姫様みたいだ……」

わずかに体を動かすだけで、白いワンピースの裾がヒラヒラと揺れる。その裾の陰から真っ白なサンダルを履いた自分の爪先がチョココンと覗いていた。それらを不思議な気持ちで見下ろしながら呟くと、丸山が笑いながら言う。

「では、お姫様。どうぞこちらへ」

見ると、いつの間に用意したのか洗面台の前に屋外用の折り畳み椅子が置かれている。拓夢がそれに腰を下ろすと、丸山は背後に立って胸前にタオルを掛け、拓夢の前髪を摘んで大きなピンでヒョイと頭の上に留めた。

「じゃ、メイクするからね～。ちょっと目を閉じててくれる～？」

丸山はそう言うと、道具入れのような大きな化粧バッグの中から何やら細いガラス瓶を取り出す。そして、中の液体をコットンにしみ込ませると、拓夢の顔にピタピタと付けた。

「拓夢ちゃん、肌綺麗だね～。煙草吸ってないだろ～」

「はあ……」

拓夢は目を閉じたまま答える。

「煙草吸うと、途端に肌は荒れるし白目は濁るしね～」

丸山はそう言うと、更に乳液で拓夢の肌を整えた。

「丸山先輩、お化粧とか出来るんですか？」

ちょっと驚いて尋ねると、丸山がフフンと笑って得意そうに言う。

「可愛い萌えキャラ達に毎日お化粧をしてあげてるからね～。色塗りは得意だよ～」

ちなみに、彼の言う『萌えキャラ』とは二次元だ。

「そ……そうですか」

拓夢は丸山の言葉に力無く笑う。丸山は拓夢の前に回りこんで眉の形を整えると、下地クリームの上にクリーム状のファンデーションを薄く伸ばした。

「ファンデーションとか要らないくらい綺麗なんだけど、カメラ映りの為に少しか塗らせてね～」

そう言いながら、仕上げのファンデーションを肌の上から押さえるようにしてのせる。少し濃い目のファンデーションで陰影を付けると、薄いピンクのチークを目尻から頬のラインに刷毛で刷いた。

「はい、目を開けていいよ～。ちょっとだけジツとしてね～」

拓夢は目を開け、丸山を見る。丸山は何か金属製の器具を拓夢の目元に当てると、睫毛を挟んでクイツと少しだけ力を入れた。

「拓夢ちゃんは睫毛長いし目もぱっちりしてるから、マスカラもアイラインも要らないね～」

丸山は慣れた手付きでビューラーを移動させながら、拓夢の長い睫毛にカールを付けていく。続けて化粧バッグの中から薄いピンク色の口紅をチョイスすると、濡らした紅筆で撫でて拓夢の唇の上にスイとのせた。

「唇、少し開けて横に引いてくれる～？」

丸山が紅筆に神経を集中させながら言う。拓夢が言われた通りに唇を横に引くと、丸山は細心の注意を払って稜線や口角を仕上げながら、ようやくフッと大きく息を吐いた。

「はい、出来た。後はウィッグ付けて終わりだからね～」

そう言って取り出したのは、少し茶がかかった長いサラサラの黒髪だった。

「拓夢ちゃんの髪の毛は染めてないのに少し茶色がかってるだろ？ 探すのに大変だったんだよ～」

丸山が笑いながら言い、そのウィッグを拓夢の頭に載せる。内側に付いている金具でパチンパチンと頭頂に留めると、最後に拓夢の前髪を櫛で梳かした。

「はい、終わり。鏡見ていいよ～」

丸山がそう言って、サクサクと化粧道具を片付け始める。拓夢は恐る恐る立ち上がると、洗面台の前に立った。

「うわ……」

鏡の中で、見知らぬ女の子が拓夢を見ていた。すべすべの白い肌に細い眉。大きな瞳に長い睫毛。スツと通った鼻梁の下にはツヤツヤのぷっくりとした唇が薄く開いている。拓夢は驚いて目を瞬（しばた）たたく。鏡に向かって恐る恐る手を伸ばすと、鏡の中の少女も拓夢に向かって手を伸ばした。鏡を挟んで指先を合わせる。女の子は大きな目を更に大きく見開くと、驚いたように拓夢を見詰めた。

「可愛いかい？」

手を止めて拓夢の様子を眺めていた丸山が、満足そうな笑みながら尋ねる。

「……魔法みたいですね」

これでは誰も拓夢だとはわからないだろう。信じられない面持ちで呟くと、丸山が楽しそうに笑った。

「素材がいいからね～。俺の腕じゃないよ～」

いや、それは謙遜だ。拓夢は鏡から目が離せず、別人のようになった自分の顔をジッと見詰める。

「踵高いから気を付けてね～。転んでも着替えは無いよ～」

丸山が化粧バッグを提げて撤収を始める。拓夢は慌てて鏡から視線をもぎ離すと、屋外用の椅子を畳んでその後続いた。

「うお～～～ッ！」

トイレから出ると、途端に佐竹の歓声が拓夢を迎えた。

「可愛い、可愛い！ 拓夢ちゃん、可愛いな～～～！」

佐竹は何度も『可愛い』を連発すると、拓夢の周りをグルリと回ってチェックする。

「ちょっと裾が長かったかなあ」

膝まであるワンピースの裾をヒョイと捲った佐竹は、途端に高科に怒られた。

「他のお客さんに通報されますからやめてください」

「ケチ～」

高科の言葉に、佐竹が不満そうに口を尖らせる。

「機材の準備は済んだんですか～？」

コインロッカーに要らない荷物を預けて来た丸山に尋ねられて、佐竹は、おお、と答えて親指を立てた。

「すぐに撮影に入れるぞー。須崎が来る前に、一人だけのシーン撮っちゃうか？」

「そうですね」

高科が頷いてキョロキョロと辺りを見回す。そして、遠くに売店があるのを見つけると指差した。

「売店みつけ。あそこでアイテムを調達してから撮影場所を探しましょう」

「そうだな」

移動を始めたメンバーに付いて行きながら、拓夢は気になってチラリと入園口の方を見る。すると、それを見た佐竹が安心させるように言った。

「大丈夫。今出ると、さっきメールがあったから」

「そうですか」

その言葉に拓夢は思わずホッとして微笑む。

「須崎、びっくりするぞお。拓夢ちゃんがこんなに可愛くなっちゃっててさ」

揶揄うように言われて、拓夢は途端に真っ赤になる。そうだろうか。須崎は喜んでくれるだろうか？
(可愛って……言ってくれるかな)

思わず心の内で呟いて、拓夢は自分のその考えに慌てる。

「何言ってるんだろ……」

こんな格好をしたからといって自分の性別が変わるわけではない。しかし、それでも須崎に褒められるのは嬉しい。驚いたような須崎の顔が優しく綻ぶところを想像して、拓夢はドキドキと胸を高鳴らせた。

広場は家族連れの格好の休憩場所となっているので避け、人のいない木立の間に踏み込む。メンバーは気持ち良さそうな木陰を見つけると、足下に機材を置いてテキパキと撮影の準備を始めた。

「よし、じゃあ撮るぞー」

佐竹がそう言って、メンバー全員に指示を出す。

「木漏れ日を生かすから照明はあんまり当てるなよー。音は後で充てるから声出してもいいぞー」

「拓夢ちゃん、お腹空いてる？」

そう言って高科が差し出したのは、焼きたてのフランクフルトだった。それは行楽地ならどこにでも売っている普通のフランクフルトで、トマトケチャップと洋ガラシがその上に波状にかけられている。

「服、汚さないようにね」

高科はそう言って拓夢に渡すと、後ろに下がる。代わりに踏み台を持った細川がやって来て、それを拓夢の斜め前に置いた。

「いいですよー」

声を掛けると、撮影用のビデオカメラを肩に担いだ佐竹がやって来て、その踏み台の上に上る。

「んじゃ、リラックスして行こうかあ。拓夢ちゃんは大好きな恋人とデートしてるんだからねー」

佐竹の言葉に、途端に拓夢は緊張する。

(デート……)

自慢じゃないが、実は自分はデートというものをしたことがない。もちろん女の子と二人きりでご飯を食べたことも無ければ、映画を観に行ったことも無い。本当に色気の無い中学高校時代だったのだ。

拓夢は意を決すると、渡されたフランクフルトをジッと見詰める。デートの経験があろうと無かろうと、とにかく撮影が無事に済めばいいのだ。

(コレを食べればいいのか……)

しかし、アーンと口を開けようとした拓夢は、すぐに佐竹に、待ったッ、とストップをかけられる。

「ケチャップとカラシから先に舐めちゃってくれる？ 食べるのはそれからねー」

「……？」

服を汚さない為の用心だろうか。拓夢は内心で首を捻りながらも、一旦口を閉じて仕切り直す。フランクフルトを横にすると、遠慮がちに舌を伸ばして、たっぷりかけられているケチャップをペロリと舐めた。

「あ、フランクは縦ねー」

すかさず佐竹の指示が入る。

(縦……？)

拓夢は言われた通りに串に刺さったフランクフルトを縦に持つと、そのままもう一度舐めようとした。すると、再び佐竹が指示を出す。

「はい、目エ閉じてー」

(え……？)

拓夢はちょっと驚きながらも、言われるままに目を閉じる。完全につぶると見えないので、薄目を開けてケチャップを舐めると、途端に佐竹が小さく口笛を吹いた。

「堪らんねー」

その言葉に、拓夢は思わずギョッとして固まる。このシチュエーションは、もしかするともしかして……。
「……ッ!!!」

「あッ。ダメですよ、部長〜！ そんなこと言っちゃ〜！」

すると、真っ赤になって俯いてしまった拓夢を見て、丸山が佐竹を叱る。
「ごめんごめん」

佐竹はカメラを構えたまま謝ると、ニヤニヤ笑った。
「だってさー、拓夢ちゃん可愛い過ぎなんかも〜ん！」
「『だもーん』じゃないですよ、まったく〜！」

丸山はブリブリ怒ってそう言うと、拓夢の傍に歩み寄る。そして、真っ赤になった途端にドッと吹き出してきた拓夢の額の汗をハンドタオルで拭くと、その上からそっとファンデーションで押さえた。
「気にしなくていいからね〜。俺達はこれでも結構真面目に撮影してんだからさ〜」

丸山が拓夢の肌の具合を見ながら言う。そう言えば、拓夢に化粧を施している時の丸山の顔は真剣そのものだった。拓夢は思わず顔を引き締めると、真剣な面持ちで頷く。
「わかりました……頑張りますッ」

キッと唇を引き結んで言うと、丸山がそれを見て思わず笑った。
「張り切るのはいいけど、デートの時はもうちょっとお手柔らかにね〜」
「はい！」

拓夢は丸山の言葉にキリッと目元を引き締めて答える。
「いいね、いいねー」
佐竹は楽しそうに声を上げて笑うと、後ろに控えている高科を振り返った。

「んじゃ、すぐに次行くぞー。準備いいかー」
「はいはい」

次に高科が持って来たのはソフトクリームだった。真っ白なバニラー色のそれを受け取り、拓夢は途端に肩を落とす。
「これも舐めるんですね？」

思わず溜息混じりに尋ねると、高科がにこにこ笑いながら言った。
「今日は天気がいいから、服に垂らさないように気を付けてね」
質問と答えの内容が若干違うのは故意だろうか。高科の言葉に拓夢は、はい、と答えて頷くと、腹を括ってカメラの前でスタンバイした。
「須崎先輩がまだ来てなくて良かった……」

思わず小声で呟くと、それを聞きつけたらしい佐竹がニヤリと笑う。
「ちなみに、この位置は『須崎目線』だぞ」
佐竹の言葉に、拓夢は思わずドキッとする。そして、そっと視線を上げると、四角いガラスの奥に見える小さなレンズを見詰めた。
(須崎目線……)

途端に心臓がドキドキし始める。そう言えばこの後、自分は須崎とデートをするのだ。たとえ撮影とはいえ、大好きな須崎と並んで歩くのである。須崎への恋心を意識する前の自分だったらいざ知らず、ともに顔が見られるだろうか拓夢は焦った。

「じゃ、さっきと同じようにたまに指示出すから、それ以外は普通に舐めててねー」

普通に舐めてくれと言われても、どうしたらいいのかわからない。とにかく舐めればいいのだろうと思って舌を伸ばすと、拓夢はソフトクリームをペロリと舐めた。

(あ……)

「美味しい……」

思わず笑顔になると、佐竹がファインダーを覗いたまま微笑む。

「いい笑顔だねえ。綺麗だよー」

(綺麗……?)

言われ慣れない言葉に驚き、拓夢は思わず赤くなる。童顔で女顔の拓夢は幼い頃から『可愛い』と言われたことは何度もあるが、『綺麗』と言われたことはあまり無い。それはきっと拓夢がまだ精神的に幼くて、少女のような雰囲気醸し出しているからかもしれないが、拓夢自信にはあまり自覚が無い。

(須崎先輩も綺麗だと思ってくれるかな……)

確かに自分で見ても鏡の中の少女は綺麗だった。やはり丸山は凄いと思う。一生懸命自分を綺麗にしてくれた丸山の為にも、この撮影は何としても成功させなければならない。もう拓夢に躊躇いは無かった。

(こうなったら何でもやってやる……!)

拓夢は口を開けると、溶けかけたクリームを舌の平でペロリと舐める。すると、それを見た佐竹がニヤリと笑った。

「おっ。やっと本気出てきたね、拓夢ちゃん？」

佐竹はそう言うと、嬉しそうにカメラを構え直す。

「じゃあ、もう一回」

佐竹の言葉に、拓夢はもう一度舌を伸ばす。

ペロリ。

「もう一回」

ペロリ。

「はい、目ヲ閉じてもう一回」

拓夢は言われるままに目を閉じる。舌でゆっくり舐め上げると、途端に佐竹が小さく口笛を吹いた。

「……ちょっとヤバいんじゃない？」

「いい感じですね」

佐竹の言葉に、踏み台を押さえていた細川も満足そうにOKを出す。

「はい、そのままゆっくりもう一回……はい、ストップ」

拓夢が言われるままにソフトクリームをゆっくり舐めると、佐竹がそこでストップをかけた。

「そのままゆっくり目ヲ開けてー。目線こっちねー」

え、と拓夢は頭の中でカメラの位置を考える。

(そうだ、『須崎目線』……)

昨夜別れる間際に見上げた須崎の顔を頭の中で思い描きながら、拓夢はゆっくりと目蓋を開けてカメラのレンズを見上げる。この高さに須崎の顔が来るのだと思った瞬間、その瞳がトロリと蕩けた。

(須崎先輩……)

その瞬間、佐竹の手が素早く動く。そして、いきなり持っていたソフトクリームが拓夢の鼻の頭にぶつかった。

「うわッ？」

その冷たい感触に拓夢は驚いて仰け反り、思わず目を丸くする。

「はい、一旦ここで撮影終了ー！ 少し休憩したら、続けて二人のシーン行くぞー！」

途端に佐竹の号令が入り、みんなが一斉にワイワイと動き出した。

「え……？」

拓夢がキョトンと目を丸くして放心状態で固まっていると、すぐに丸山が寄って来て苦笑しながら拓夢の鼻の頭を拭いてくれる。

「お疲れさん。すぐに化粧直すからね～」

その言葉に、拓夢はハッとして我に返った。

（そうだ、須崎先輩！）

佐竹はすぐに二人のシーンを撮ると言っていた。ということは、須崎が到着したということだろう。慌ててキョロキョロと辺りを見回すと、少し離れた木陰のベンチで男が仰向けに寝そべっているのが見える。顔を確認したかったが、男は眩しいのか片腕を目の上に乗せているので拓夢の位置からはよく見えなかった。

「須崎ー！」

すると、休憩を終えた佐竹が須崎の名を呼ぶ。その声に、ベンチにひっくり返っていた男がのっそりと起き上がった。途端に拓夢はパッと顔を輝かせる。

（やっぱり須崎先輩だ……！）

いつもは洗いざらしのTシャツばかり着ている須崎が、撮影用なのか、今日は英字の入った黒のTシャツに薄手の黒いジャケットを羽織っている。それがとてつもなくカッコ良くて、拓夢は思わずポーっと見惚れた。

（いつからあそこにいたんだろう……）

もしや、あの撮影風景も見られてしまったのだろうかと考え、拓夢は慌てる。思わず赤くなって見詰めていると、須崎が佐竹に歩み寄りながらチラリと拓夢を見た。

（え……？）

その冷たい視線に、拓夢の心臓がドキリと大きく音を立てて震える。

（なに……？）

何故そんな目で見られるのかがわからない。何か怒らせるようなことをしてしまっただろうかと考えても、拓夢には何も思い浮かばない。少なくとも昨日は普通だった筈である。いや、どちらかというとき親しい雰囲気 で別れた筈だ。なのに、なぜ一夜明けただけで須崎はこんなにも不機嫌になっているのだろうか？

途端に、須崎に会えて浮かれ上がっていた心が暗く萎んでいく。佐竹と会話を交わす須崎をジッと見詰めていると、佐竹が『おいでおいで』と手を振って拓夢を呼んだ。

「どうだ、綺麗だろ～？ 今日の主演女優だぞ！」

拓夢が遠慮がちに近づいて行くと、佐竹が自慢するように須崎に言う。しかし、須崎の瞳は冷たいままだ。チラと拓夢を見ただけで、すぐに視線を逸らしてしまう。褒められないまでも、少しは反応を期待していた拓夢は、再びがっかりして肩を落とした。

「じゃ、今日はデートなんだから仲良くなー。普通に話とかしながらあちこち歩いてくれればいいからー」

佐竹が指示を出し、ビデオカメラを構える。

「あっ……」

撮影開始と共に早足で歩き出した須崎を慌てて追い掛けようとした拓夢は、次の瞬間下草に足を取られてガクッと前のめりに倒れた。

「うわッ……！」

「わあッ！」

拓夢の声と、それを目撃したメンバーの叫び声が重なる。勢いよく地面に倒れそうになった拓夢は、しかし、すんでのところ須崎に腕を掴まれて助けられた。

「大丈夫か」

須崎の冷たい声が、それでも心配そうに尋ねる。拓夢は青褪めた顔を上げると、どうにか頷いた。

「ありがとうございました」

礼を言うと、途端に須崎が驚いたように目を見開く。そして、ジッと拓夢の顔を見詰めると、信じられないように尋ねた。

「もしかして……拓夢か？」

「はい……？」

拓夢は腕を掴まれたまま、何のことかと須崎を見詰める。すると、須崎は突然ハッとしたように息を吞んで、慌てて拓夢を助け起こした。

「大丈夫か、怪我はッ？」

「大丈夫です」

慣れないヒールのせいで少し足首を捻ったが、須崎のお陰で怪我は無い。すると、須崎がホッとしたように息をつき、すまない、と謝った。

「その……てっきり部長がお前の代わりに誰かを連れて来たんだとばかり……」

「え……」

拓夢は驚いて須崎を見詰める。拓夢の代役と須崎の不機嫌な顔との繋がりがよくわからなかったが、それでも目の前にいる須崎はいつもの須崎だ。拓夢はホッとすると、同じように息をついた。

「良かった……いつもの須崎先輩で」

そう言って微笑むと、須崎がバツが悪そうに苦笑って赤くなる。

「……それにしても、よく化けたな」

そして照れ隠しのようにそう言うと、拓夢の付けている長いウィッグに触り、前髪に触れた。

「こっちは本物だな」

拓夢の前髪をサラリと撫でて須崎が微笑む。色も手触りもそんなに変りは無いだろうに、なぜかピタリと言い当てられて、拓夢も思わず微笑んだ。すると、前髪を優しく撫でていた須崎の手が拓夢の滑らかな額にスルリと触れる。

「あ……」

それが恥ずかしくて嬉しくて、拓夢は思わず赤くなって俯いた。

「あー、うほん！」

すると、その甘い雰囲気壊すように佐竹が二人に声を掛ける。

「イイ雰囲気のところ悪いんだけどな。大丈夫かい、拓夢ちゃん。怪我しなかったかい？」

「大丈夫です」

拓夢が笑顔で答えると、須崎が拓夢に向かって右手を差し出した。

「また転ぶと困るからな」

揶揄うように言われて、拓夢はムウと唇を尖らせる。しかしすぐに笑顔になると、嬉しそうに手を伸ばして須崎の手を掴んだ。

「大丈夫か、拓夢」

午前中いっぱい園内を歩き回り、気付いた時には拓夢の足は慣れないサンダルで靴擦れだらけになっていた。

「こりゃ可哀相だなあ。だいたい撮るべきものは撮ったし、そろそろお開きにするかー」

ベンチに腰掛けてサンダルを脱いだ拓夢の足を見て、佐竹が顔を顰めながら言う。

「すみません……」

思わず謝ると、佐竹は拓夢の頭をポンポンと優しく叩いた。

「お疲れさん。拓夢ちゃんのお陰で撮影は大成功だよ。後は丸山と細川が全部やってくれるからねー」

「任せといて～。すごいのを作ってやるからね～」

「声もだいぶ拾えたから、改めて取らなくても大丈夫そうだし」

佐竹の言葉に丸山と細川も言う。拓夢は思わず微笑んだ。

「良かったあ……」

では、頑張った甲斐はあったのだ。ホッとして言うと、須崎が拓夢のウィッグをツンツンと引っ張った。

「そうと決まれば、早くコレ着替えるよ。まだ半日あるから、ついでに遊んで帰ろうぜ」

須崎の言葉に、途端にパアッと拓夢が笑顔になる。

「いいんですかッ？」

そして、思わず嬉しそうに声を上げると、勢いよく立ち上がった。

「ちょっと待ってて。トイレは近くにあるけど、肝心の着替えがコインロッカーの中だから」

高科がそう言って、ロッカーの鍵を持って入園口の方へと走って行く。

「走らなくてもいいですよ！」

慌てて言うと、高科は笑顔で振り向き、手を振りながら走って行った。

「あー……」

それを見て、先輩を走らせてしまった拓夢は申し訳無さに肩を落とす。すると、どれ、と言って、ベンチに腰掛けていた丸山と細川が立ち上がった。

「俺たちもここで引き上げますかね」

「えッ？」

一緒に遊べるのだと思っていた拓夢は驚いて2人を見上げる。

「部長も言ったでしょ？ ここからが俺たちのお仕事だからね～」

丸山が笑顔で言い、細川も頷く。

「何たって、早いとこ DVD にして売り出して資金を集めなくちゃならないからね」

「おッ、心強いねー」

細川の言葉に感心したように佐竹が返すと、細川はノンフレームの眼鏡を直しながらチラと佐竹を見た。

「なに言ってんですか。あなたもお仕事があるでしょう、部長？」

「へ？」

その言葉に、佐竹がキョトンとして細川を見返す。

「だ・い・ほ・ん」

細川は一字一字区切りながらそう言うと、腕組みをして言った。

「資金調達のメドは立ちましたから、早いとこ映画の台本を頼んでください。これはあなたにしか出来

ないことなんですからね、部長？」

「なに言ってんだよ。まだ売れるかどうかもわからないのにさあ」

途端に佐竹がブーブーと文句を言う。すると、細川がニヤリと笑った。

「売れますよ、絶対に。これだけの俳優がいて機材も揃えて、それで売れなかったら俺と丸山は能無しです」

細川の言葉に、丸山もニヤリと笑う。二人の顔にあるのは、実際にその世界で活躍しているプロとしての自信だった。

「……うし」

その顔を交互に見て、佐竹が頷く。

「んじゃ、さっそく行って来るかー」

そしてそう言うと、荷物を持って走って来る高科に向かって大きく手を振った。

「高科ー！ これからお前んち行くぞー。サエはいるかー？」

『サエ』とは前部長であり高科の兄である。途端に高科がパアッと笑顔になる。

「いますよ～！」

嬉しそうに手を振り返す高科を見て、佐竹はチェッと舌打ちすると頭を掻いた。

「いるのか、しょーがねえなー」

ブツブツと文句を言いながら、佐竹が機材を入れたバッグを提げて出口へと向かう。高科は拓夢の荷物を須崎に手渡すと、大急ぎでその後を追いつけて行った。

「会いたいのか会いたくないのか、どっちなんでしょうね」

拓夢が不思議に思って呟くと、須崎が溜息混じりに立ち上がる。

「会いたいに決まってんだろ」

そしてそう言うと、拓夢の脇と膝裏に手を入れてヒョイと抱き上げた。

「うわッ……！」

驚いた拓夢は慌てて須崎の首にしがみ付く。

「軽いな。何食ってんだ？」

須崎は目をギュッと閉じて固まっている拓夢を見下ろして楽しそうに言うと、いわゆる『お姫様だっこ』のまま拓夢を着替えさせるべくトイレへと向かった。

何はさておき、まずはサンダルを脱いで靴下を履く。スニーカーを引っかけると、ようやく拓夢はホッとして息をついた。

「助かった～」

ウィッグの留め金を外し、長い髪を紙袋の中に入れる。顔を上げると、いつもの髪型に戻った拓夢を見て須崎が笑った。

「やっぱりこっちの方が落ち着くな」

そう言って、スイと伸ばした手で拓夢の髪を撫でる。拓夢は思わずドキリとすると、慌てて着替えの入った紙袋を掴んだ。

「それじゃ、すぐに着替えてきますから」

アタフタと個室に入ってドアを締めようとする、須崎が手を伸ばしてそのドアを掴む。

「え……」

驚いて見上げると、須崎がヒョイと首を傾げた。

「後ろ。ファスナー下ろしてやるから、後ろ向いてみな」

「え……」

拓夢は一瞬何のことかわからなくて須崎を見詰める。しかし、それがワンピースのことだと気付くと、慌

てて、はい、と答えて後ろを向いた。半袖の上着をスリと脱ぐと、素肌の肩が剥き出しになる。そのままジッとしていると、須崎が個室に入って来る気配がして、ワンピースの後ろ襟がツンと引かれた。静かな個室にファスナーを下ろす音が小さく響く。

「わ……！」

途端にフワリとワンピースの薄い布地が浮いて、拓夢は慌てて胸元を押さえた。背中にひんやりとした外気を感じ、拓夢は急に恥ずかしくなる。思わず真っ赤になって俯くと、背後で須崎が微かに息を呑む気配がした。

「……下着も付けてるのか？」

ちょっと驚いたような須崎の声音に、拓夢は耳まで真っ赤になる。

(そうだった……！)

付けるだけでも恥ずかしいのに、まさかしているところを見られてしまうとは……！

「丸山先輩が……」

いたたまれない気持ちで答えると、大笑いするかと思った須崎は無言で拓夢の両肩に触れた。

「丸山が……はめたのか？」

静かな声音で尋ねられて、拓夢は、いいえ、と答える。

「自分で……」

穴があったら入りたいとはこのことである。消え入りそうな声で答えると、途端に須崎がホッとしたように小さく息をついた。

「そうか……」

あまりの恥ずかしさに俯いていた拓夢は、次の瞬間ビクッと体を強張らせる。背後で動く気配がして、須崎の息が襟足にかかった。

(うわ……ッ?)

なぜか首筋に口付けられるような錯覚を覚えて、拓夢は思わずゾクリと背筋を震わせる。俯いたままギュッと目を閉じていると、須崎の指先が拓夢の滑らかな肌の上を滑って、かろうじて肩に引っ掛かっていたワンピースをハラリと前に落とした。

「あ……！」

途端に細い肩や鎖骨までが剥き出しになり、拓夢は慌てて胸元をギュッと押さえる。須崎はブラジャーの留め金に触れると、小さく息をこぼした。

「外してもいいか？」

背後から囁くように問われて、拓夢の心臓がドキドキと音を立てる。

「自分で出来るからいいです……」

慌ててそう断ろうとした拓夢は、しかし、それより早くプツンと留め金を外されて、ハッと目を見開くと固まった。

「うわッ……！」

いきなり締め付けが解かれた感触に、拓夢は思わず声を上げる。そして、胸元を押さえたまま振り返ると、真っ赤になって須崎を睨んだ。

「須崎先輩、エロ過ぎ！」

牙をむき出して怒る拓夢に、須崎がニヤリと笑う。

「バーカ。男はみんなエロいんだぞ」

揶揄われたのだと気付いた拓夢はムウと唇を引き結ぶと、片手で胸元を押さえたまま、エイッ、と須崎を個室から追い出した。

「いいからもう出てってください！」

「ははは。外で待ってるからな」

須崎がそう言って笑いながら外へ出て行く。拓夢はハアハアと肩で喘ぎながらドアを締めると、背を預けてギュッと目を閉じた。

(どうしよう……)

ドキドキと胸が高鳴り、いっこうに治まらない。たぶん顔も真っ赤なのだろう。耳の奥でもドクドクと動悸がしていた。

(どうしよう……！)

拓夢は必死で深呼吸をし、胸元を掴んでいた手をゆっくりと離す。ワンピースと一緒に下着が外れて、拓夢の瞳に自分の薄い胸板が映った。

「なんで僕は……」

拓夢は思わず声を震わせると、再び胸元を薄布で隠す。そして、ギュッと目を閉じて両手で顔を覆うと、震える息を吐き出した。

なぜ自分は男なのか、なぜ自分は同じ性を持った相手を好きになってしまったのかと何度自問しても答えは無い。ただ一つわかるのは、もう無かったことには出来ないほどに須崎のことを好きになってしまっているということだった。

(須崎先輩は……僕のことどう思ってるのかな……)

後輩として可愛く思ってくれているのはわかっているが、それ以上の感情はあるのだろうか。そう考えた拓夢は、不意に先程の一場面を思い出す。あの時、確かに拓夢はうなじに須崎の息を感じた。

(須崎先輩……)

名前を思い浮かべるだけで胸の内が熱くなる。止まらない恋情に、拓夢は苦しい溜息を漏らした。

外に出ると、須崎は木陰のベンチで座って待っていた。拓夢がトイレから出て来ると、スッと近付いて来て着替えの入った紙袋に手を伸ばす。

「貸してみろ」

「いいですよ、自分のですから」

慌てて断ると、いいから貸せ、と言って無理矢理取られた。

「ビールケースに比べりゃ軽いもんだ」

そう言って須崎が笑う。拓夢は思わず苦笑すると、素直に甘えることにして礼を述べた。

「何か飲みますか？ 僕、買って来ますけど」

実は撮影中に食事のシーンもあったので、二人とも腹は減っていない。

「軍資金はありますから、遠慮しないで言ってくださいね」

拓夢が丸山から手渡された『デート代』だという大枚を見せると、須崎は、豪勢だな、と言って笑った。「まずは乗りたいものを全部言ってみろ。こんな豪勢なデートは滅多にさせてやれないからな」

思わずといった風に言われて、拓夢は驚いて須崎を見上げる。須崎は紙袋を持った手を肩に担ぐと、反対の手を拓夢の背に回した。

(須崎先輩……)

再びドキドキと胸が騒ぎ出す。拓夢は自分の気持ちを誤魔化すように、わざとはしゃいでジェットコースターを指差した。

「あれあれ！ あれ行きましょう、先輩！」

施設は古いが敷地は驚くほど広く、花壇の綺麗な花々を眺めながら遊具施設の間を移動しているだけであつという間に時間は過ぎた。太陽が低くなると、木々の多い園内は途端に薄暗くなる。さすがはファミ

リ一向けの施設らしく、閉園の三十分前になると『蛍の光』が小さく流れ始めた。

「パチンコ屋みたいだな」

須崎が苦笑しながら言い、拓夢も思わず笑う。もう心残りは無いかと聞かれて、拓夢は前方の上空を指差した。

「最後にアレに乗りたいです」

見上げた先にあったのは大きな観覧車。デートの定番だ。

「貸切だな」

どの Gondola も空なのを見て、須崎が笑いながら拓夢の背を押した。

大きな観覧車は園内でも最も高い位置にあった。二人が近付いて行くと、係らしき小柄な老人が出て来てチケットを受け取る。

「もう最後だから、二周くらい乗ってくかい？」

老人は人のいい笑みを浮かべて言うと、二人が座席シートに座ったのを確認してから Gondola のドアを閉めた。

「寒くないか？」

観覧車はただでさえ高い場所にあるので風通しがいい。

「大丈夫です」

拓夢は笑顔で答えると、だんだん高くなっていく窓外を見た。

「結構広いんですねー」

広い園内にはたくさんの木々が生い茂り、その中から生え出るようにしてあちこちに遊具施設が顔を出している。中には拓夢が何度も乗ったジェットコースターのレールも見えたが、もう誰も乗る人がいないのか、動いている姿は見えなかった。

「もう、みんな帰っちゃうんだ……」

もともと小さい子連れが多いので、引き揚げるのも早いのだろう。入場門付近にはまだ何組かの家族連れが見えたが、園内にはもうほとんど人影は無かった。

「結構高いな」

須崎の言葉に拓夢は合点する。観覧車の命は見晴らしの良さだ。だから園内でも一番高い場所に造るのだろう。拓夢は視線を前方に移すと、遠くの景色を眺めた。

「大学は見えませんよね」

「ちょっと無理だな」

拓夢の言葉に須崎が笑う。早くも灯り始めた街のネオンを眺めていると、不意に近くに須崎の気配を感じた。

「楽しかったか？」

須崎が微笑みながら尋ねて、拓夢の前髪を撫でる。

「はい。ありがとうございました」

拓夢は小さく頷くと、切なくなって瞳を揺らした。楽しい時間は何故あっという間に過ぎてしまうのだろうか。この観覧車が地上に戻れば、二人の楽しいデートも終わりである。須崎はまたバイト三昧の日々に戻り、自分のことなど構ってられなくなるに違いない。思わず小さな溜息をこぼすと、須崎が、拓夢、と小さく呼んだ。

「はい」

いつの間にか俯いていた拓夢は、須崎の声に顔を上げる。目が合った瞬間、ドキリと胸が大きく音を立てた。

「すまない。いつもバイトでお前のことを放りっぱなしで……」

「そんなこと……！」

真剣な眼差しで謝られて拓夢は慌てる。しかし、須崎は首を横に振った。

「この前部長に言われた時、はっきり言って返す言葉が無かった。バイトは肉体労働がほとんどだから一日が終わるとクタクタで、余裕が無かったのはホントだ。でも、少し考えれば時間は作れた筈なんだ」

須崎の言葉に拓夢は慌てて首を横に振る。

「僕の方こそすみません！ 部長にあんなこと言われて、イヤな思いをさせてしまって……！」

拓夢はそう言うと、申し訳無さに頭を下げた。

「須崎先輩は僕の為に付き合ってるフリをしてしてくれてるだけなのに……」

人助けの為にやっているのに、あんな言い方をされては誰だって気を悪くするだろう。そう思って恐る恐る視線を上げると、しかし須崎はなぜか驚いたような顔をして拓夢を見ていた。

「須崎先輩……？」

そっと声を掛けると、須崎がハッと目を見開いて瞬きをする。

「そうだったな……」

そして呟くようにそう言うと、スイと視線を逸らして窓の外を見た。ゴンドラは既に頂上を過ぎ、地上に戻ろうとしている。同じように窓の外を見た拓夢は、再びそっと溜息をこぼした。

そう、これは見せ掛けだけの付き合いなのだ。だから須崎は無理に拓夢の為に時間を作る必要は無いし、一緒にいられないことを気に病む必要も無い。

(僕が勝手に会いたいだけで……)

そう考えた途端、ジワリと視界がブレる。拓夢は慌てて顔を逸らし、須崎とは反対の方を向いた。観覧車の後ろは自然の森になっており、木々が鬱蒼と繁っていて真っ暗だ。まるで今の自分の心の中を見ているようで、拓夢は須崎に気付かれないようにそっと目元を拭う。須崎が好きだ。ただそれだけのことなのに、それが言えないのが切なくて苦しい。もし言ってしまったら、偽物でも幸せな今の関係はきっと終わってしまうだろう。それが今の拓夢には何よりも怖かった。

「今日はありがとうございました」

特に会話も無いまま元来た駅に着くと、拓夢は須崎にペコリと頭を下げた。

「いや、俺も楽しかった」

ずっと何事か考え込むように黙り込んでいた須崎が、拓夢の言葉にようやく笑みを浮かべる。拓夢はそれを見てホッと安堵すると微笑んだ。

「よかった……」

観覧車を下りてからずっと会話らしい会話が無かったので、拓夢は須崎の気分を害してしまったのではないかと思い、心配していたのだ。しかし、どうやらそれは取り越し苦労だったらしい。須崎の笑みはいつもと同じで優しくかった。じゃあ、と言って須崎がいつものように拓夢の髪に触れようとする。その手が不意にピクリと止まったのを見て、拓夢はどうしたのかと須崎を見上げた。

「……？」

須崎がぎこちなく手を下ろし、眉を寄せて苦笑する。

「じゃあ、気を付けて帰れよ」

囁くように言われて、その言葉に拓夢は慌てた。

「須崎先輩……？」

駅には着いたが、まだ大学前の十字路までは一緒に帰れる筈である。そう言おうとした拓夢は、ハッと口を噤む。

(そうか……)

この駅に到着した時点で『デート』は終わったのだ。拓夢は瞳を陰らせ、キュッと唇を引き結ぶ。
「須崎先輩も……バイト頑張ってくださいね」

瞳を揺らしながらそう言うと、拓夢は必死に微笑んだ。

須崎の後ろ姿が、駅前の商店街の雑踏の中へと消えて行く。

(そうだ……自転車取りに行かなくちゃ……)

自転車は駅の駐輪場に停めてある。ノロノロと振り向いた拓夢は突然、よお、と声を掛けられ、驚いて顔を上げた。

「部長……？」

見れば、先に帰った筈の佐竹が駅舎の出口で立っている。拓夢は慌てて目尻を拭くと、笑顔を作った。

「今帰りなんですか？」

「おお。高科の駅はここから4、5こ先でさ」

佐竹はそう言うと、拓夢と並んで商店街を見る。

「一緒に帰らなかったのか？」

佐竹も須崎の後ろ姿を見たのであろう。尋ねられて、拓夢は笑った。

「僕、自転車なんで」

押して帰るより楽なんです、と言うと、佐竹が眉を寄せて再び商店街を見る。

「あのバカッ……！」

そしてブツブツと毒づく、再び拓夢に視線を戻してニカッと笑った。

「んじゃ俺と帰ろうな、拓夢ちゃん。自転車は俺が押してってやるからさ」

「え、いいですよ！」

拓夢は慌てて首を横に振り、佐竹の申し出を断る。

「いいから、いいから」

佐竹はさっさと拓夢の手から紙袋を奪うと、先に立って駐輪場へと向かった。

翌日。部室に行くと、珍しく佐竹はスクリーンではなく窓の外を見ていた。

「こんにちはー」

拓夢が笑顔で入って行くと、顔だけこちらに向けてニカッと笑う。

「おっ。拓夢ちゃん、今日も綺麗だねー」

軽口も相変わらずで、拓夢は思わず苦笑すると、荷物を置いて佐竹の隣に並んだ。

「何見てるんですか？」

「んー？」

拓夢が尋ねると、佐竹は眉を上げて曖昧に笑う。

「ちょっと人待ちー」

そしてそう言うと、再び窓の外に視線を戻した。どうやら部室の一番端にある窓からはペDESTリアンが見えるらしい。大学にある殆どの棟は二階に学生用出入り口があり、この歩行者専用道路で繋がれている。ということは、もうすぐここを須崎も通る筈である。そう思ってもっとよく見ようと身を乗り出した拓夢は、不意に佐竹に肩を引かれて窓際から引き戻された。

「……？」

どうしたのかと思い、キョトンとして見上げると、佐竹が拓夢を見下ろして笑う。そして、ちょっとゴメンねー、と言うと、突然拓夢の体を抱き締めた。

「部長ッ？」

拓夢は驚いて声を上げる。佐竹は、しー、と黙っているように言うと、拓夢の耳元で囁いた。

「ちょっとだけジッとしててね」

「え……？」

拓夢はその言葉に驚いて目を見開く。わけがわからないながらも言われた通りにジッとしていると、ガチャッと音がして部室のドアが開いた。

「須崎先輩ッ？」

入って来たのが須崎だと気づき、拓夢は小さく叫んで佐竹の胸を押し返そうとする。

「何やってるんだ、あんた……！」

須崎はそれを見ると、血相を変えて声を荒げた。

「ちったー空気読めよ、須崎。イイ雰囲気だったのによー」

須崎の言葉に佐竹が顔だけ向けてニヤリと笑う。

「違ッ……！」

拓夢は佐竹の言葉に驚くと、慌ててその腕から逃れようともがいた。

「喉から手が出るほど欲しいモンってのはなあ、須崎。他人から見たって魅力的なもんだ。いつまでも目の前に落ちてると思うなよ？」

「冗談はやめてくれ」

須崎が眉を寄せて低く言い、佐竹は笑う。

「何度抱いても抱き心地イいなー、拓夢ちゃんは」

そしてそう言うと、拓夢の首筋に鼻先を押し当ててスーと大きく息を吸った。

「知ってるか、須崎。拓夢ちゃんって、すっげえ甘いイイ匂いがするんだぜ〜？」

「やッ……！」

その言葉に拓夢は思わず座り込む。途端にシャツが肌蹴て白い腹部が剥き出しになった。

「やめろ！」

頭わになった素肌を見た途端、須崎が叫んで佐竹に駆け寄る。思わず拳を振り上げたのを見て、佐竹がパッと拓夢を離れた。バシッと頭上で音がして、拓夢はハッと目を見開く。慌てて頭上を振り仰ぐと、佐竹の手の平が須崎のパンチを受け止めていた。

「やっつとヤル気になったか、須崎」

佐竹がニヤリと笑って煽るように言う。須崎は顔を歪めると、間近で佐竹を睨んだ。

「拓夢に手を出すな……」

「それで？ ツバ付けて誰にも手を出さなって牽制しておいて、後は放りっぱなしで泣かすのか」

その言葉に、途端に須崎の目付きが変わる。

「あんたにはわからないッ……！」

須崎は叫ぶと、反対の手で佐竹の襟首を掴んだ。

「ああ、わからないね！ こんな可愛いのが傍にいて、指咥えてるだけのヘタレの気持ちなんかわかるもんか！」

佐竹は更に嘲るようにそう言うと、須崎の体を突き飛ばして拓夢を後ろに庇う。

「甘く見るなよ、須崎。これでも喧嘩じゃ負けたこたねーんだ」

そう言って不敵な笑みを浮かべながらファイティングポーズをとるのを見て、拓夢は思わず真っ青になると、慌てて佐竹の腰に背後からしがみ付いた。

「ダメです、部長！ 須崎先輩を殴らないで！」

拓夢は叫び、ギュッと目を閉じる。

「嘘なんです！ 僕たち付き合っていないんです！ 嘘なんです、ごめんなさい！」

言った途端に、ポロッと両目から涙がこぼれた。水を打ったようにシンと静まり返った室内に、拓夢の啞み殺した嗚咽が小さく響く。佐竹は自分の腰にしがみ付いている拓夢を見下ろすと、構えを解いて溜息をついた。

「やあっと白状したな。そういうことだったのか」

「ごめんなさい……」

ようやく毒気の取れた声に、拓夢は再び声を震わせながら謝る。佐竹は大きな手の平を拓夢の頭に載せると、撫でるように優しくポンポンと叩いた。

「つらい思いをさせちゃったな、拓夢ちゃん」

「部長……」

優しい声音に顔を上げると、手の甲で濡れた頬を拭われる。佐竹は腕を掴んで拓夢を立たせると、やにわに視線を戻して目の前にいる須崎の頭をゲンコツで怒突いた。

「何やってんだよ、須崎！ てっきりあの後告ったんだとばかり思ってたのに！」

「やめてください、部長ッ。須崎先輩は僕の為に……！」

再び殴り合い勃発かと慌てた拓夢は、急いで佐竹を止めようとする。しかし、佐竹は真剣な目をして首を横に振った。

「違うよ、拓夢ちゃん。こいつは優しいフリして困ってる拓夢ちゃんに付け込んだだけだ。そうだな、須崎」

佐竹のキツイ口調に、須崎が口を引き結んで視線を逸らす。

「どういう……」

意味のわからない拓夢が呆然と問うと、佐竹は突然ニヤリと笑って声高に言った。

「知ってたか？ こいつ、新歓コンパの時から拓夢ちゃんにメロメロだったんだぜ？」

「ええッ？」

佐竹のからかうような言葉に、先程までの真剣な空気が一気に霧散する。拓夢が驚愕に目を丸くしながら視線を向けると、途端に須崎がウツと呻いてバツが悪そうに視線を反らした。

「ところがこいつ、毎日バイトだろ？ とりあえず部室に顔を出してみたものの、拓夢ちゃんはいつも俺とイチャイチャでさあ。それでこいつは『フェアじゃない！』って怒ってたわけよ。イヤだね～、男の嫉妬は」

「誰がイチャイチャだ」

途端に須崎がすかさずツツ込む。佐竹は須崎を睨むと、バカ野郎ッ、と言って再びゲンコツで殴った。

「どうせお前のことだ。俺と付き合うフリをすれば部長も諦めるからとか何とかウマイこと言ったんだろう！ お陰で、とりあえず二、三回イカせて抱いちゃえば落ちるだろうと思ってた俺は完全に大どんでん返しだぜ！」

「えッ！」

佐竹の爆弾発言に、そう言えば自分はもう少しで佐竹に組み伏せられるところだったのだ、と思い出して拓夢は青褪める。あの時は寸前に須崎が助けに来てくれたお陰で助かったが……。そこまで考えた拓夢は、襖をスパンと開けて入って来た須崎の姿を思い出して思わず目元を染める。そうだ、あの時の須崎は最高に頼もしくてカッコ良かった。すると、それを見た佐竹が、それだよッ、と言って拓夢の顔を指差した。

「俺が騙されたのはその目なんだよ、拓夢ちゃん」

「目……？」

佐竹の言葉に、拓夢は何のことかと目を見開く。佐竹は頷くと言った。

「次の日、部室にやって来た拓夢ちゃんの目は、まさに『恋する乙女』だった。あれは演技とかで出来るよ

うな目じゃない。ほんとに須崎に惚れてる目だった。だから俺は二人がダミーで付き合ってるなんて夢にも思わなかったんだ」

途端に、今度は拓夢がウツと呻いて赤くなる。そして、驚いたように目を見開いて自分を見ている須崎に気付くと、慌てて俯いた。

「なのに、念願叶って両想いになったわりには須崎は拓夢ちゃんを放ったらかしだし、拓夢ちゃんは拓夢ちゃん、なんか須崎に遠慮してるだろ？ たまには二人きりでデートさせてやろうと思ってホテル代まで渡して遊園地に残して来れば、拓夢ちゃん駅で泣いてるしよー。あの後、うちのサークルは首脳会議だったんだぜ？」

「ホテル代……！」

拓夢はそれこそびっくりして大きな目を更に大きく見開く。須崎もあぐり口を開けると、我に返ってゴホンと小さく咳払いをした。

「何考えてんだ、まったく……」

思わず須崎が呟き、再び佐竹に怒突かれる。

「それもこれも全部お前がいけねえんだろうが！」

佐竹はそう言うと、腕組みをして、それで、と尋ねた。

「そろそろバイトに行かなきゃヤバいと思うんだけど、どうするんだ須崎？」

「え……」

突然尋ねられて、須崎はハツとして壁に掛けられている時計を見る。

「しまった、配達行かないと……！」

その言葉に拓夢も慌てた。

「須崎先輩、急がないと！」

酒屋の店主は腰が悪いので重いものが持てない。須崎が行かなければ取引先の店にも迷惑が掛かってしまい、小さな個人経営の酒屋にとっては命取りになってしまうのだ。須崎を急かすと、その拓夢の背中を佐竹がポンと叩く。

「一緒に行けよ、拓夢ちゃん。帰りは須崎に送らせるからさ」

佐竹の言葉に、拓夢は驚いて目を見開く。問うように須崎を見上げると、須崎は優しく目を細めて笑った。

「俺は配達に行っちゃうから店にいてもつまらないかもしれないけど、それでも良ければ来るか？」

その言葉に、拓夢はパアッと笑顔になる。

「待ってます。おばさんと店番しながら」

その言葉に、須崎も嬉しそうに微笑んだ。そして両手を伸ばすと、拓夢の肩をそっと掴んで抱き寄せる。

「おいおい。ラブシーンならカメラの前でやってくれよ、勿体無い」

からうように佐竹が言うと、須崎は拓夢を見下ろしたまま苦笑した。

「すみません、部長。ちょっとだけ目エつぶってください」

そしてそう言うと、拓夢を見詰めながら真剣な眼差しで囁く。

「好きだ」

「……！」

須崎の真摯な告白に、拓夢は声も無く見詰め返す。

「好きだ、拓夢……好きだ」

「須崎先輩……」

ようやく拓夢はそれだけ言うと、思わず瞳を揺らした。

「僕も好きです」

言った途端に、須崎にギュッと抱きすくめられる。幸せ過ぎて思わず泣きそうになった拓夢は、慌てて須崎の肩口に顔を埋めると、自分も両手を伸ばして愛しいその体をしっかりと抱き締め返した。

「それでは！ 拓夢ちゃんの初主演作完売を祝して！」

「かんぱ——い！！！」

新歓コンパと同じ居酒屋の奥座敷。佐竹の号令に合わせて一斉に声を上げながらビールジョッキを勢い良く突き出すと、ガシャンと派手な音がしてビールの泡がテーブルの上にこぼれた。

「それにしてもビックリしたなー。こんなに早く完売するとは！」

旨そうにビールをあおった佐竹の言葉に、細川がフフンと鼻で笑う。

「まあ、当然の結果ですね」

資金集めのDVDは好調な売り上げをみせ、あっという間に初版は完売した。作品の出来も好評だったようで、入手出来なかった学生から追加注文まで来ているらしい。だが、拓夢はまだ正規のものしか観ていない。DVDは2枚組で、ちゃんとしたデートモノの他に、いわゆる『イロモノ』がオマケで付いていたのだが、そちらはどうしても観せてもらえなかったのだ。

「あっちは18禁だからお前は観るな」

そう言って断固阻止したのは須崎である。もちろん拓夢は十八歳だし、せっかくだからフランクフルトやソフトクリームを食べるシーンがどんな風にアレンジされたのか観てみたかったのだが、いつもはわりとクールな須崎が顔を赤らめながら必死で言うのを見たら、なんだか可哀相になってしまって、どうしても『観たい』とは言えなかったのだ。

正規のDVDの方はとても素晴らしい出来で、白いワンピースを着た拓夢は本当の女の子に見えた。これなら誰も拓夢だとはわからないだろう。ストーリーは付き合い始めた男女の微笑ましい初デートで、彼氏を見詰める女の子のうっとりとした瞳に拓夢は思わずドキドキした。

(ええッ……?)

その一途な瞳は誰がどう見ても『恋する乙女』で、自分がどれだけ須崎のことを好きなのかを見せ付けられたようで思わず焦る。これでは、もしこの少女が拓夢だとバレてしまったら、その時点で拓夢の須崎への気持ちもバレてしまうのではないか。

「これが大学中にバラ撒かれたんですか……？」

思わず呆然として呟いたら、佐竹に声を上げて笑われた。

「な～に言ってんだよ、拓夢ちゃん。もっと凄いバラ撒いちゃっただろ？」

そうなのだ。いわゆる『裏DVD』も同じ数だけバラ撒かれたのである。その時の遣り取りを思い出しながら、拓夢は溜息混じりにウーロン茶を飲む。すると、それを見た佐竹が拓夢の顔を覗き込んだ。

「どうした、拓夢ちゃん。須崎がいないから元気が無いのか？」

からかうように問われて、拓夢は途端に赤くなる。

「違います……」

須崎は配達が終わったら少しだけ顔を出すことになっている。思わず否定したが、半分は当たっていた。

「そういえば、高科も遅いっすね～。あっ、あんちゃん、生大おかわり～！」

丸山がそう言って、通り掛かった店員に声を掛ける。呑ん兵衛の丸山は、いつも中ジョッキではなく大ジョッキを頼む。店員も心得たもので、すぐに、ありがとうございまーすッ、と威勢のいい声が返って来た。

「少し遅れるって言ってたから、すぐに来るだろ。化粧に手間取ってんのかもな。そろそろお肌の曲がり角だし」

イシシと笑いながらの佐竹の言葉に、拓夢は驚いて、えッ、と声を上げる。そこへ、誰が何だって、と言って拓夢の背後に誰かが立った。

「げッ！ サエッ！」

途端に佐竹が凄声を立てて拓夢の頭上を見る。天下無敵、いつ何時も余裕綽々（よゆうしゃくしゃく）の佐竹が酷く焦っているのを見て、いったい誰が来たのだろうかと振り返った拓夢は、しかしすぐにポカンと口を開けた。

（綺麗……）

卵型の小さな顔に、睫毛の長い優しげな目元。スッと通った鼻筋の下には赤い唇が笑みの形に結ばれている。とても一般人とは思えない容貌はモデルか俳優のようで、拓夢はポーッとその顔を見上げた。

「やあ、みんな元気だったかい？」

『サエ』と呼ばれたその人は、メンバーの顔をぐるりと見回し、小首を傾げて明るく微笑む。その瞬間、肩まである焦げ茶色の髪がサラリとこぼれて、甘いイイ匂いが拓夢の鼻をくすぐった。

（あ、イイ匂い……）

拓夢は花のようなその甘い香りに思わずドキドキする。それは、拓夢の知らない『大人』の香りだった。「こんにちは、サエさん。先日はお邪魔しました」

細川がペコリと頭を下げ、丸山が、ささ、どうぞどうぞ、と言って座敷に上がるよう促す。

「うん、ありがとう」

サエは2人に笑顔で礼を言うと、拓夢に視線を移して再び微笑んだ。

「ああ、この子が期待の新人君だね？」

突然まっすぐ見下ろされて、拓夢は焦って居ずまいを直す。

「佐保拓夢です。よろしくお願いします」

ドキドキしながら挨拶すると、サエもペコリと頭を下げた。

「こちらこそよろしく。前部長の高科冴樹です」

（じゃあ、この人が副部長のお兄さんの……）

現部長の佐竹と同学年だというサエは、しかしとてもそうは思えないほど若く見えた。背の高い副部長と違って背もそれほど高くはなく、親近感を覚えた拓夢はニコリと微笑む。すると、それを見たサエも再びにっこりと微笑んだ。

「ほんと可愛いね。護から聞いてた通りだよ」

「え……」

『護』とは佐竹の名前である。

「護が『お前に似てるぞ』って言うから『それは可哀相に』と思ってただけど、全然似てないじゃないか。僕よりずっと可愛いよ」

ねえ、と同意を求められて拓夢は慌てる。

「そんなッ……僕、こんなに綺麗じゃありません！」

思わず必死になって言うと、途端にサエがプッと吹き出して笑った。

「あはは。面白いねえ、拓夢ちゃんは」

そしてそう言うと、靴を脱いで座敷に上がる。空いていた拓夢の隣の席に座るのを見て、拓夢は思わず焦った。

（あ……）

無言の了解でそこが空けられていたのは、須崎が来た時の為である。しかし、もちろんサエはそんなこと知らない。拓夢から一つ空けて座わる方が失礼なわけで、拓夢はちょっとがっかりしながらテーブルに

向き直った。

「あれ、モトくんは？」

すると、どうやらメンバーが一人足りないことに気付いたサエが誰にともなく尋ねる。

(『モトくん』?)

もちろんここにいないのは須崎だけだ。とすると、『モトくん』とはサエが須崎を呼ぶ時の愛称なのだろう。途端にチリッと拓夢の胸が痛む。それが何なのか考える前に、佐竹が答えた。

「あいつはバイトだ。お前が来るって言ったら、後で少しだけ顔を出すって言ってたから、そのうち来るだろ」

枝豆を摘まみながらの言葉に、サエが嬉しそうに笑う。

「モトくんに会うのは久しぶりだから嬉しいよ。カッコ良くなっただろうね」

その二人の会話に、再び拓夢の胸がチリッと痛んだ。では、須崎はサエに会いに来るのだ。自分がいるから来てくれるわけではない。胸の奥からジワジワと湧き出してくる感情が何なのかわからなくて、拓夢は思わず唇を噛む。理由はわからないが、苦しくて悲しい。思わず視線を落とすと、隣に座ったサエが拓夢のグラスを見て微笑んだ。

「やあ、嬉しいな。拓夢ちゃんもノンアルコール派なんだね。僕も呑めなくて、いつも酒席では肩身の狭い思いをしてるんだよ」

気さくに話し掛けてくれるサエは本当に優しく、拓夢は思わず微笑み返す。

「酔うと寝ちゃうみたいで……」

照れたように言うと、サエが、ああ、と言って佐竹を見た。

「じゃあ、あの人の家では飲まない方がいいね。襲われちゃうから」

「はあ……」

もう既に襲われてしまった拓夢は思わず俯く。すると、それを見たサエの目がスッと据わった。

「まさか、護……？」

責めるような目付きで見られて、途端に佐竹が慌てたようにメニューを差し出す。

「サ、サエ！ 飲み物頼んでないぞ、飲み物！」

その、あきらかに『誤魔化してます』という言い方に、サエが呆れたように溜息をついた。

「ほんとにあなたって人は……」

そしてそう言うと、拓夢の髪を優しく撫でる。酷いことされなかったかい、と聞かれて、拓夢は慌てて顔の前で手を横に振った。

「大丈夫です。何もされませんでしたよ」

アハハと笑うと、サエも小さく笑う。

「良かったよ。酔った時の護は誰彼構わず口説くから要注意なんだよ。気を付けてね」

「誰彼構わず……」

思わずサエの言葉を口中で繰り返すと、佐竹がムツとしたように口を尖らせた。

「失礼なことを言うなッ。俺は可愛い子しか口説かね一ぞ！」

「ふ～ん」

その言葉に、サエが再び目を眇めて佐竹を見る。にっこりと微笑まれて、佐竹の顔がたちまち引き攣った。

「サエさん、お待たせしました～」

そこへ、既に手際よくドリンクを注文していたらしい丸山が、ウーロン茶の入ったグラスを店員から受け取って渡す。

「さあ、乾杯乾杯」

細川にも急かされて、サエは苦笑しながらグラスを取った。

「では、サエがメンバーに復帰したことを祝して！」

「かんぱ——い！！！」

佐竹が声を張り上げ、みんなが一斉にジョッキを合わせる。サエが笑顔で拓夢にもグラスを差し出し、拓夢は遠慮がちに自分のそれをカチンと合わせた。

六時に始まった宴会は、気が付くと九時になっていた。さすがに金曜日の夜ともなると酒屋への追加注文が多いのか、須崎はなかなか現れない。拓夢はそっとトイレに立つと、洗面台の前で溜息をついた。店内からはアハハワハハと陽気な笑い声が洗面所にまで聞こえて来る。しかし、拓夢は素直に楽しめない。それは須崎が来ないことばかりではなく、もっと別の理由だった。例えば、サエが須崎を『モトくん』と呼ぶことだとか、自分の知らない昔の須崎の話サエが楽しそうに話すことだとか……。

(あ……)

そして拓夢は気付く。

(僕、妬きもち焼いてるんだ……)

そんな感情が自分の中にあつたことに拓夢は驚く。自己嫌悪に、胸の中がモヤモヤした。こんな自分は好きじゃないし、須崎だって嫌いだろう。須崎に嫌われるのは絶対にイヤだ。しかし、楽しそうに昔話を聞かせてくれるサエに素直に笑い返せない自分がいて、拓夢はそれをどうすることも出来ない。サエに気付かれるのがイヤで逃げるようにしてトイレに来たのはいいが、来たら来たで今度は戻れなくなってしまった。

「はぁ……」

拓夢は思わず深い溜息をつく。すると、そこへ当の本人のサエがドアを開けて入って来た。

「大丈夫、拓夢ちゃん。酔っちゃった？」

どうやら、なかなか戻らない拓夢を心配して来てくれたらしい。お酒を飲めない人は匂いや雰囲気だけでも酔っちゃうからね、と言われて、拓夢は困って苦笑した。

「大丈夫です。ありがとうございます」

礼を言って脇をすり抜けようとすると、サエがそっと拓夢の肩を押さえる。

「拓夢ちゃん」

名前を呼ばれて、拓夢は何か用だろうかサエを見た。

「実はね、今日は君に会いに来たんだよ」

「僕に……？」

拓夢は驚いてサエを見上げる。サエは拓夢より頭半分だけ背が高い。

「うん」

サエは頷くと、困ったように眉を寄せて笑った。

「いい子なんで困ったよ。外も中も『いい子』なんて反則だ」

「え……？」

拓夢は意味がわからずサエを見る。サエは小さく苦笑すると、ポンポンと拓夢の肩を叩いて離れた。

「映画、いいの書くから頑張ろうね」

サエが微笑みながら個室に入って行く。

「はい。よろしくお願いします」

拓夢は思わず背筋を伸ばすと、個室に向かってペコリと頭を下げた。

「お、拓夢ちゃん。お待ちかね～」

席に戻ると、そこには待ち焦がれた須崎の姿があった。

「須崎先輩」

拓夢は大喜びで靴を脱いで座敷に上がる。須崎は拓夢の隣の席、今までサエがいた場所に胡坐をかいて座っていた。

「サエさんは？」

自分のことよりもサエのことを真っ先に訊かれて、拓夢の笑顔がかすかに曇る。

「あ……すぐに来ると思いますよ」

答えると、須崎は、そうか、と言ってトイレのある方向を窺った。

「会うのはサエの卒業式以来だろ」

佐竹の言葉に、須崎は笑う。

「そうですね。相変わらず綺麗ですか？ サエさん」

須崎の言葉に、拓夢の胸がドキリと大きく音をたてる。

「それでもねえよ。盛りは過ぎたかな？」

そう言ってゲラゲラ笑った佐竹は、すぐに細川と丸山に両脇から口を塞がれた。

「聞こえてたよ」

そこへ、トイレの方向からサエが仏頂面で戻って来る。しかし、顔は不機嫌そうでも目は笑っていた。

「お久しぶりです、サエさん」

須崎が正座をしてペコリと頭を下げる。

「うっわー！ モトくん、カッコ良くなったね〜〜〜！」

サエは心底驚いたようにそう言うと、靴を脱いで須崎の隣に座った。

「背も伸びたんじゃない？ いくつくらいあるの？」

サエのはしゃいだ声音に、須崎が苦笑しながら返す。

「百八十二です」

「ベッドから出ちゃうね」

「布団ですから大丈夫です」

「斜めに寝るの？」

「はい。それか体を丸めて」

「あははは」

その楽しそうな会話を聞きながら、拓夢はグラスを持ち上げる。ぬるくなったウーロン茶をチビリと舐めて、誰にも気付かれないように小さく溜息をついた。すぐ隣に座っているのに、須崎はサエの方を向いたままだ。まだ会話らしい会話すらしていないことに気付き、拓夢は思わずしょんぼりとなる。サエと話している須崎は本当に嬉しそうで、須崎がサエのことを本当に好きなことが伝わって来る。拓夢は再び胸の痛みを感じて、ギュッと服の胸元を掴んだ。

「ところで、例のDVDはもう観たのか？」

佐竹に問われて、サエがウンと頷く。

「ちゃんとした方だけね。『裏』の方はヌク時に使わせて貰うよ」

サエのあっけらかんとした言葉に、途端に丸山がギャアと叫んだ。

「頼むから、その綺麗な顔でそんなこと言わないで下さい！」

泣きそうな顔で言われて、サエがアハハと明るく笑う。

「僕だって男なんだから人並みのことはするよ」

ねえ、と須崎越しに覗き込まれて、拓夢は、えッ、と言って慌てた。思わず顔を上げると、初めてこちらを見た須崎とバチッと目が合う。

「エエッ……？」

『するのか？』と、ヒョイと眉を上げて視線だけで問われて、拓夢は途端にカアアッと真っ赤になった。
「じゃあ、拓夢ちゃんのイメージはだいたい掴めたな。書けそうか？」

佐竹の言葉にサエが、もちろん、と答えて頷く。

「全力で書かせて貰うよ。素敵なラブストーリーをね」

サエの言葉に、よっしゃーッ、と丸山がガッツポーズをとり、細川も目を細めて笑った。

「じゃあ、クランクインは八月からな。夏休みは合宿も入れるから、全員日程合わせろよー」

「その前に、君たちは試験だね」

佐竹の言葉に、サエが楽しそうに口を挟む。

「ウエエエエ……！」

途端にそこにいる全員が呻き声をあげ、サエが声を上げて笑った。

とりあえず残っている料理をペロリと平らげた須崎は、一時間ほどただで次のバイト先に行ってしまった。

「あいかわらず忙しいねえ」

走り去る後ろ姿を店の前でみんなで見送る。

「んじゃ、俺らもここでお開きにするか」

佐竹の言葉に、サエが驚いたように、あれ、と言って目を丸くした。

「護のアパートで二次会じゃないの？」

どうやら当時から二次会は佐竹の部屋が定番だったらしい。

「遅くなると拓夢ちゃんが寮から締め出されちゃうんだよ」

佐竹の言葉に拓夢は慌てた。

「いいです。どうぞ皆さんは二次会に行ってください。僕は一人で帰れますから」

そう言って笑顔で頭を下げると、佐竹が、ダメダメ、と言って拓夢の腕を掴む。

「痴漢でも出たらどうするんだ！ 拓夢ちゃんはちゃんと俺が送ってくからな！」

「それが一番危なかったりして～」

佐竹の言葉に丸山が突っ込み、途端に佐竹のケリが尻に飛んだ。

「んじゃ、ここでお開きな。お疲れさ～ん。試験が終わったら召集かけるからー」

佐竹がそう言って、拓夢の手を掴んで歩き出す。

「襲っちゃダメだよ」

その後ろ姿にサエが声を掛けた。

「だ～いじょぶ、大丈夫。今日はまだ酔ってないから～」

佐竹が前を向いたまま後ろに向かって手を振る。ちょっとロレツは怪しいが、確かにまだ足下はしっかりしているのを見て、拓夢は思わず苦笑すると、ペコリとみんなに頭を下げた。

「それじゃ、すみません。お先に失礼します」

「気を付けてね～」

拓夢の言葉に、サエが苦笑混じりに声を掛ける。ヒラヒラと手を振るのへ、拓夢は小さく笑い返した。

「いい方ですね……」

歩き出してからポツリと言うと、佐竹がヘラリと笑う。

「おお、いい奴だぞ」

「須崎先輩も好きみたいだし……」

「おお、凄く懐いてたからなあ」

佐竹の言葉に、拓夢は思わず唇を噛む。拓夢の知らない須崎をみんなは知っている。それがなぜかこんなにも寂しい。再び胸の奥がツキンと痛む。その耳に、再び佐竹の声が届いた。

「半年くらい一緒に住んでたし」

(え……)

その言葉に、拓夢の呼吸が一瞬止まった。

試験期間中はサークル活動も中止になる。事務棟だけでなく講義棟や研究棟も出入り禁止になるので、拓夢も仕方なく寮に戻った。

『半年くらい一緒に住んでたし』

あれから佐竹の言葉が耳について離れない。拓夢は勉強を諦めてベッドに移ると、その上にパタッと横になった。

「須崎先輩……」

サエは須崎のことを『モトくん』と呼んでいた。

「基央……先輩」

自分も名前で呼んでみたら須崎はどんな顔をするだろうかと考える。曲がりなりにも付き合っているのだから怒られることはないだろうとは思うが、ちょっと怖くて勇気が出ない。

「基央先輩……」

好きだと気持ちは伝え合ったが、まだキスすらしていない。手を繋ぐだけでドキドキで、とてもそんなことまでは考えられなかったのだ。だが、サエの登場により、拓夢の心は複雑に揺れた。

(もしかして、付き合ってたのかな……)

そう考えただけでソワソワしてくる。サエは大人で魅力的だ。もし付き合っていたのだとしたら、もちろんそれなりの関係になっていただろう。キスすらしていない今の状況は、須崎にとってはさぞ退屈に違いない。しかし、別に拓夢がキスを断っているわけではない。須崎がキスを求めて来ないということは、自分に魅力が無いからだろうかと考えて、拓夢は思わず落ち込んだ。

(キス……したくないのかな……)

拓夢はそっと自分の唇に触れる。指先でなぞると、くすぐったいような快感が甘く唇に走った。須崎の唇はどんな感じなのだろうかと考えて、拓夢は思わずドキドキする。女の子とも付き合ったことの無い拓夢は、もちろんキスも未経験だ。キスをする時は瞳を閉じるのだろうかと考えて、拓夢はそっと目を閉じた。

「うわッ……！」

目を伏せて迫って来る須崎の顔を想像した途端、拓夢は真っ赤になって両手で顔を覆う。

「む……無理かも……」

ドクドクと心臓が早鐘を打つ。考えただけでもこんなにドキドキするのだ。きっと実際にそんなことになってしまったら、心臓が破裂してしまうかもしれない。でも、と拓夢は思う。キスに対する興味もあるし、するなら相手は須崎がいい。というか、須崎としかしたくない。

「基央先輩……」

拓夢はもう一度目を閉じて、須崎の顔を思い描く。

『拓夢……』

須崎の低くて甘い声音を思い出し、拓夢は思わずゾクリと震えた。

「基央先輩……」

お前もヌクのかと問うように見られて狼狽えたのには理由(わけ)がある。

「基央……先輩……」

拓夢はジーンズの前をくつろげると、そっと右手を差し入れた。

「あ……」

なめらかな腹部に沿って指先を下着の奥へと滑り込ませる。須崎の節の目立つ大きな手を思い浮かべながら敏感な部分を握り込んで、拓夢はハアと息を乱した。

「ん……あ……」

軽く動かすだけで甘い疼きが腹の奥に溜まり始める。そう、拓夢はもう何度も須崎の顔や声やしなやかな指を思い出しながら体の火照りを癒していたのだ。

「基央先輩……」

首筋に口付けられるところを想像し、拓夢はハアと熱い息をこぼしながら顔を仰け反らせる。シャツの内側に手を入れて、須崎の指を思い描きながら小さな尖りをキュッと摘まむと、ピリッと体の奥に電気が走った。

「んんッ……」

こんな浅ましい自分を知ったら須崎は軽蔑するだろうかと考える。それでも、拓夢はどうしてもこの行為をやめることが出来ない。

「あ……あ……ああ……」

拓夢は声を抑えながら、体を弓なりに反らせて切れ切れに喘ぐ。そして、須崎の姿を目蓋の裏に思い描きながらギュッと眉をキツく寄せた。

「モト……オ……ッ」

抑えきれない喘ぎ声に混せて、須崎の名前をうわ言のように呼ぶ。

『実はね』

その瞬間、サエの声が拓夢の脳裏に閃光のように蘇った。

『今日は君に会いに来たんだよ』

「……ッ！」

拓夢は驚いて動きを止め、瞠目する。と同時に、体の熱がスウッと一気に冷めていくのを感じた。

(もしかして……)

『いい子なんで困ったよ』

(もしかして……サエ先輩は今でも……?)

そして、思い出す。サエが来ると聞いて、忙しいバイトの合間を縫って駆けつけて来た須崎の視線は、拓夢ではなく常にサエに向けられていた。

『相変わらず綺麗ですか？ サエさん』

須崎の嬉しそうな顔や言葉を思い出し、拓夢は思わず愕然とする。

(もしかしたら……須崎先輩も……?)

その考えに、拓夢は酷くショックを受けて呆然とした。

期末試験が終わると同時に、大学は夏休みに突入した。

夏休みは朝からいるからいつでも好きな時においで、と言われていた拓夢はさっそく大学に向かう。夏休みになって閑散としているかと思いきや、構内には結構人がいた。事務室はいつもと同じように事務員がいるし、ペディストリアンにも徒歩や自転車に乗った学生の姿がチラホラ見える。ただ、売店や学生食堂の自動ドアには、営業時間の変更なのか、大きな張り紙が貼られているのが見えた。

拓夢はそれらを眺めながら、ペディストリアンの上を自転車で軽快に走る。部室のある建物の脇に自転車を止め、通り慣れた戸口をくぐって暗い廊下に入ると、途端に外の熱気とは打って変わったヒンヤリとした空気が拓夢を包んだ。

「おはようございまーす」

人気の無い廊下を抜け、ノックしてからドアを開ける。すると、テーブルの横に座ってスクリーンを覗いていた佐竹と、いつも拓夢が座っている席で同じようにスクリーンを見上げていた人物が同時にパッとこちらを見た。

「須崎先輩！」

拓夢はその顔を見た途端、喜ぶよりも驚いて声を上げる。

「どうしたんですかッ？ バイトはッ？」

慌てて部室のドアを閉めながら尋ねると、須崎が、ああ、と言って笑った。

「バイトは午後からなんだ。いつもは午前中いっぱい寝てるんだけど、今日は珍しく目が覚めてさ」

「『目が覚めて』じゃなくて『起こされて』だろ？」

須崎の言葉に、佐竹がうんざりしたように言う。

「え？」

キョトンと目を見開いたその時。

「やあ、拓夢ちゃん。先日はどうもね」

部屋の隅にある水道の方から声がして、何やら湯沸しポットと格闘していたらしいサエが拓夢に顔だけ向けてニコッと笑った。

「サエ先輩ッ？」

拓夢は今にもポットを取り落としそうになっているサエを見て、驚いて声を上げる。そして、急いで荷物を置いて駆け寄ると、湯沸しポットを両手で支えた。

「だ、大丈夫ですかッ？」

「うん。中の水を替えようと思って捨てたんだけど、その後どうしたらいいのかわからなくなっちゃって」

「え??？」

サエの説明に、拓夢はキョトンとして目を丸くする。

「だって、ポットよりも蛇口の方が低いでしょ？」

「ああ」

拓夢はようやくサエの言っている意味に気付くと、ひとまずポットを机上に置き、隣にあるケトルを指差した。

「水を入れる時はコレを使うんです」

そう言って蛇口からケトルに水を入れて見せると、サエが目を見開いてポンと拳（こぶし）で手の平を打つ。

「拓夢ちゃん、凄いね！」

「え……以前はどうしてたんですか？」

まがりなりにもサエはこの部員だったのだ。いたく感心したように言われて、拓夢は思わず尋ねた。

「う～ん、いつも誰かがやってくれてたからなあ……」

腕を組んで唸るサエを見ながら、佐竹が、悪いな、拓夢ちゃん、と声を掛ける。

「こいつ、一般的なこと何にも出来なくてさあ」

佐竹の苦笑交じりの言葉に、途端にサエがムッと頬を膨らませた。

「これは応用問題だったからだよ！ 僕だってポットに水を入れることくらい出来るさ！」

拓夢は拳を握りしめて反論するサエを見ながら、意外な面を知って思わず微笑む。そして、水を入れ終えたポットを窓際に運ぶと、慣れた手付きで電源コードを繋いだ。

「いつもお茶淹れは拓夢ちゃんが？」

その様子を見て、サエが尋ねる。

「いえ、普段は部長が。部長はお茶を淹れるのがとっても上手なんですよ」

ニコニコと答えると、サエが、へえ、と言って佐竹を見た。

「優しいんだねえ、護？」

「可愛い子にはな。お前には淹れてやんねー」

サエの言葉に佐竹が答え、その素っ気ない言い方に拓夢は思わずその顔を見た。気のせいかな、佐竹はサエに対してだけ必要以上に無愛想な気がする。親しさ故の物言いなのかもしれないが、サエの反応を見ると、それだけでは無さそうだ。ムウと拗ねたように唇を引き結んでいるサエを見て、何かフォローしなければと思っていると、しかし拓夢より早く須崎が口を挟んだ。

「いいですよ。サエさんには俺が淹れてあげます」

「え、ホントッ？」

途端にパッとサエが笑顔になる。

「まーた甘やかす～～～。だーからサエはいつまでたっても何にも出来ねーんだよ～～～」

須崎の言葉に佐竹がうんざりしたように言い、なあ、と同意を求められた拓夢は困って窓際に置いてあるティーセットに向き直った。

「今日は僕が淹れます。そのかわり、不味くても文句言わないでくださいね」

拓夢はおどけた口調でそう言うと、サクサクとティーポットに人数分のティーパックを放り込む。途端に後ろで『わ～い』というサエの嬉しそうな声と、『あッ、拓夢ちゃんまで甘やかす～～～』という佐竹の不満そうな声が聞こえた。

(良かった……よね?)

もしかしたら余計なことをしてしまったのではと思ってそっと後ろを窺うと、須崎は相変わらず拓夢の指定席で腕組みをして座っている。その視線が佐竹とヤイヤイ言い合うサエに柔らかく向けられているのを見て、拓夢は思わずギュッと両手を握り合わせた。

「あの……サエ先輩、今日はお仕事は？」

学生は夏休みだが、今日は平日である。尋ねると、サエがフフと笑いながら肩を竦める。

「大学の技官なんてのは、授業の無い夏休みは無職と同じでね」

だから8月は学生と一緒に夏休みなんだよ、と言ってサエは楽しそうに笑った。

「だからって、いきなり朝早くっからアパートに押し掛けて来られたらびっくりするだろーがよ！」

そこで暇になったサエは二人のアパートを訪れて佐竹を叩き起こし、ついでに須崎も起こしたらしい。佐竹のさも迷惑そうな言葉に、再びサエが唇を尖らせた。

「なんだよ！ 僕が起こさなかったら部室の前で拓夢ちゃんを待たせちゃってただろ？」

感謝してよねッ、と憤慨するサエに須崎が笑う。

「サエさん、たまには店の方にも顔出してくださいよ。店長も奥さんも喜ぶます」

須崎の言葉に、拓夢はドキッとして視線を向ける。それはそうだ。サエだってこの学生だったのだから、彼らと顔見知りでも不思議はない。なのに、拓夢の心は途端にザワザワざわめく。

(やっぱり……付き合ってたのかな……)

すると、沈んだ顔に気付いたのか、佐竹が拓夢を振り返って笑顔を向けた。

「拓夢ちゃん、今日は何にする？」

「映画ッ？」

途端にサエがパッと目を輝かせて身を乗り出し、佐竹にゴツンと頭を小突かれる。

「お前は早く台本を書け。その為にここに連れて来てやったんだからな」

書かないなら家へ帰れ、と冷たく突き放すような佐竹の言葉に、再びサエがムウと怒った顔をした。

「書きますよ！ 書けばいいんでしょ、書けば！」

ブーブー言いながら窓際に並べられている机に歩み寄ったサエは、その上に持参して来たらしいノートパソコンを置く。椅子に腰掛け、慣れた手付きでパソコンを開ける後ろ姿を見て拓夢は気付いた。

(そうか……)

きっとあの机が当時のサエの指定席だったのだろう。学生時代、サエはいつもあの机でパソコンを開いて台本を書いていたのだ。ふと視線を向けると、須崎も懐かしそうな顔で同じようにサエを見ている。

(須崎先輩……)

拓夢は瞳を揺らして視線を逸らす。

(やっぱり……好きだったのかな……)

拓夢は胸中で呟くと、そっと苦い溜息を漏らした。

昼に近くの喫茶店でワンコインランチを食べる以外は冷房の効いた部室でひたすら映画三昧、そんな毎日が暫く続いた。

サエは本当に暇なのか、毎日やって来ては窓際の机でパソコンに向かっている。須崎は相変わらず午前中だけやって来て、昼時になるとバイト先に出掛けて行った。どうやら酒屋の夫人が夏休み中は昼も食わせてくれるらしい。拓夢はと言うと、あれ以来何となくぎこちなくて酒屋にも顔を出せずにいる。もしかしたら須崎の方から誘ってくれないかと思ったが、須崎は特に気にもしていないらしい。しかも、サエが見ているからなのか、部室を出る時も拓夢には触れなくなった。

(須崎先輩……)

拓夢はエンドロールが終わって白くなったスクリーンを見詰めながら、グッと唇を引き結ぶ。毎日顔を合わせてはいるが、もう何日も二人きりで話をしていないような気がする。拓夢は意を決すると、勇気を出して須崎に会いに行くことにした。

「こんにちは」

夕闇迫る戸外から中を覗くと、須崎はやはり配達らしく、店番をしていた夫人が座敷の奥でにっこりと微笑んだ。

「いらっしゃい。さあ、どうぞ」

拓夢は招かれるまま座敷に上がる。夫人はさっそく急須に茶葉を入れると、湯沸しポットからお湯を注いだ。

「今日はいつものお店だけだから、それほどかからないと思うんだけど」

夫人が拓夢の湯呑みに茶を注ぎながら言う。拓夢が何度か顔を出すようになると、夫人は拓夢用の湯呑

みを用意してくれた。薄緑の地に小花の浮かんだ湯呑みを見詰め、自分はこんなイメージなのだろうかとはんやり考える。

(可愛い……)

大輪の花のような派手さはないが、静やかに香りを放っているような小花の柄は拓夢も気に入っていた。「そうだ。さっきお隣に頂いたんだけど、拓夢ちゃんお饅頭好き？」

夫人はそう言うと、台所から薄茶色の紙包みを持って来る。ガサガサと包みを開くと、中から茶色い饅頭が十個ほど出て来た。それを一つだけ小皿に取り、拓夢に差し出す。

「これをそこへ上げてもらえるかしら」

拓夢の右手には小さな仏壇がある。拓夢はその小皿を受け取ると、仏壇に供えた。

「……？」

小さな仏壇には線香立てや御鈴と並んで白木の位牌が置かれている。その前に写真立てが後ろ向きに置かれているのを見て、拓夢はそれをじっと見詰めた。

「ああ、それ？」

夫人が別の皿に饅頭を取り分けながら、拓夢の視線に気付いて小さく笑う。

「息子なのよ」

夫人はそう言うと、立ち上がって仏壇に歩み寄り、その写真立てを表に返した。

「須崎君がつかいかなと思って、いつもは裏返しにしてるんだけど……」

遺影には拓夢と同じ年くらいの青年が写っている。屈託の無いその笑顔は、まだあどけなさを残していた。

「須崎先輩が？」

「同級生だったの」

尋ねると、夫人がそう言って目を細めて笑う。

「とは言っても大学じゃなくて、小学生の頃のね」

そういえば須崎の地元はどこなのだろうか。拓夢は互いのプライベートを全然知らないことに気付く。すると、夫人が少しだけ声を落として言った。

「うちは私が病弱だったから、子供を望めなくてね……息子は小学生の頃に施設から貰い受けた子なのよ」

「え……」

拓夢は驚いて視線を向ける。夫人は柔らかく微笑むと小さく頷いた。

「その頃に同級生だったのが須崎君だったの。お互いに会うのは小学生以来だったから、大学に入学した須崎君が初めてこの店に買い物に来た時には本当にびっくりしたみたいだったわ」

その時のことを思い出したのか、夫人は小さくフフと笑う。

「でも、凄い偶然ですね。須崎先輩の地元ってどこなんですか？」

話の流れで何気なく尋ねると、途端に夫人は一瞬拓夢を見詰めてから迷うように瞳を揺らした。

「ああ、私ったら……」

そしてそう言うと、困ったように眉尻を下げる。

「ごめんなさいね。余計なことを言ってしまったわ……」

その顔が本当に申し訳なさそうだったので、拓夢は慌てる。

「いえ、僕の方こそすみません。他人のプライベートなのに……」

聞くとしたら、それは須崎に直接聞くべきだろう。顔の前で手を振りながら謝ると、夫人は再び拓夢を見詰めて瞳を揺らした。

「拓夢ちゃん……須崎君のこと、好き？」

「えッ……？」

拓夢は突然問われて驚き慌てる。

「す……好きです」

思わず正直に答えると、夫人は真剣な眼差しで拓夢を見詰めて更に尋ねた。

「須崎君の家がお金持ちじゃなくても？」

確か須崎は父親と折り合いが悪くて縁切り状態だと佐竹が言っていたのを思い出す。

「家は関係ありません」

拓夢が同じように真剣な眼差しで答えると、夫人はフッと目元を和らげて微笑んだ。

「ごめんなさい。拓夢ちゃんがそんな子じゃないのはわかってるのに私ったら……。でも良かった。ずっと傍にいてあげてちょうだいね、拓夢ちゃん」

拓夢は夫人の言葉に何と答えたらいいのかわからなくて戸惑う。もちろん拓夢は傍にいたい、だが須崎は……。

その時、今日も暑いな一、と言って店主が配達から戻って来た。

「お、拓夢ちゃん。いらっしやい」

「お邪魔してます」

拓夢は店主にペコリと頭を下げる。そこへ、建物の裏手に空き瓶を片付けて来た須崎が入って来て、拓夢の姿に目元を緩めた。

「来てたのか」

「はい。お疲れ様でした」

拓夢はその顔を見た途端に、思わず泣きたくなくて慌てて微笑む。なんだか久し振りに自分のことだけを見てくれたような気がして、ジワリと目頭が熱くなった。

「お腹空いたでしょ。すぐに夕食にしますからね。拓夢ちゃんも食べてってね」

夫人が立ち上がって、いそいそと台所に向かう。

「あ、手伝います」

拓夢も立ち上がると、目尻を拭いながらその後続いた。

夕食の片付けが済み、帰ろうとすると、須崎がいつものように土間に降りようとする。

「あ、いいですよ。須崎先輩はまだやることあるんですから。一人で帰れます」

送って行こうとする須崎をやんわり断ると、なに言ってんだ、と言って笑いながら頭をポンと叩かれた。そして、さっさと靴を履いて店の外に出してしまう。外は既に真っ暗で、裏通りにいくつかある商店もみんなシャッターが下りている。肩を寄せ合うようにして建っている古い家々の窓には黄色い明かりが灯り、道路脇にポツポツと立っている街灯の明かりがぼんやりと白く滲んでいた。拓夢は店の脇に停めてあった自転車を押しながら、その裏道を須崎と並んで歩く。須崎は特に何も喋らない。いつもは甘く感じるその沈黙も、今日の拓夢にとっては辛い時間でしかなかった。

(聞いてみようか……)

でも、何て聞けばいいのかわからない。

(須崎先輩はサエ先輩と付き合ってたんですか、って?)

拓夢は前方を見詰めたまま、ギュッと自転車のハンドルを握り締める。

(それで……?)

拓夢は微かに眉を寄せると、唇を噛んだ。

(今でも好きなんですか、って……?)

グッと唇を引き結んだ途端にジワリと目頭が熱くなる。

(いけない……)

こんな顔をしていたら須崎に変に思われてしまう。拓夢は慌てて視線を逸らすと、須崎とは反対の方角に顔を向けた。

細い裏道から商店街に出ると、途端に人通りが多くなる。しかし、賑やかなのは商店街の中だけで、大学のある方角へ曲がると再び人並みが途切れて静かになった。

(もう少し……)

あと少し行けば、いつも須崎と別れる十字路に着く。その時、前方をじっと見詰めて緊張しながら歩いていた拓夢に、不意に須崎が視線を向けた。

「どうした。今日は静かだな」

突然話し掛けられた拓夢はドキッとして身を固くする。その様子に、須崎が微かに眉を寄せた。

「何かあったのか？」

須崎が足を止めて拓夢に尋ねる。心配してくれるのは嬉しいが、その原因が須崎自身なのだから返答のしようが無い。同じように立ち止まり、何か言わなければと迷っていると、それを見た須崎が小さく溜息をついた。

「悪い……言ってくれないと、俺にはお前の気持ちがわからない」

その言葉にズキンと胸の奥が痛む。拓夢は須崎の顔を見ることが出来ずに、じっと前方を見詰めた。

(あと少し……あと少しでいつもの十字路だったのに……)

そうしたらいつものように明るく笑って須崎に『おやすみなさい』を言うことが出来たのに、と拓夢は遠くの街灯を見詰めながらぼんやり考える。

「拓夢……？」

須崎が心配そうに、自分の方を見ようとしないう拓夢に声を掛ける。拓夢はグッと唇を引き結ぶと、小さく息を吸った。

「須崎先輩……」

名前を呼んだ途端に、大きな瞳からポロッと涙が零れて落ちる。

「拓夢？」

須崎が驚いたように拓夢の顔を覗き込み、拓夢はその視線から逃れるように顔を逸らした。

「ごめんなさい……僕もどうして泣いてるのかわからないんです……」

嘘だ。自分は不安なのだ。須崎の気持ちが見えなくて……須崎をサエに盗られてしまいそうで不安なのだ。

「もうここでいいです……送って下さってありがとうございました……」

「拓夢ッ？」

視線を逸らしたままペコリと頭を下げる拓夢を、須崎が驚いたように呼び止める。

「おやすみなさい……」

拓夢はもう一度頭を下げると、急いで自転車に跨り、暗い夜道を逃げるように走った。

次の週、拓夢は初めてサークルを休んだ。別に参加は自由なのだし、細川も丸山も用が無ければほとんど来ないのだから気にすることは無いのだろうが、やはり佐竹は心配しているだろうかと考えて気鬱になる。しかし、須崎の顔は見たくない。寮の自室でベッドに腰掛け、一人悶々としていると、そこへ携帯電話が着信を告げた。急いで出ようとして、思い直して名前を見る。着信は佐竹からだった。

「もしもし」

拓夢は急いで電話に出る。すると、受話器の向こうで佐竹よりも少し高い声が拓夢の名を呼んだ。

「拓夢ちゃん？ サエです」

「サエ先輩？」

拓夢は驚いて聞き返す。

「良かった、元気そうだね」

サエはホッとしたようにそう言うと、毎日来ていた拓夢が来ないから風邪でもひいたのではないかと心配していたのだというようなことを言った。

「すみません……ちょっとお腹が痛かったので……」

拓夢はまた嘘をつく。嘘をつき慣れていない拓夢にとってはそれだけでもストレスで、本当に胃炎になりそうだった。

「え、大丈夫？ 何か食べた？」

受話器の向こうで再びサエが心配そうな声を出す。拓夢は思わず俯き、はい、と答えた。これも嘘だ。実際は食欲が無くて土曜日から何も食べていない。

「拓夢ちゃん、寮だったよね。僕、今から行こうか？」

「大丈夫です。もう痛くはないので、今日一日大人しくしてます」

拓夢はサエの申し出をやんわり断ると、礼を言って電話を切る。ハアッと大きな溜息をつく、携帯電話を握り締めたままベッドに倒れるようにして横になった。

(サエ先輩はいい人だ……)

でも、と拓夢は唇を噛む。

(今はサエ先輩にも会いたくない……)

その時、再び手の中の電話が着信を告げる。

「もしもし……」

咄嗟に出てしまった拓夢は、聞こえて来た声にハッとして体を強張らせた。

「拓夢か？」

須崎だった。思わず電話を切ろうとした拓夢は、思い直して携帯電話を握り直す。

「すみません……サークル休んじゃって……」

「いや、そんなことはいい」

須崎が拓夢の言葉に短く返す。その声がいつもより硬いことに気付いて、拓夢はキュッと眉を寄せた。

(……怒ってる？)

それはそうだ。金曜日の晩、拓夢は須崎の呼び止める声を無視して帰って来てしまったのだから。

「すみません……」

思わず小さく謝ると、受話器の向こうで須崎が小さく溜息をつくのが聞こえた。

(……ッ)

途端に拓夢は怖くなり、今すぐ電話を切りたくなる。震える手で必死に携帯電話を握り締めていると、須崎が再び、拓夢、と呼んだ。

「……会えないか？」

「すみません……」

拓夢は須崎の言葉に小声で謝る。

「話したいことがあるんだ……」

須崎の真剣な声音に、拓夢はビクリと体を震わせた。

(それは、サエ先輩のこと……?)

拓夢は青褪めて言葉を失う。では、とうとう三行半を突きつけられるのだ。

(そうだよな……あんな綺麗な人が相手じゃ勝ち目なんて無いよね……)

だが、それでもまだ自分は須崎が好きなのだ。

「今日はちょっと……体調が……」

少しでもその瞬間を先延ばししたくて、拓夢は苦しい嘘をつく。すると、受話器の向こうで須崎が再び小さく溜息をついた。

「じゃあ、明日……部室に来なかったら寮まで行くから……」

その言葉に拓夢はギュッと目を閉じて俯く。

「わかりました……」

今にも消え入りそうな声で答えると、拓夢は自分から電話を切った。

翌日。

拓夢が学生寮の玄関を出ると、須崎はすぐその前で待っていた。

「……おはようございます」

ちょっと驚いて頭を下げると、須崎が小さく笑い返す。

「……おはよう」

須崎は拓夢を見詰めて小さく返すと、促して大学の方向へと歩き出した。

拓夢のいる寮は大学の沿道脇に建っている。この辺りはアパートも多く、住んでいるのはほとんどが学生だ。どうやら寮に入るのは一年生のうちだけで、二年になるとほとんどがアパートに移るらしい。寮の部屋には限りがあるので地方から上京してくる後輩に譲ってあげる、というのが理由のようだが、それはどうやら建て前で、その頃になるとみんな大学生活にも慣れて恋人が欲しくなるので、それで自由なアパートに移るらしかった。

(そういえば……)

拓夢は須崎の少し後ろを自転車を押して歩きながら考える。自分が須崎の部屋に上がったのは一度きりだ。まだ二人が付き合い始める前、拓夢は酔った佐竹に押し倒されそうになったところを須崎に助けられ、寮の門限が過ぎていたので部屋に泊めて貰ったのだ。必要最低限のものしか無い殺風景な部屋を思い出し、拓夢は思わず赤くなる。寝かせてもらった布団からは、当たり前だが須崎の匂いがした。

「こっち、いいか」

大学の敷地の入り口まで来ると、突然須崎が拓夢を振り返る。ここはいつも須崎や佐竹と別れる場所だ。須崎の指差す方に行くと繁華街があり、その裏道にはバイト先の酒屋がある。しかし、須崎がいつもバイト先に向かう時間までには、まだ三時間ほどあった。

「はい」

拓夢は頷くと、須崎の指差す方へと自転車を向ける。須崎は目元を緩めると、拓夢を連れて繁華街の方へと歩き出した。

「おはようございます」

酒屋に着くと、須崎は少しだけ開いている戸口から家の中へと声を掛ける。

「ああ、須崎君。いつもありがとね」

すぐに夫人が出て来てニコッと微笑んだ。そして、後ろにいる拓夢に気付くと、驚いたように目を見開いてから嬉しそうに笑う。

「まあ、今日は拓夢ちゃんも一緒なの？ 嬉しいわ、ありがとう」

夫人はそう言って日本酒の一升瓶を奥から持って来ると、何かをチャラッと須崎の手の平に載せた。

「じゃあ、よろしくね。くれぐれも事故には気を付けてね」

「はい。じゃあ、行って来ます」

須崎はそれらを受け取ると、拓夢を連れて家の裏に回る。そして、建物の脇に拓夢の自転車を止めると、配達用の軽トラックの鍵を開けた。

「乗って」

運転席に座った須崎が、助手席のドアを開けて拓夢を呼ぶ。拓夢は戸惑いながらも車に歩み寄ると、助手席に座ってドアを閉めた。

「どこに行くんですか？」

シートベルトを締めながら尋ねると、須崎が拓夢の足下に一升瓶を置く。

「倒れないように預かっててくれ」

そしてそう言うと、自分もシートベルトを締めてエンジンをかけた。

「ちょっと山までドライブに行く。安全運転で行くから安心してくれ」

(ドライブ……)

てっきり今日は別れ話をされるのだと思っていた拓夢は、その言葉に戸惑う。

「あ、メールしなくちゃ……」

今日もサークルに行かないことを伝えるために携帯電話を取り出そうとすると、須崎がバツが悪そうに笑った。

「悪い。部長にはもう言っているんだ。今日は拓夢を連れ出すからって」

「あ、そうなんですか……」

佐竹は二人が付き合っていることを知っているが、サエは自分たちが二人きりで出掛けることをどう思うだろうかと考えて、拓夢は複雑な心境で窓の外を覗いた。

車はすぐに市街を離れ、田んぼや畑が広がる郊外へと入る。前方には県内では結構有名な山が青く裾野を広げており、須崎はどうやらその山に向かっていているようだった。県外から来た拓夢は、もちろんその山には行ったことがない。一度行ってみたいとは思っていたが、いつサエのことを切り出されるのかと思うと気が気ではなくて、とてもじゃないが楽しめる気分ではなかった。

一時間ほど走ると道は上り坂になり、すぐに木々が生い茂る山道となる。

「もう少し上に行くと、木が少なくなって見晴らしが良くなるから」

前方を向いてハンドルを握りながら須崎が言う。

「はい……」

拓夢は何と答えたら良いのかわからなくて、その言葉にぼんやりと返した。やがて、須崎の言葉通りに木々が少なくなってくる。そして、いくつかカーブを曲がった途端に、いきなり前方の視界が開けた。

「わあッ……！」

木々が生い茂る山肌と広大な田畑の向こうに、拓夢たちの大学のある市街が見える。拓夢はその広々とした景色に思わず感嘆の声を上げると、助手席の窓に顔を近付けた。

「結構きれいだろ」

須崎が笑いながら拓夢に尋ねる。そして、その先にある少し開けた場所に車を止めるとエンジンを切った。

「ここまで登ると結構涼しいぞ」

須崎が車のドアを開けて言う。そして、拓夢の足下から一升瓶を持ち上げると、それを携えて車を降りた。

(まさか、飲んだりしないよね……)

いくらなんでも昼間から酒は飲まないだろう。それに、拓夢は免許を持っていないので、須崎が酒を飲んでしまうと帰りの運転手がいなくて困る。ちょっと心配しながら車を降りると、ガードレールの手前まで歩いて行った須崎が一升瓶を開けるのが見える。そして、須崎は突然その一升瓶を逆さにすると、中身を崖の下に向かってドボドボと撒き始めた。拓夢は須崎の隣まで歩いて行くと、酒が落ちて行く先を見下ろす。「事故現場はもう少し先なんだけど、あそこは車を停める所が無くて危ないから……」

須崎がそう言って言葉を切る。拓夢はその言葉にハッとして目を見開いた。

(そうか、ここはおばさんの……)

夫人の息子はバイクの事故で死んだと言っていた。では、きっとその青年はこの山で事故を起こして亡

くなったのだろう。

「今日は月命日なんだ」

須崎はそう言うと、空になった一升瓶を足下に置く。

「二年前の事故で浩人が死んで以来、こうして俺が毎月おばさんたちの代わりにここに来ている」

「そうなんですか……」

拓夢はやはり言葉を探しあぐねて小さく答える。そして、不意にあることに気付いた。

(なんで須崎先輩は僕が知ってること……)

夫人から彼女の息子のことを聞かされたのは昨夜のことだ。では、須崎はその後で夫人からそのことを知らされたのだろう。すると、須崎が遠くの景色を眺めながら再び口を開いた。

「俺は浩人と同じ施設にいた」

「え？」

拓夢は驚いて須崎を見る。

「ごめん。隠すつもりじゃなかったんだ。言うきっかけが無かっただけで、話はその方向に向かえばちゃんと言うつもりだった。今頃言っても言い訳にしかないけど……」

「そんなこと……」

須崎の突然の告白に拓夢は慌てる。

「同じ年だった俺たちは施設でもいつも一緒だった。でも、小学生に上がった頃に、俺は医者、浩人は酒屋の養子になった。十年後にあの店で再会した時には、本当に奇跡かと思ったよ」

「ほんとですね」

須崎の言葉に、拓夢は素直に頷く。須崎は不意に口を噤むと、遠くを見詰めたまま次の言葉を探すように瞳を揺らした。

「大病院の跡取りとして引き取られた俺は、医者になるよう勉強させられた。幸い勉強は嫌いじゃなかったから、父親を満足させるのは簡単だった。でも、その家にはもう一人子供がいてさ……」

(え……)

拓夢は驚いて須崎を見る。須崎は相変わらず遠くを見詰めたまま続けた。

「父親は弟を病院の経営者にしたかったらしい。でも、勉強が嫌いだった弟は思春期になると父親に反抗するようになって、そのうち家にも寄り付かなくなった。父親に言われて弟を連れ戻しに行った俺は、そこで弟に言われたんだ。お前がいなくなれば家に戻ってやる、ってね」

「そんな……！」

拓夢は思わず憤慨して言う。

「所詮、俺は養子で弟は実子だ。俺は家を出ることを約束し、家から遠く離れたこの大学を受験した。お陰で浩人と再会出来たんだから、結果的には良かったのかもしれないけどな」

須崎はそう言うと、その視線を崖の下に向けた。

「その頃浩人は高卒で進学を諦め、酒屋を手伝っていた。『手伝っていた』ってのは語弊があるな。あの店は浩人で持ってたんだから」

腰を悪くした店主と体の弱い夫人だけでは酒屋を続けていくことは出来ない。従業員を雇えるほど余裕の無い店にとって、息子の存在はとても大きかったに違いない。

「血は繋がってなくても浩人は俺の兄弟だと思っているし、浩人の親は俺にとっても大切な人だ。だから浩人が死んだ時、俺は浩人の代わりに酒屋を手伝うことにした。でも、バイトをしながら続けていけるほど医学部は簡単じゃない。父親に内緒で転学したら、すぐにバレて親子の縁を切られた」

(ああ、それでか……)

須崎は父親といろいろあって、自分で学費や生活費を稼いでいるのだと佐竹が言っていたのを思い出す。すると、須崎が視線を上げて拓夢を見た。

「拓夢には寂しい思いをさせてすまないと思ってる。普通なら毎日一緒にメシ食いに行ったり遊びに行ったり出来るのに……」

そしてそう言うと、躊躇うように言葉を切る。

「俺と付き合っても、楽しくないんじゃないか……？」

「そんなこと……」

須崎の言葉に、拓夢はグッと唇を噛み締める。

「須崎先輩こそ……僕と付き合ったこと、後悔してるんじゃないですか……？」

意を決して尋ねると、須崎が怪訝そうに眉をひそめた。

「どういう意味だ？」

真剣な目で問われて、拓夢は思わず視線を逸らす。

「だって……」

『じゃあどうしてキスしてくれないんですか？』

『サエ先輩のこと好きなんじゃないんですか？』

拓夢はそれらの言葉をグッと呑み込む。目をキツク閉じて俯くと、それを見た須崎が小さく溜息をついた。

「……夏休みに入ったあたりから拓夢の様子がおかしいことには気付いていた。原因は俺か？ 拓夢」

拓夢は俯いたまま無言で唇を引き結ぶ。須崎はギュッと眉を寄せると、拓夢の肩を掴んだ。

「頼むから言ってくれ。言ってくれないと、俺にはお前の気持ちがわからない」

以前と同じことを言われて、拓夢はビクッと体を揺らす。その怯えた様子を見て、須崎が困惑したように手を離した。

「俺が悪いのなら謝る。もし何か誤解しているのなら弁解させてくれ。俺は何も隠さないし嘘もつかない。浩人の前で誓うよ」

拓夢はその言葉にハッと息を呑む。そう言えば、いつの間にか自分は須崎と言葉を交わすことを避けていた。うっかり核心に迫って、須崎に別れを切り出されるのが怖かったからだ。拓夢は瞳を揺らして須崎を見上げる。自分を見詰める須崎の瞳は、どこまでも真剣で真摯だった。

「じゃあ一つだけ……聞いてもいいですか？」

拓夢は勇気を出してそっと尋ねる。そして、須崎が頷くのを確認すると、コクッと喉を鳴らした。

「須崎先輩、サエ先輩のこと……好き？」

震える声で尋ねると、途端に須崎がびっくりしたような顔をする。

「サエさんを？ 俺が？」

拓夢が小さく頷くと、須崎はホッとしたように目を細めて笑った。

「サエさんは、父親から援助を打ち切られて文字通り路頭に迷った俺を半年ほど自宅に居候させてくれたんだ。確かに命の恩人だけど、そういう意味では好きじゃないよ」

「え……？」

拓夢は須崎の言葉に驚いて目を見開く。居候……確かに一緒に住んでいることに変わりはないが、その意味合いは天と地ほども違った。

「サエさんの父親は芸術に理解のある人で、他にも若い書生や画家の卵を何人も家に住まわせてたんだ。同じ敷地内にアトリエもいくつもあったしね。俺があのアパートに移ったのは二年になってからだ。先輩が卒業して空き部屋が出来たから来い、って部長に呼ばれてね」

その頃はまだ部長じゃなかったけどな、と言って須崎が笑う。

「そうだったんだ……」

拓夢はホッとし過ぎて、思わずその場にへたり込みそうになる。すると、拓夢を見詰めながら須崎が再び嬉しそうに目を細めた。

「嬉しいよ。妬きもち焼いてくれたんだろ？ 拓夢」

「う……」

拓夢は須崎の言葉に思わず真っ赤になって口籠る。

「そんなこと言って……キスもしたがりなかつたくせに……」

思わず不満を漏らし掛けた拓夢は、慌てて後半部分をゴニョゴニョと濁す。すると、須崎が更に笑みを深めて、俯いてしまった拓夢の顔を覗き込んだ。

「悪かった。なんか、俺にとっては拓夢って眩しくてさ……」

そしてそう言うと、拓夢に向かって両手を伸ばす。

「俺なんかが触れたら汚しちまいそうで、怖かったんだ……」

その手が背中と腰に回されたのを感じて、拓夢は驚いて須崎を見上げた。須崎はその腕に少しだけ力を籠めると、拓夢の体をそっと抱き寄せる。

「それに、一度触れたら絶対に我慢出来なくなっちゃうと思ったし……」

広い胸に抱き込まれて、拓夢は耳まで真っ赤になる。途端にドキドキと心臓が高鳴り、立っていられなくなってシャツの背中にしがみ付くと、須崎が力強い腕で拓夢を抱き締め返した。

「キス……してもいいか？」

甘い声音で耳元に囁かれて、拓夢はビクンと体を揺らす。答える代わりに頷くと、少しだけ体を離して顎を掬われた。

「あ……」

ドキドキと今にも心臓が口から飛び出しそうになる。思わずギュッと目を閉じると、須崎が小さく笑った。

「知らないのか？ キスは目を開けてするんだぞ？」

「えッ？」

驚いた拓夢は慌ててパチッと目を開ける。その瞬間、拓夢は目を開けたまま唇を塞がれ、須崎に息を奪われた。

「拓夢……」

人目を避けて戻った車内で、再び拓夢は須崎に唇を求められる。

「……んっ……」

先程は触れるだけのキスだったのに、ペロリと唇を舐められて、拓夢は思わず声を上げた。戸惑いながらも唇を開くと、須崎の柔らかな舌がすかさず中へともぐり込んで来る。

「……あっ……」

器用に動く舌で探り当てられ、拓夢はそっと舌先を合わせる。何度か舐め合ってからチュッと音をたてて吸うと、須崎が煽られたように拓夢の肩をキツく掴んだ。

「拓夢……」

熱っぽい声音で再び求められて、拓夢はゾクリと体を震わせる。途端にジワリと体の下方で別の熱が生まれた。

「須崎先輩……」

拓夢は息を乱しながら、求められるままに唇を開く。須崎は赤く濡れた唇に深く口付けると、舌を絡め

て強く吸ってから、ハアと熱い息をこぼした。

「やばいな……」

乱れた息に混ぜて須崎が呟く。

「頭がクラクラする……」

それは拓夢も同様で、その理由もわかっていた。

「須崎先輩……」

拓夢はそっと須崎の名を呼ぶと、再び目を伏せて口付けをねだる。

「拓夢……」

須崎は拓夢の体を抱き寄せると、しなやかな背に手を這わせながら再び深く口付けた。

「今日はありがとうございました」

店に戻って車を降りると、拓夢はペコリと頭を下げた。

「いや、こっちこそ付き合わせちゃって悪かったな」

須崎はそう言うと、建物の脇から拓夢の自転車を持って来る。

「寮まで送るよ」

拓夢は、いえ、と答えて首を横に振った。

「それより、ちょっと遅くなっちゃったから奥さんがご飯食わずに待ってるかもしれませんよ」

遅くなってしまったのは、もちろん初めての口付けに二人とも夢中になってしまい、なかなか出発出来なかったからだ。早く行ってあげてください、と言うと、須崎が真顔に戻って拓夢を見詰める。

「拓夢……」

名前を呼ばれて視線を上げると、須崎に唇を掠め取られた。

「ダメですよ」

ここは通りからも丸見えなので、誰に見られるかわからない。わざと怒った顔を見ると、須崎が困ったように眉尻を下げた。

「帰したくないんだけど」

苦笑しながら言われて、拓夢はフワリと頬を染める。もちろん拓夢だって一緒にいたいしキスもしたい。それは須崎と同じである。チラと通りの方を窺うと、その視線に気付いた須崎が拓夢の手をそっと引く。拓夢は誘われるまま建物の影に入ると、須崎の力強い腕に抱かれて自分から唇を開いた。

携帯電話の着信音が鳴り、メールが一件送られて来る。

(誰だろ……)

寮の自室でくつろいでいた拓夢は、寝転んでいたベッドの上で起き上がるとメールの送り主を見た。

「あ、部長だ……」

それは佐竹からだ。メールの件名を見た拓夢は、途端に目を輝かせる。

「やった！」

『撮影開始！』

そこに書いてある文字を見て、拓夢は急いで本文を開ける。本文には撮影の日程や場所や集合時間が書かれており、その内容に拓夢は驚いて目を丸くした。

「えッ、合宿ッ？」

日程は一週間。場所は南関東のちょっと有名な避暑地である。

「凄い……」

拓夢は佐竹の気合いを感じて思わず呟く。しかし、合宿ということは、何が何でもその期間内に撮ってしまわなければならないということでもあった。

「大丈夫なのかな……」

一週間の間には天候不順で撮影出来ない日もあるだろうし、他のメンバーの日程もある。佐竹は『合わせろ』と言っていたが、細川や丸山は既に企業で働いているし、須崎だってバイトがある。日程はお盆明けだから店の繁忙期は過ぎているが、日々の配達はあるだろう。思わず呟いたところへ、その須崎から電話が入った。

「もしもし！」

名前を見た途端にパッと笑顔になった拓夢は、急いで携帯電話を耳に当てる。すると、拓夢の大好きな声が自分の名を呼んだ。

「拓夢、メール見たか？」

「はい。見ました」

昼間の須崎との甘い口付けを思い出し、拓夢は赤くなりながら頷く。

「大丈夫か？」

合宿に行けるのかと問われて、拓夢は再び頷いた。

「僕は大丈夫ですけど、須崎先輩は？」

心配して尋ねると、須崎が電話の向こうで、大丈夫だ、と答える。

「銭湯とパチンコ屋はシフトから外して貰えばいいし、酒屋の方はピンチヒッターを探す。夏休み中だから誰か捕まるだろ」

「良かった」

須崎の言葉に拓夢はホッとして胸を撫で下ろす。

「楽しみですね、合宿」

撮影は緊張するが、須崎と一緒に過ごせるのは嬉しい。思わず目元を染めて言うと、須崎が耳元で囁いた。

「同じ部屋に泊まれるかな」

「え……！」

その言葉に、途端に拓夢は真っ赤になる。

「須崎先輩、エロい……」

思わず非難声で言うと、須崎が楽しそうに笑った。

「ところで、明日はどうする？」

「明日？」

拓夢は須崎の言葉に疑問符で答える。明日は拓夢は普通にサークルに行く予定である。そう言うと、須崎が、あれ、と言って続けた。

「明日から留守にするからサークルは合宿まで休みにする、って部長のメールに書いてあっただろ？」

「えッ……！」

拓夢は驚いて目を見開く。そう言えば、メールを読んでいる途中で電話が来たので、まだ全部読み終えていなかったのだ。しかし、そうなると拓夢は須崎に会えなくなってしまう。夕方頃にでも店に行こうかと考えていると、須崎が再び受話器の向こうで言った。

「俺の部屋に来るか？」

「え……？」

その言葉に、拓夢の胸がドキンと震える。

「い……いいんですか？」

ドキドキしながら尋ねると、須崎は再び楽しそうに笑った。

「なんなら部長が戻って来るまで泊まっててもいいぞ？」

擲揄うように言われて、拓夢はその言葉に更にドキドキと鼓動を速める。

(そうか……！)

佐竹がいないということは、あのアパートに須崎と二人きりということである。拓夢は思わず携帯電話を握り締めると、コクンと大きく頷いた。

「行きます。何時頃に行ったらいいですか？」

尋ねると、須崎がウ〜ンと考えてから、九時、と答える。

「それまでには何とか部屋を片付けて掃除しとくよ」

須崎の言葉に拓夢は笑う。突然泊めて貰った時も、須崎の部屋はちゃんときれいに片付いていた。

「じゃあ、明日」

拓夢は頬を染めながら須崎に言う。

「ああ、待ってる。気を付けて来いよ」

須崎はそう言うと、おやすみ、と言って電話を切った。

「おやすみなさい……基央先輩」

拓夢は携帯電話を握り締めて小さく呟く。それからふと思い出して、再びメールを開けた。

「部長、どこに行くんだろ？」

画面をスクロールしていくと、『追伸』という文字が現れる。その後の文章を読んだ拓夢は、えええッ、と思わず声を上げた。

『追伸：親が泣いてウルセーから、ちょっと地元で見合いして来る。合宿所で会おう！』

「見合いッ？」

拓夢は目を見開いて、その一文を読み返す。どうしても佐竹と『見合い』のイメージが結び付かず、拓夢は暫し呆然と携帯電話の画面を見詰め続けた。

「おはようございます」

例のボロアパートに行くと、すぐに須崎が顔を出す。

「おっ」

拓夢の顔を見とめると、目元を緩めて中へと促した。

「先に言っとくけど、暑いぞ？」

一階は二階ほど屋根からの輻射熱が無いのでまだマシだが、それでも冷房の無い部屋は暑い。

「自分がない間は使っていいって言われて鍵預かってるけど、どうする？」

佐竹の部屋には冷房がある。行くかと問われて、拓夢は、いいえ、と首を横に振った。

「先輩の部屋がいいです」

須崎の部屋に上がるのは、付き合うようになってからは初めてだ。少しだけ顔を赤くして言うと、須崎も、そうか、と言って照れたように笑った。

「お邪魔します」

拓夢はペコリと頭を下げて靴を脱ぐ。通された部屋は佐竹の部屋と同じ広さの筈だが、家具や荷物が無いので広々として見えた。

「相変わらず何も無い部屋だろ」

佐竹の部屋はダイニングキッチンが兼居間だったが、須崎の部屋は奥の間が寝室兼居間になっているらしい。畳敷きの6畳間の中央に小さな折り畳み式の座卓が置かれているのを見て、拓夢はその横にチョココンと座った。

「あ……」

裏手にある雑木林の方から玄関脇にある窓の方へと、スウと涼しい風がまっすぐに吹き抜けて行く。思ったより居心地のいい部屋に、拓夢は思わず微笑んだ。

「結構涼しいんですね、この部屋」

「そうか？」

須崎が苦笑しながら、水で冷やしていたらしい缶ジュースを流しから持って来る。水滴を拭いて一本を拓夢の前に置くと、もう一本を開けながら拓夢の脇に腰を下ろした。

「奥さんに貰ったんだ」

「いただきます」

拓夢も遠慮なく缶ジュースを開ける。ひと口飲むと、そうだ、と言って須崎を見た。

「部長、『お見合い』って書いてあったけど本当なんですか？」

「さあな」

拓夢の言葉に、須崎が溜息混じりに答える。

「もし本当なら『馬鹿野郎』だと思うけどな」

「馬鹿野郎……ですか」

意味がわからなくて返すと、須崎が拓夢を見てフツと笑みをこぼした。

「暑くないか？」

須崎がそっと尋ねながら、拓夢の髪に優しく触れる。

「はい」

途端に拓夢はドキドキして、頷きながら再び缶ジュースに口を付けた。

「そうか」

須崎の指が拓夢の髪をそっと掻き上げ、耳の後ろに掛ける。そのまま耳の縁を優しくなぞられ、そっと耳たぶを摘まれて、くすぐったいようなその感覚に拓夢は思わず首を竦めた。

「く、くすぐったいです……」

恥ずかしくて頬を染めながら見上げると、須崎がそっと拓夢の方へと体を傾ける。

「拓夢……」

すぐ間近で名前を呼ばれて、拓夢は思わず目を閉じた。

（あ……）

口元に息を感じて少しだけ唇を開くと、須崎がそっと口付けてくる。

「ん……」

柔らかだが弾力のある舌で口中を探られて、拓夢は躊躇いがちに舌先を合わせると、不器用な動きでそれに応えた。

「……んっ……」

須崎が左手を伸ばして拓夢の肩をグッと抱き寄せる。拓夢は仰け反るようにして顔を上げると、深く唇を合わせたままギュッと須崎のシャツの背中を掴んだ。

「拓夢……」

須崎が微かに息を上げながら、拓夢の上に覆い被さって来る。

「あっ……」

畳の上にそっと押し倒され、再び深く口付けられて、拓夢は大きく喘ぐと夢中で須崎の肩を掴んだ。

「ん……んんっ……ハアッ」

酸素を求めて唇をズラすと、すぐに追い掛けて来た唇に塞がれる。

「し、死んじゃう……！」

必死に顔を仰け反らせて喘ぐと、須崎も息を喘がせながら目の前に晒された柔らかな首筋に口付けた。

「あッ……！」

夢にまで見た須崎の愛撫に、拓夢は思わず声を上げる。しかし、自分の上げた声の大きさに思わずハッと我に返ると、慌てて須崎の下で身じろいだ。

「す、須崎先輩ッ……」

自分の上半身に覆いかぶさっている体を押し返そうとすると、須崎が鼻先を拓夢の首筋にすり寄せる。

「拓夢……」

囁きながら首筋に舌を這わされて、くすぐったさとは違う別の感覚に腰の後ろがゾクリと痺れた。

「んんっ……！」

拓夢はビクンと大きく体を揺らすと、ギュッと目を閉じて須崎の体にしがみ付く。須崎は拓夢の肩を形を確かめるように掴みながら撫でると、そのまま下に降りてTシャツの裾から中へともぐり込んだ。

「あッ……！」

熱い手の平で脇腹をスルリと撫で上げられて、拓夢は再びビクンと体を反らす。須崎は拓夢の背中を優しく宥めるように数回撫でると、その手を脇腹から前へと移動させた。

「あッ、んんっ……！」

平らな胸の上をまあるく撫でられ、指先に触れた小さな突起を摘まれる。途端にゾクゾクと腰の後ろを快感が走り、その初めての感覚に拓夢は思わず声を上げると須崎の手を押さえた。

「ダ、ダメッ……！」

「イヤか？」

須崎が覗き込むように拓夢の目を見て尋ねる。

「気持ち悪い？」

そっと問われて、拓夢は真っ赤になりながらも首を横に振った。

「そうじゃないけど……でも……」

須崎のキスと愛撫だけで、拓夢の体は既に感じ過ぎるほど感じてしまっている。変化した下半身を悟られたくなくてモジリと膝を合わせると、それに気付いた須崎が手を伸ばして拓夢のGパンの膨らみに触れた。

「ダッ、ダメです……！」

拓夢は慌てて身を振り、須崎の下から逃れようとする。熱を持ってズキズキと疼いているそれは、須崎に直に触れられたらあっという間にイッてしまいそうだった。

「拓夢？」

須崎がどうしたのかと問うように拓夢の顔を覗き込む。拓夢はギュッと目を閉じて首を激しく横に振ると、ごめんなさいッ、と須崎に謝った。

「む、無理です！」

「え……？」

拓夢の言葉に、途端に須崎が戸惑うように瞳を揺らす。その声が、心配そうに拓夢の名を呼んだ。

「ごめん……気持ち悪かったか？」

「違います！」

拓夢は慌てて首を横に振ると、必死に次の言葉に探す。

「そうじゃなくて……」

すると、須崎がそっと尋ねた。

「キスは？ キスはイヤじゃない？」

「はい」

拓夢は力強くコクンと頷く。須崎とのキスは好きだ。須崎と唇や舌を合わせていると、うっとりして思わず時間を忘れてしまう。

「ここは……？」

須崎が尋ねながら、拓夢の首筋を人差し指でなぞる。

「あっ……」

拓夢は思わず小さく声を上げると、真っ赤になって首を横に振った。

「い、いやじゃないです……」

「背中も大丈夫だよな。胸がイヤか……？」

須崎が尋ねながら、拓夢の背中と胸を手の平で優しく撫でる。途端に敏感になっている箇所に触れられて、拓夢は、アッ、と叫ぶと、ピクンと体を震わせた。

「そうか、敏感過ぎるのか……」

須崎が独り言のように言いながら、拓夢の胸を優しく撫でる。わざと尖りには触れずに労わるように撫でられて、拓夢はホッと息をつくとき体から力を抜いた。

「気持ちいいか……？」

須崎の温かな手の平の感触に、拓夢は小さくコクンと頷く。須崎は拓夢の腹や脇腹を優しく撫でながら、そっとTシャツを胸まで捲った。

「あ……」

北向きの薄暗い室内に、白い肌が露わになる。拓夢は思わず耳まで真っ赤になると、ギュッと目を閉じて体を硬くした。

「触るぞ……」

須崎が掠れた声で囁いて、色素の薄い胸の尖りに指先で触れる。

「あッ……」

先程の刺激で硬く立ち上がっているそれは、少し触れただけでもズキンと痺れて、拓夢の腰を甘く疼かせた。

「んんッ……！」

指の腹でツンと立ち上がった尖りを擦られ、その刺激にGパンの内側でも熱い強張りが反応する。拓夢は慌ててそれを手で抑えると、必死の形相で須崎を見上げた。

「や、やっぱりダメです……！」

今にも泣きそうなその顔を、須崎が何か考えるようにジッと見詰める。

「わかった」

やがて須崎はそう言うと、拓夢を安心させるように優しく笑った。

「別にこういうことがしたくて呼んだんじゃない。一緒にいたくて呼んだんだから、気にしなくていいからな？」

「須崎先輩……」

拓夢は体を起こそうとする須崎の腕に慌ててしがみ付く。

「き、嫌いになった……？」

戸惑いながら見上げると、須崎が、バーカ、と言って拓夢の頭をクシャリと撫でた。

「俺も急ぎ過ぎた。ごめんな」

そしてそう言うと、少し照れたように苦笑する。拓夢はハッと目を見開くと、須崎のGパンを押し上げていっているものに気付いて赤くなった。

(須崎先輩だって……同じなんだ)

同じ男なら当たり前の反応が、しかし拓夢にはこれ以上ないほど恥ずかしい。須崎の目の前であられもなく声を上げて欲望を吐露するなんて、考えただけでも羞恥に身が竦んで死にそうだった。

「焦る必要は無いから、無理しないで少しずついこう」

須崎は優しく微笑みながらそう言うと、再び拓夢の上に身を屈める。

「キスは大丈夫だったよな？」

そして、確認するように瞳を覗き込んで笑うと、拓夢の唇にチュッと音を立てて口付けた。

「あ……」

上体を起こそうとしていた拓夢は、離れて行く須崎の唇を慌てて追い掛ける。須崎の腕を掴んで追い縋るように顎を上げると、須崎がそれに気付いて拓夢の顎を指先で掬い上げた。

「好き……」

拓夢はしっかりと唇を合わせてからそっと囁く。

「須崎先輩が好き……」

「拓夢……」

須崎が再び深く口付けながら拓夢の背中を優しく撫でる。それは先程までの扇情的な動きではなく、親が子をあやすような優しいもので、拓夢は須崎の優しさに思わず泣きたくなった。

「基央……先輩……」

そっと名字ではなく名前と呼ぶと、須崎が驚いたように唇を離す。そして、フワリと目元を和らげて嬉しそうに笑った。

「出来れば『先輩』も無しで頼む」

少なくとも二人だけの時は、と言われて、拓夢は恥ずかしさに再び赤くなる。

「基央……」

拓夢は小さな声で須崎を呼ぶと、恥ずかしさに耐えかねて、先輩、と付け加えた。

「こら」

須崎が笑いながら拓夢に顔をしかめて見せる。しかしすぐに甘く微笑むと、再び拓夢の唇に口付けを落とした。

「こっちだよ、みんな！」

合宿先の最寄り駅に着くと、先に来ていたらしいサエが八人乗りのステーションワゴンの運転席に座って待っていた。

「サエ先輩、運転出来たんですね」

運転免許を持っていない拓夢は感心して言う。

「マニュアルがあるものはね、結構簡単なんだよ」

サエは得意そうにそう言うと、トランクを開けてみんなが持って来た荷物を積み始めた。

「主な食料品は管理人さんが買っておいしてくれたみたいだから、お菓子とか食べたいものを買って足していこうか」

サエの言葉に、荷物の積み込みを手伝っていた拓夢は視線を向ける。

「管理人さん？」

貸し別荘か何かなのだろうかと思って尋ねると、サエは、うん、と言ってにっこり微笑んだ。

「うちの別荘なんだ。父親が道楽で建てたものでね。普段はアトリエとして使ったり、社員の福利厚生に使ったりしてるんだよ」

「す、凄いですね……」

思わず感心して言うと、サエがクスリと苦笑する。

「全部父親のものだよ。僕の持ち物じゃない」

それが珍しく自嘲的に聞こえて、拓夢は驚いてサエを見詰めた。

「さて。護が着くのは夕方だって言ってたし、それまでに美味しいご飯でも作っておこうか」

サエがヒョイと眉を上げて、屈託の無い笑顔で明るく笑う。

「僕だってやれば出来るんだってところを見せてやらなきゃね！」

その言葉に、すかさず丸山が割って入った。

「いや！ メシなら俺らが作りますから、サエさんは大人しくしててください！」

慌てたような丸山の言葉に、同じように荷物を積み込んでいた細川が大きく頷く。

「そうです。サエさんは何もしないでお茶でも飲んでてくだされば結構ですから」

冗談ではなく本気で言われて、途端にサエはプツと頬を膨らませた。

「それってどーいうことだよ！ 僕の作る料理が食べられないとでもッ？」

鼻息も荒く息巻くサエに、丸山と細川が視線を逸らしたまま無言で答える。

「酷い！」

サエは二人の反応に更に語気を荒げると、プンと怒りながら運転席に座ろうとした。

「あ、運転は俺が」

それを見た須崎が、ちょっと慌てたようにサエの腕を掴む。途端にサエはムウウツと目尻を吊り上げると、拓夢の腕をグイと掴んで後部座席に乗り込んだ。

「ほんとに可愛くない後輩たちだよ！ 人のことを危険要注意人物みたいにさ！」

「そんな、『みたい』だなんて」

その言葉に、つい丸山がポロリと突っ込む。拓夢はサエの唇が更に尖ったのを見て慌てると、そ、そう
だッ、と大きな声を出して前方を見た。

「ジュースとか美味しい飲み物を調達して行きましょうよ、サエ先輩！ 僕たち、ノンアルコール派なん
ですから！」

サエ先輩は何が好きですか、炭酸系ですか、果汁系ですかと話を向けると、途端にサエが機嫌を直す。

「だったら甘いものも調達しなくちゃね！ 拓夢ちゃん、ケーキとか好き？」

サエがウキウキと目を輝かせながら拓夢の好物を聞く。一同はホッと胸を撫で下ろすと、途中目に付い
た店で買い物をしてから目的地に向かった。

サエの父親が所有する別荘は、海岸沿いの高台に建っていた。洋風の大きな別荘はまるで白亜の宮殿の
ようで、拓夢はその前に立って、ふええ、とヘンな声を出す。

「貧富の差ってのを実感するだろ？」

丸山が拓夢にしみじみと言いながら、重い機材を担いで通り過ぎる。

「はい」

拓夢は大きく頷くと、自分もスーパーのビニール袋を両手に下げて丸山の後に続いた。

観音開きの大きな玄関をくぐると広いフロアに出る。フロアの中央にはゆったりとしたソファセットが
置かれており、左手奥には結婚式場のパンフレットに出てくるような緩く弧を描いた真っ白な階段があっ
た。

「右に行くトリビングとダイニングキッチンがあって、正面に行くと風呂とトイレがあるから。二階は全
部客室だから、先に一番好きな部屋を選んでいいよ、拓夢ちゃん」

サエがウキウキと説明しながら拓夢を二階へ誘う。

「はあ……」

拓夢はとりあえず食料品をキッチンに運ぶと、サエに連れられて二階へと上がった。

「わあッ……！」

階段からすぐの部屋に入ってカーテンを開けると、途端に一面の海が現れる。視界いっぱい広がる水
平線に、拓夢は思わず感嘆の声を上げると、サエに促されるまま窓を開けてバルコニーに出た。

「凄い、涼しいですね！」

日差しは強いが海風が強く、あっという間に汗を攫っていく。その広いバルコニーには各部屋から出ら
れるようになっており、中央に置かれた白いテーブルセットでゆっくりとくつろげるようになっていた。

「お嬢様方、お茶でもお持ちしましょうか？」

そこへ丸山が顔を覗かせて声を掛ける。途端にサエは、僕がやるッ、と叫ぶと、拓夢を見てにっこり笑っ
た。

「一番気に入った部屋を選んでいいからね。どうせみんなは酒が入ったらリビングで寝ちゃうんだから」

拓夢はサエの言葉に思わず笑う。サエは再び拓夢に笑い掛けると、必死に押し留めようとする丸山を押
し退けて階下へと下りて行った。

「よっ」

そこへ、入れ違いに須崎がやって来る。

「いいところにいるな」

須崎は椅子に腰掛けて海を眺めていた拓夢に歩み寄ると、すぐ横に自分も椅子を引き寄せて座った。

「須崎先輩」

二人きりになれたことが嬉しくてニコニコと笑顔を向けると、すぐに須崎に、基央、と訂正される。

「基央……先輩」

あれから一週間ほど経っているが、まだ拓夢はそのくすぐったさに慣れることが出来ない。思わず顔を赤くして微笑むと、須崎が笑みを深めて屈み込んだ。

「あ……」

拓夢はうっとり目を閉じて須崎の口付けを受ける。それからハッと我に返ると、慌てて須崎の体を押し返した。

「誰か来たらどうするんですかっ」

声をひそめて部屋を振り返りながら言うと、須崎が楽しそうに笑う。

「大丈夫だ。他の三人はキッチンでサエさんと格闘中だから」

敢えて『お茶淹れ』ではなく『サエさんと』と言う辺りが可笑しくて拓夢は思わず苦笑する。須崎は再び屈み込むと、拓夢の顎を摘まんで唇を合わせた。

「ん……」

拓夢は自分から唇を開いて須崎の舌を受け入れる。甘えるように何度も吸うと、須崎が唇を横に引いて薄く笑った。

「拓夢……」

抱き寄せられるまま須崎の肩口に頭を寄せる。須崎は大きな手の平で拓夢の頭や頬を愛おしそうに撫でると、耳を摘まむように愛撫してから首筋に指先を這わせた。

「あ……」

あれから毎日のように須崎は拓夢の首筋に口付けてくる。お陰ですっかり敏感になってしまい、指先で撫でられるだけで息が乱れ、口付けられるだけで甘い喘ぎが漏れた。

「だめ……」

拓夢はうわ言のように小さく呟きながらも、その言葉とは裏腹に顎を仰げ反らせて須崎の視線に首筋を晒す。

「拓夢……」

須崎が掠れた声で囁きながら柔らかな首筋に口付けようとしたその時、まるでお決まりのように階下からサエの声が二人を呼んだ。

「お茶が入ったよー！」

拓夢は思わず須崎と顔を見合わせ、すぐにプツと嘔き出して笑う。

「行きましょうか」

苦笑しながら立ち上がると、須崎が、その前に、と言って拓夢の手を引いた。

「……？」

すぐに家の中に戻ろうとした拓夢は、どうしたのかと須崎を見る。しかし、須崎が自分に向かって両腕を広げて微笑むのを見ると、すぐに嬉しそうに頬を染めて甘えるように須崎の体に抱き付いた。

佐竹から連絡があったのは、夕暮れを過ぎて夜になった頃だった。先に夕食を済ませてリビングのソファで酒を飲み始めていたメンバーは、サエの、遅いッ、という声にそちらを見る。

「いつまで待たせる気さ！ もう夕ご飯食べちゃったからね！」

サエが携帯電話に向かってポンポンと声を荒げる。

『ははは。悪かったよ』

佐竹が謝る声が小さく聞こえる。どうやら、駅に着いたので須崎に迎えに来させるようにと言っているようだった。

「僕が行く！」

サエの言葉に、俺が行きます、と須崎が答える。

「俺、飲んでませんし」

サエももちろん飲んでいないが、誰もが須崎に賛成する。

「ついでにコンビニでアイスでも買って来ますよ」

サエさん、ラムレーズン好きでしたよね、と問われて、サエは渋々頷きながら須崎に鍵を渡した。

「……あの二人ってさ、仲いいよね」

同じ窓から須崎の乗った車が走り去るのを眺めながら、サエが拓夢にポツリと言う。

「はぁ」

確かに仲は悪くないので頷くと、サエが小さく溜息をついてから言った。

「一年の頃はモトくん、すごく可愛くてね。護もすごく可愛がってたんだよ」

再び自分の知らない須崎の話をして、拓夢は思わず口を噤む。

「だから僕は路頭に迷ってたモトくんを自分の家に呼んだんだ。護が自分の部屋に引きずり込んで手を出さないようにと思ってね」

護ってあの頃から酒癖が悪かったから、と言ってサエが大きな溜息をつく。

「でも、僕が卒業するとモトくんは護と同じアパートに移っちゃった。目の前が真っ暗になったよ。幸い護は手を出さなかったみたいだから良かったけど……」

では、やはりサエは須崎が好きだったのだ。そして、須崎はそんなサエの気持ちに気付かないまま家を出てしまったのだろう。それを聞いて拓夢は思わずホッとする。もしサエが自分の気持ちを打ち明けていたら、今頃須崎はサエ一筋で、拓夢になど目もくれなかったに違いない。すると、サエが不意に拓夢を見て真面目な声音で言った。

「でも、安心していたら今度は君が現れた……拓夢ちゃん」

「え……？」

拓夢は突然自分の名前が出たので驚いてサエを見る。

「僕……ですか？」

思わずドキドキして問うと、サエは神妙な顔で、うん、と答えて頷いた。

「どうやら新入生に本気らしいって弟から聞かされた時は頭の中が真っ白になったよ。会いに行ってみたら、本当に可愛い子でさ。可愛くて純粋で素直な拓夢ちゃんは、僕なんかとは正反対で恐くなった。敵わない。このままじゃ僕には勝てない。これは待ってるだけで何もしなかった自分への罰だ、って思ったんだ」

静かな声音の告白に、拓夢は声も無くサエを見詰める。

「だからね、僕は決めたんだ。この一週間で取り戻そうって……」

「え……？」

サエの言葉に拓夢は驚いて目を見開く。サエは拓夢をジッと見詰めると、真剣な眼差しで繰り返した。

「この一週間で僕は絶対に彼を振り向かせてみせる。拓夢ちゃんのごことは大好きだけど、これだけは譲れない」

サエはきっぱりそう言うと、ごめんね、と言って窓辺を離れる。拓夢はサエの本気の言葉に戸惑い、瞳を揺らすと、他のメンバーの方へと戻って行く後ろ姿を見詰めながらギュッと両手を握り合わせた。

「うおおおお……頭痛エエエ……」

拓夢が階下に下りて行くと、ちょうど佐竹がソファの上に起き上がったところだった。

「本当にここで眠っちゃったんですね」

拓夢は食べ散らかしたテーブルの上や林立する空き缶の群れを見て、思わず目を丸くしながら言う。他のソファでは副部長の高科と細川がまだぐっすりと眠っていた。

「あれ、丸山先輩は？」

キョトンとして尋ねると、佐竹が足を上げて勢いよく下ろす。途端に、グエツ、と蛙が潰されたような声がして、床の上で寝ていた丸山がモゾモゾと動いた。

「だ、大丈夫ですか、丸山先輩……」

拓夢は驚いて、恐る恐る佐竹の足下を覗き込む。

「だいじょーぶだ」

佐竹は丸山の代わりに答えると、立ち上がって大きな欠伸をした。

「あの、須崎先輩は？」

確か昨夜は須崎も一緒に遅くまで飲んでた筈である。尋ねると、佐竹が不機嫌そうな顔をしてダイニングキッチンのある方向へと顎をしゃくる。

「奴ならキッチンでサエのお守りだ。放っとけて言ったんだけど、どうしても心配らしくてな」

佐竹はそう言うと、だいたいスクランブルエッグくらい小学生でも作れるぜ、過保護なんだよ須崎はよー、とブツブツぼやく。

「サエ先輩と……」

拓夢はドキッとして呟くと、急いでキッチンに向かった。

「あ、拓夢ちゃん。おはよ～！」

パタパタとスリッパの音をさせて走って行くと、フライパン片手に卵と格闘していたらしいサエが振り返ってにっこり笑う。

「よお」

その横でボールに卵を割り入れていた須崎が、同じように拓夢を見て目元を和らげた。

「よく眠れたか？」

須崎に問われて、拓夢は、はい、と答えて頷く。

「手伝います」

急いで袖をまくって流しで手を洗おうとすると、須崎が作業台の上からレタスを取って拓夢の前に差し出した。

「ついでにこれバラして洗ってくれ。ザルはそこにあるから」

拓夢は洗い桶に水を汲むと、頭の中で人数を数えながらレタスをはがす。残りは冷蔵庫にしまってそれらを洗うと、食べ易いように千切ってザルで水を切った。

「お皿ですね」

拓夢は食器棚から人数分の皿を出すと、そこにレタスを盛り付ける。確かミニトマトも買ったのを思い出して、それも洗って盛り付けていると、ようやく一つ目のスクランブルエッグを焼き上げたサエがフライパンを持って振り返った。

「わあ。拓夢ちゃんって段取りがいいねえ！」

サエは嬉しそうに笑って言うと、拓夢が盛り付けたサラダの脇に焼いた卵をフライパンから直接ポツと落とす。その雑なやり方に、須崎が『思わず』といった風に笑った。

「サエさんって意外と大胆ですね」

苦笑交じりの須崎の言葉に、サエが、食べられればいいんだよ、と言って唇を尖らせる。そして、再びガスコンロに向き直ると、次の卵を焼くべくフライパンを火にかけた。

「一番綺麗に出来たやつを護に出そ。あいつ、うるさいから」

ペロッと舌を出しながら笑い掛けられ、拓夢は思わずつられて笑い返す。そして、ふと思いたって冷蔵庫を開けると、中から食パンの袋を取り出した。

「僕、パンを焼きますね」

トースターは二台あるが、七人分のパンを焼くとなるとそれなりに時間が掛かる。拓夢は食パンの袋を開けると、それぞれのトースターに二枚ずつ並べてスイッチを入れた。

「ほら、モト君！ 卵、卵！」

拓夢の後ろでサエが大声で須崎を呼ぶ。

「はいはい。そんなに急かさないうでくださいよ」

それへ須崎が苦笑交じりに返す。その楽しそうな会話を背中で聞きながら、拓夢はジッとトースターを見詰める。

『この一週間で僕は絶対に彼を振り向かせてみせる』

昨夜のサエの言葉が耳の奥に蘇る。拓夢は少しずつ焦げ色の付いていく食パンを見詰めながら、二人に気付かれないよう、こっそりと溜息をこぼした。

天気が良いのでせっかくだから朝食はバルコニーで摂ろうということになり、全員で料理をトレイに載せて二階に運んだ。

「うわ、いい眺めですねー」

窓から外に出ると、まだ二階からの景色を眺めていなかったらしい細川が感心したように言う。

「でしょ？ 都会に住んでるお嬢様の避暑地にはぴったりのロケーションだと思わない？」

サエがみんなのグラスに牛乳を注ぎながら言い、その言葉に佐竹が、ケツ、と言って口を歪めた。

「てめえが、まんま『おじよーさま』だろーがよ」

「酷い！」

佐竹の揶揄するような言葉にサエはムッと口を尖らせると、僕は男だよ、と力強く言い返す。

「いや～、サエさんは立派に、イイとこのお嬢さんですよ～」

その言葉に丸山がすかさず茶々を入れ、サエのことをよく知っているメンバーは一斉にドッとウケた。

「サエは本当にな～んにも出来ねえもんなあ」

佐竹が苦笑交じりに言い、ほどよく焼けたパンをバリッと齧る。

「これでも少しは出来るようになったんだからね！」

佐竹の言葉にサエは怒ったように言い返すと、ねえッ、と言って須崎を見た。

「そうですね。卵も最後の方はきれいに焼けるようになりましたし」

須崎がそう言って、佐竹の皿の上を指差す。

「ふむ……」

佐竹は自分の皿に載っているスクランブルエッグを見下ろすと、フォークで掬って口の中に入れた。

「まあ、合格だな。でも、他の皿は失格だ」

「酷い！」

サエが今度こそ怒ってパイとそばを向く。

「まあまあ。こんなもの食えりゃいいんですから」

須崎の笑いながらのフォローに、自分も何か言わなければと視線を向けた拓夢は、しかし『え?』と目を見開いて隣に座るサエを見詰めた。さぞへそを曲げているかと思いきや、口を尖らせてパイとそっぽを向いたサエは、頬を染めて嬉しそうに目元を緩めている。その予想外の表情に、拓夢はドキッとして口を引き結んだ。

(そうか……)

『これでも少しは出来るようになったんだからね!』

『そうですね。卵も最後の方はきれいに焼けるようになりましたし』

先ほどのサエと須崎の会話を思い出す。

(そうだよな……)

サラダの手際良さをサエに褒められただけでも自分だって嬉しかったのだ。好きな人に褒められれば、後は他の誰に何を言われようとも気にならないに違いない。

(基央先輩……)

結局あの後、須崎は卵を焼くサエに付ききりで、拓夢はとうとうその中に入っていくことが出来なかった。ワイワイと楽しそうに料理している二人の後ろ姿を思い出し、拓夢は小さく溜息をつく。すると、すっかり食欲の無くなった拓夢に気付いて、須崎がどうしたのかと視線を向けた。

「どうした。食欲が無いのか？」

「あれ! 拓夢ちゃん、体調悪いのッ？」

途端に、佐竹が声を上げて心配そうに拓夢を見る。

「いえ、大丈夫です！」

拓夢は慌てて顔の前で手を振ると、佐竹に笑顔を作って見せた。

「今日は浜辺で撮影だから、気分悪くなったらすぐに言ってな？」

佐竹がなおも心配そうに拓夢の顔を覗き込んで言う。

「いえ、本当に大丈夫です！」

実際、体の具合が悪いわけではない。拓夢は慌てて首を横に振ると、必死に笑いながら食事に専念するフリをした。

「今回の映画は、主人公と深窓の令嬢のラブストーリーだ」

食事が終わると、佐竹はみんなに脚本の説明を始めた。

「海辺の小さな村で生まれ育った主人公は、両親の営む民宿を手伝っている。この勤労青年が須崎な」

佐竹の言葉に、須崎が無言で頷く。

「で、街へ買い出しに出た主人公は、帰りに立ち寄った浜辺で美しい少女と出会う。これが拓夢ちゃんね」

「はい」

拓夢もコクンと頷くと、手元の台本に視線を向けた。昔は大富豪だった少女の家は大不況で破産寸前まで追い込まれ、多額の寄付金と引き換えに娘を成金男に売り渡すことにしたのだ。

「そこで少女は、子供の頃から毎夏遊びに行っていた別荘も売却されることを知り、一週間だけそこで過ごさせて欲しいと父親に頼む。そして、そこでハンサムな青年と出会い、恋に落ちるというわけだ」

二人は互いに浜辺に通い、言葉を交わすようになる。しかし、少女はもうすぐ嫁ぐ身ゆえ青年に想いを告げることが出来ない。また、青年の方も身分違いの恋に想いを告げられずにいた。そうこうしているうちに少女が家に戻らなければならない日が近づく。家に戻れば自分は成金男のもとに嫁がなければならない。少女は想いだけでも伝えたいと思い、勇気を出して青年に告げる。

『明日のこの時間に、もう一度だけここで会って頂けませんか?』

しかし、その夜から海辺の村は嵐になり、二人は会うことが出来なかった。

「ところがその夜、別荘のバルコニーに青年がびしょ濡れになって現れる」

「雨はどうするんですか？ ホースで撒きますか？」

細川が尋ね、佐竹がニヤリと笑う。

「それがさあ、実は台風が近付いてて、明後日あたりから雨になりそうなんだよね～」

「え、台風ッ？」

拓夢は驚いて声を上げる。

「そうなんだよ～」

佐竹は拓夢に視線を向けると、嬉しそうに笑った。

「水撒くの大変だなーと思ってたんで、ラッキーって感じ？ ベッドシーンの時はジャンジャン降ってくれ
ると嬉しいんだけどな～」

「ベッドシーンッ？」

まさか『濡れ場』まであるとは思っていなかった拓夢は、驚愕して思わず目を丸くする。

「あれ、台本読んだろ？」

佐竹は澄ました顔でヒョイと眉を上げてそう言うと、台本をペラペラと捲った。

「ホラ、ここ、ここ。シーン 44。『青年と少女は固く抱き合った』」

佐竹が台本の一部を指差しながら、その文章を読み上げる。佐竹の言う『シーン 44』には、その一行し
か書かれていない。

「こ、これが……？」

拓夢は暫し呆然として、その一文を見詰める。

「この作品が成功するか否かは、全てこのシーンに掛かっていると言っても過言ではない！ 頼むぞ、拓夢
ちゃん！」

言いながら佐竹にガシッと肩を掴まれた拓夢は、狼狽えながらも小さく、はい、と答えた。

「んじゃ、台風の雨雲が来る前に、今日から浜辺のシーンだけを集中して撮っちまうから。ちょっとハード
になるけど、みんな頑張ってくれよな！」

佐竹は台本を閉じながらそう言うと、出来れば浜辺のシーンは真っ青な海が撮りたいからなあ、と言
いながら立ち上がる。

「そんじゃ、拓夢ちゃんはお色直しといきますかね～」

丸山の言葉に拓夢は慌てて、はいッ、と答えると、自分も椅子から立ち上がった。とにかく、台風がや
って来る前に浜辺のシーンだけでも全て撮ってしまわなければならないのだ。モタモタしている暇は無い。
拓夢はベッドシーンの不安を頭の中から追い出すと、着替える為に自室へと急いだ。

「大丈夫か？」

炎天下での砂浜の撮影は思いのほかキツかった。パラソルの影に置かれた椅子に座って水を飲んでいる
と、一人のシーンを撮り終えた須崎がやって来て問う。

「あ、はい。基央先輩は大丈夫ですか？」

クーラーボックスからミネラルウォーターのペットボトルを取り出して差し出すと、須崎は隣の椅子に
腰を下ろしながらそれを受け取った。

「大丈夫だけど、汗でベトベトだ」

須崎が苦笑交じりに言って、喉を仰げ反らせて水を飲む。拓夢はその様子を眺めながら、思わずうっ
りと目元を緩めた。

「なんだ？」

拓夢の視線に気付いて須崎が問う。

「いえ」

拓夢は慌てて首を横に振ると、少しだけ頬を赤くして微笑んだ。

「綺麗だったから、つい……」

見惚れてしまったのだと正直に言ってしまってから、拓夢は更にカアッと赤くなる。

「うわ、すみません」

思わず両手で熱くなった頬を隠して謝ると、須崎が目元を緩めて微笑んだ。

「そうやってると、本当に女の子みたいだな」

今の拓夢は先日と同じ長いウィッグを付け、ノースリーブの白いワンピースと踵の低いサンダルを履いている。

「……キスしてもいいか？」

そっと囁くように問われた拓夢は、慌てて、ダメですッ、と答えて首を横に振ると、耳まで真っ赤になりながらチラと海岸の方を見た。他のメンバーは海岸縁で次のシーンの打ち合わせをしているが、こちらを向けばすぐに見られてしまう。すると、須崎が苦笑しながら手を伸ばして、拓夢の手を掴んで引き寄せた。

「拓夢」

指先にチュッと音を立てて口付けられ、軽く甘噛みされて、拓夢は思わずゾクリと震える。

「あ……」

思わず小さく声を出して須崎の口元を見詰めると、同じように拓夢のことをジッと見詰めていた須崎が小さく呟いた。

「ベッドシーン……」

「えっ？」

拓夢は須崎の言葉に驚いて視線を上げる。すると、須崎の瞳が微かに躊躇うように揺れた。

「いいのか……？」

須崎が尋ねているのは、『撮られてもいいのか』ではなく『見てもいいのか』という意味だろう。キスは何度も重ねたが、まだ全ては晒していない。拓夢は思わず赤くなると、コクリと頷いた。

「たぶん、下も脱ぐぞ？」

須崎の言葉に、拓夢は更に赤くなる。

「大丈夫です……」

でも、出来れば最初は普通に須崎だけに見られたかった。拓夢はその思いをグッと堪えて、エヘへとおどけて笑う。

「僕、基央先輩と違って貧弱ですけど、笑わないでくださいね？」

須崎の無駄の無い引き締まった肉体と違い、本当に自分は子供のような体型をしているのだ。今度は羞恥心で赤くなると、それを見た須崎が先程とは違う甘い笑みを浮かべた。

「こっちこそ、勃ちましたらごめんな？」

「えッ？」

須崎の突然の言葉に、拓夢は驚いて目を丸くする。自分の耳が信じられずに戸惑うように見上げると、須崎がニッと口角を横に引いて人の悪い笑みを浮かべた。

「揶揄いましたねッ？」

その悪戯っ子のような顔に、拓夢は思わずムウと唇を尖らせて須崎を睨む。須崎はハハハと楽しそうに笑うと、スイと拓夢に顔を寄せて囁いた。

「今夜……部屋に行ってもいいか？」

「えっ？」

また揶揄われるのかと思った拓夢は、しかし、須崎の真剣な瞳の色に思わず戸惑う。

「基央先輩……？」

どうしたのかと思って見上げると、須崎は躊躇うように一瞬瞳を揺らしてから意を決したように再び口を開いた。

「みんなに見せる前に見せて欲しい……」

拓夢はその言葉に、ハッと息を吞んで目を見開く。

「俺だけに……」

「基央先輩……」

途端に心臓がドキドキと騒ぎ始める。拓夢は真っ赤な顔を俯けて須崎の視線から逃れると、コクンと小さく頷いた。

途中で何度か休憩を挟みながら、本日分の撮影を撮り終える。夕方になってようやく撤収したメンバーは、機材を提げて別荘に戻った。

「あれ？」

玄関の扉を開けた途端に、カレーのいい匂いが胃袋を刺激する。荷物を置いてダイニングに行くと、既にテーブルの上にはサラダや水の入ったコップが置かれていた。

「でも、誰が？」

不思議に思ってキッチンの方を窺うと、中からサエがひょっこりと顔を出して笑う。

「みんな、おかえりなさい。お腹空いたでしょ？ ご飯出来てるよ～」

「サエさん、一人で作っててくださったんですか？」

拓夢は驚いて尋ねる。

「うん。撮影中も時々戻って仕込みとかしてたんだよ」

そういえばサエの姿が時折見えなかったことを思い出し、拓夢は慌てて頭を下げた。

「どうもすみませんでした。お手伝いもしないで」

恐縮して謝ると、そこへ横合いから佐竹が口を挟む。

「いいんだって、拓夢ちゃん。高科家のお抱えシェフを断らせたのは俺なんだから」

「マジですか？」

途端に丸山が悲壮な顔をして声を上げる。

「あの人の料理はすごく旨いのに！ なんで断っちゃったんですか、部長おお！」

心底がっかりしたような声音に、途端に佐竹がムツとしたように口を曲げる。そして、持っていた台本を丸めると、丸山の頭をスパンと叩いた。

「いいんだよ！ 黙ってサエの料理を食え！」

「じゃあ、僕手伝います！」

拓夢は急いでキッチンに行き、袖を捲くって手を洗う。

「じゃあ、拓夢ちゃんにはご飯をよそって貰おうかな。僕がカレーをかけるから」

サエはそう言いながら人数分の皿を炊飯器の横に置くと、ふと手を止めて呟いた。

「……だよなあ。シェフの料理の方が美味しいのに、何で僕は断ったんだろ」

拓夢はサエの言葉に驚いて顔を上げると、慌てて首を横に振る。

「僕はサエ先輩の料理、好きです。サエ先輩の卵料理はあったかい味がしました」

拓夢の必死の言葉に、サエが驚いたように視線を向ける。そして、長い睫毛を揺らして拓夢を見詰める。と、すぐに困ったように微笑んだ。

「……参ったね。こっちは手料理で点数稼ごうと思ってるのに、戦意喪失しちゃうよ」

「え……」

拓夢はその言葉に驚いて目を丸くする。サエはその顔を見て途端にプッと嘔き出すと、アハハと笑いながら目尻を拭いた。

「とか言って、ルーは市販のものなんだけどね」

サエはそう言うと、笑わないでね、と言っておどけたように笑う。

「僕の母もそうでしたよ？」

拓夢はにっこり笑って答えると、子供のうちは甘口しか作って貰えなかったことや、母親が時々びっくりするようなものを入れてみんなを驚かせたことなどを笑いながら話した。

「あったかい家庭で育ったんだね。拓夢ちゃんが素直に育った理由がわかったよ」

拓夢の話聞き終えたサエが、どこか羨ましそうに言う。そこへ、盛り上がってる所悪いんだけどさあ、と言って、待ち切れなくなったらしい佐竹がひょっこりと顔を出した。

「早くメシにしてくんない？ 俺、腹ペコなんだけど」

「はいはい」

すっかり機嫌を直したサエが、佐竹の言葉にニコニコ笑いながら鍋の蓋を開ける。その屈託の無い笑顔に拓夢はホッと息をつく、と、大急ぎで人数分の皿に白飯を盛った。

夕食を食べながらの反省会は、そのまま酒宴になった。すっかり酔っぱらって声高に話している先輩たちの話題が最近の映画談義からネットゲームに変わったのを機に、拓夢はメンバーから外れて自室に戻る。慣れない料理で疲れたのか、サエもとうに自室に引き揚げていた。この別荘にはジャグジー付きの大きな風呂があるが、各部屋にもシャワールームが付いているので、さっそく汗や潮風で汚れた髪や体を洗い流す。パジャマ代わりにTシャツを着てベッドの縁に腰掛けると、ようやくホッと一息つけた。

サエが、ルーの箱に書いてあるレシピを見ながら作った、と言っていたカレーはなかなかの好評で、大きな鍋はあつという間に空になった。明日の朝の分も作ったのにッ、とサエは呆れていたが、それでもみんなに喜んでもらえたのは嬉しかったようで、明日も頑張ると言って張り切っていた。

(サエ先輩、一生懸命なんだ……)

拓夢は『手料理で点数を稼ごうと思っていた』と言っていたサエの言葉を思い出す。好きな相手の心を取り戻そうと、苦手な料理に一生懸命奮闘しているサエの姿は拓夢から見てもいじらしく、こっちこそ戦意を喪失してしまいしそうになる。しかし、須崎を想う気持ちは拓夢だって同じだった。

(負けたくない……)

拓夢はグッと唇を引き結ぶと、まだ濡れている髪をタオルで拭く。

(僕だって基央先輩が好きなんだ……)

しかし、どうしたら須崎の心を繋ぎ止めておけるのかがわからない。

『今夜、部屋に行ってもいいか？』

昼間の須崎の言葉が蘇る。

『みんなに見せる前に見せて欲しい』

もちろん拓夢もそう思っていたから何も考えずに頷いてしまったが、あれはきっとそういう意味なのだろう。拓夢は髪を拭く手を止めると、戸惑いに瞳を揺らした。

(でも、今の僕にはこれしか無い……)

求められるままに体を差し出すことしか今の自分には出来ないのだと考え、拓夢は自己嫌悪に唇を噛む。綺麗で一途で、好きな男の為に一生懸命なサエは拓夢から見ても魅力的で、とてもじゃないが自分にはそれ以外に太刀打ち出来る術が無い。しかし、それは拓夢にとっては未知の恐怖だった。

(痛い……のかな)

男同士がどこで愛し合うかは奥手な拓夢でも知っている。痛いのだろうということもわかるが、それはあくまでも想像だった。シャワーを使った時に、念の為に洗っておこうと思ったのだが、伸ばした指先は怖くて先端しか入れることが出来なかった。

(怖い……)

拓夢は思わず目を閉じて膝の上でタオルを握り締める。

(でも……僕にはこれしか無いんだ)

求められるままに抱かれることしか、今の自分には須崎を繋ぎ止める方法が無い。

(基央先輩……)

もちろん須崎のことは好きだし、いつかは心も体もひとつになりたいと思っていた。しかし、頭の中で思い描いていた甘いシチュエーションは、決してこんなサエと張り合うような形ではなかった。拓夢はやるせない気持ちになり、思わず眉を寄せて唇を噛む。

(でも……)

須崎がそれを望むなら、自分もそれを受け入れたいとも思う。たとえ心や体が痛んでも、それが二人の幸せに繋がるのならと思って……。

微かにベッドがキシんだ音で目が覚める。ハッと驚いて目を開けると、誰かがベッドの端に腰掛けてジッと自分を見下ろしていた。

「あ……基生先輩？」

薄暗くてよく見えないが、背格好ですぐに須崎だと気付いた拓夢は慌てて起き上がろうとする。

「すみません、いつの間にか眠っちゃって……」

きっと炎天下の撮影で疲れたのだろう。風呂に入って頭を拭きながら考え事をしていたところまでは憶えているが、その後の記憶が無かった。気が付けば、点けっぱなしだった箸の照明はいつの間にか消されており、カーテンの隙間からはまだ明け切らない朝の光がぼんやりと白くこぼれている。

「ごめん……こっちこそ遅くなった」

須崎は手を伸ばして拓夢の頭を撫でると、起き上がろうとする体をそっとベッドの上に押し留めた。

「拓夢」

囁くように名を呼び、ゆっくりと拓夢の上に屈み込む。

「……ん……」

拓夢がそっと目を閉じて口付けを受けると、須崎は軽く啄ばむような口付けを繰り返しながらそっと拓夢の胸に手を当てた。

「あ……」

須崎の右手が、服の上から拓夢の胸をまあるく撫でる。途端に敏感な部分が刺激を受けてツンと起ち上がり、拓夢は慌てて身じろいだ。

「も、基央先輩……」

「わかってる。触らないよ」

須崎は安心させるように微笑むと、拓夢を見詰めたままTシャツの裾に手を掛ける。

「脱がせてもいいか？」

囁くように尋ねられて、拓夢はドキドキしながらコクンと小さく頷いた。

『みんなに見せる前に見せて欲しい』

須崎にそう乞われたのは昨日の夕刻のことである。自分もそれを望んでいたのもので頷いてしまったが、それが体の関係も指すのではないかと思いついたのはその後のことだ。もちろん二人は付き合っているのだから、いつかはそういう関係になりたいと思っていた。しかし、それはあくまでも『いつか』であって『今すぐ』ではない。そんな、恋に恋する乙女のような拓夢の心を決心へと向かわせたのは、サエのひと言だった。

『この一週間で僕は絶対に彼を振り向かせてみせる』

綺麗で明るくて誰にでも好かれるサエと出会い、拓夢は生まれて初めて『嫉妬』という感情を知った。怖い、と思った。須崎は確かに自分を好きだと言ってくれたが、サエに告白されたら途端に揺れ動いてしまうのではないか。そう思うと拓夢は不安で、何とかして須崎の気持ちを繋ぎ止めたいと思ったのだ。

「基央先輩……」

須崎の手がパジャマ代わりに着ていたTシャツの裾をそっと捲る。拓夢は緊張して目を閉じると、囁くように言った。

「全部見ても……引かないでくださいね？」

「引く？」

拓夢の言葉に、須崎が何のことかと問い返す。拓夢は、だって、と答えて口篋ると、数瞬躊躇ってから言った。

「僕、男ですよ？ 男の体なんて……イヤじゃない？」

思い切って尋ねると、須崎が、なんだ、と言って小さく笑う。そして、反対に尋ね返された。

「拓夢は？ 俺も男だけど、拓夢はイヤか？」

拓夢はその言葉にびっくりして目を開ける。慌てて首を横に振ると、須崎がホッとしたように目元を和らげて微笑んだ。

「良かった」

そしてそう言うと、再び拓夢のTシャツをもっと上までたくし上げる。そして、拓夢が両手を頭上に上げると、スルリとそれを脱がせた。

「寒くないか？」

クーラーは効いているが、寒いというほどではない。笑みを浮かべて首を横に振ると、須崎は安心したように、そうか、と答えて、拓夢のスエットパンツに手を掛けた。

(あ……)

ゴムの入ったウエスト部分を掴まれ、まだ誰にも見せたことの無い場所をこれから須崎に見られるのだという思いに拓夢は再びギュッと目を閉じる。観念して少しだけ腰を上げると下着ごと膝の上まで引き下ろされ、ヒヤリとした空気が下半身に触れた。

「あっ……」

拓夢は手で隠したい衝動を必死に堪える。須崎は拓夢の足からスエットを完全に取り去ると、目の前に横たわる全裸の拓夢を見詰めて小さく息をついた。

「綺麗だな……」

須崎の声に、拓夢はそっと目を開ける。

「基央先輩……」

そして、潤んだ瞳で見上げると、須崎に向かって両手を伸ばした。

「拓夢……？」

誘われるままにその手を掴んだ須崎が、拓夢の無言の誘いに気付いて微かに息を呑む。そして、真剣な眼差しで拓夢を見詰めると、その手をギュッと握り締めた。

「いいのか……？」

須崎が緊張した声音で静かに尋ねる。拓夢がコクンと頷き返すと、須崎はベッドの上で膝立ちになり、拓夢を見詰めながらゆっくりと着ているものを脱いで全裸になった。

「綺麗……」

須崎の均整の取れた肉体はまるで彫像のように完璧で、拓夢は思わず感嘆の息を洩らす。

「拓夢」

須崎はゆっくりと拓夢の上に体を重ねると、既に変化し始めている下腹部を拓夢のそれに押し付けた。

「あっ……」

拓夢は思わず声を上げると、息を詰めて目を閉じる。そして、躊躇いがちに須崎の背に手を回すと、顎を上げて抱き付いた。

「好きだ……好きだ、拓夢」

須崎が息を乱して拓夢の体を抱き締める。

「僕も好き……」

拓夢はそっと囁き返すと、思わず泣きそうになって顔を歪めた。

(僕はズルい……)

拓夢は須崎の体を抱き締め返しながら、胸の中で自分を責める。

(サエ先輩の気持ちを知ってるくせに……)

須崎を盗られまいとして、自分は須崎に抱かれようとしている。もちろん純粋に須崎に抱かれたいという気持ちもあるが、拓夢はどうしても罪悪感を拭い去ることが出来ない。

(僕はズルい……)

すると、ギュッと目を閉じている拓夢に須崎が言った。

「俺はズルいな……」

「え……？」

一瞬自分のことを言われたのかと思った拓夢は、そうではないことに気付いて目を開ける。

「俺はズルい……」

須崎は再びそう言うと、辛そうに眉をしかめて拓夢を見詰めた。

「俺は、拓夢を誰にも盗られたくなくて無理矢理抱こうとしている……」

「基央先輩……？」

拓夢は驚いて須崎を見詰める。

「拓夢がこういうの苦手なの知ってるくせに、俺は……」

「違います！」

拓夢は慌てて首を横に振ると、真剣な顔で言った。

「ズルいのは僕です！ 僕、基央先輩を誰にも盗られたくなくて……こ、こういう関係になれば、自分だけを見てくれるような気がして、僕は……！」

必死に言葉を連ねると、驚いたように目を見開いていた須崎がキュッと眉を寄せる。

「ごめん……不安にさせてたんだな」

そしてそう言うと、拓夢の潤んだ目元に口付けた。

「良かった、無理に抱かなくて……」

その心底ホッとしたような声音に、しかし拓夢は慌てる。そして、無理じゃないですッ、と声高に言うと、須崎の背中に回した手に力を籠めた。

「僕なら大丈夫ですから……！」

拓夢の必死の言葉に、しかし須崎が眉尻を下げて苦笑する。

「こういうのって、『大丈夫』とかですもんじゃないだろ？」

その言葉に、拓夢はハッとして目を見開く。須崎は拓夢の下腹部に手を伸ばすと、まだ柔らかいまのそれをそっと握った。

「拓夢が本当に俺を欲しいと思ってくれた時に、もう一度しよう。その時は俺も遠慮はしない」

「あっ……」

言いながらやんわりとシゴかれて、拓夢は思わず声を上げる。ギュッと目を閉じて体を強張らせると、それを見た須崎が小さく息をこぼして苦笑した。

「それに、本当に今日は見るだけのつもりで来たんだ。こんな時間に変な声を出したら、ここにいる全員に聞かれてしまうからな」

拓夢はその言葉にハッとして今の状況を思い出す。

「うわ……」

時計を見ると、既に誰かが起きていてもおかしくない時間だった。

「拓夢」

須崎が愛しそうに拓夢の名を呼び、ゆっくりと口付けてくる。

「好きだ」

拓夢は喜びに顔を綻ばせると、うん、と答えて頷き、瞳を揺らした。

「僕も好き……」

そしてそう言うと、少し躊躇ってから再び口を開く。

「大好き……基央」

囁くように名を呼ばれた須崎が、一瞬驚いたように目を見開く。拓夢は思わず赤くなって微笑むと、自分から目を閉じて口付けをねだった。

「はい、ヨーイ……スタート！」

浜辺での撮影は順調に進み、それから三日間が滞りなく過ぎた。長時間の撮影の後、サエの心尽くしの夕食を囲んで晩酌を始めたメンバーに佐竹が言う。

「台風の進路が変わったみたいだ。明日には天気が崩れるぞ」

「早いですね。浜辺でのシーンはだいたい撮り終えましたけど、ラストが残ってるんじゃないですか？」

イヤホンに耳を当ててラジオの天気予報に耳をそばだてている佐竹に細川が言う。

「そうなんだよ。明日の朝に撮ろうと思ってたんだけどさー」

ラストは明け方の浜辺でのシーンだ。佐竹はそう言うとガリガリと頭を掻いた。

「仕方ねえ。濡れ場シーンから撮っちゃうか」

「うわッ。『濡れ場』なんて言わないでよ、ヤらしいなあ」

佐竹の言葉に、途端にサエが顔をしかめる。

「なに言ってんだよ。濡れ場は濡れ場だろ」

佐竹は片眉をしかめてそう言うと、ソファに並んで座っている拓夢と須崎に視線を向けた。

「ってことで、暴風雨になったら二人のベッドシーン撮るから準備よろしくなー」

「準備？」

拓夢は何のことかとキョトンと目を丸くする。

「テイモーだよ、テイモー」

佐竹はそう言うと、ヒョイと丸山を振り返った。

「安全かみそり、持って来てるか？」

「ありますよ～」

佐竹の言葉に丸山が笑顔で答える。

「俺が剃る～？ それとも自分で剃る～？」

丸山が楽しそうに笑いながら拓夢に尋ね、つられたように佐竹と細川も笑った。

「テイモーって？」

拓夢は意味がわからずに須崎を見る。須崎は言い難そうに、あー、と言って言葉を切ると、少し考えてから口を開いた。

「剃毛は無駄毛を剃ることだ。つまり、画面に映っちゃいけない部分を剃刀できれいに剃るわけだな」

「拓夢ちゃんは俺が剃ってあげるよー」

意味を理解して赤くなった拓夢を見て、佐竹がウキウキと言う。

「結構です」

すかさず拓夢と須崎が同時に答え、隣に座っていたサエが佐竹の頬をグイと摘まんだ。

「イテテテ！」

「まあ、拓夢ちゃんは須崎の下になるからほとんど見えないし、何か映っちゃっても俺が全力で修正してあ

げるから」

安心していいよ、と細川に言われて拓夢はホッと胸を撫で下ろす。

「でも、須崎はどこからどこまで剃っというてね」

「了解」

細川の言葉に、須崎は諦めたように大きな溜息をつくと答えた。

「僕が剃ってあげましょうか？」

刃物は怖い及安全剃刀なら大丈夫だろうと思って言うと、そこにいる全員が一瞬シンとしてから大爆笑する。

「いいなー、須崎！ 俺も拓夢ちゃんに剃って欲しいなー！」

「あ、それなら俺も〜！」

「じゃあ、ついでに俺も」

佐竹の言葉に丸山と細川が乗っかる。

「え……え??？」

みんなが笑っている理由がわからずに、拓夢がキョトンと目を丸くすると、須崎が苦笑しながら顔を寄せて耳元で囁いた。

「剃毛ってのは、主に股間の毛を剃ることだ」

「……ツツ！」

須崎の言葉に拓夢は真っ赤になって硬直する。すると、可笑しそうに目元を拭っていたサエが言った。

「拓夢ちゃんは僕が剃ってあげるよ。慣れない人が自分でするのは危ないからね」

「えッ……！」

途端に拓夢は慌てて狼狽える。

「いや、それなら俺が」

「いやいや、俺が」

「いやいやいや、俺が」

佐竹に続いて悪乗りした丸山と細川が名乗りを上げ、それを見た須崎が最後に手を上げた。

「じゃあ、俺が」

拓夢はそれこそ真っ赤になって狼狽える。

「じ、自分でします！」

思わずギュッと目を閉じてそう言うと、途端にそこにいる全員が残念そうにチッと舌打ちの真似をした。

「じゃあ、撮影は雨の降り方を見て決めるからー。とりあえず、いつでも始められるように準備だけはしておいてくれなー」

撮影用の部屋は使わずに取ってある。佐竹の言葉に全員がハイと答え、拓夢も緊張しながら頷いた。

台風は順調に本土に接近し、二日後には見事な暴風雨となった。

「台風の雨雲だからね。今日は一日こんな感じだよ」

居間に下りて行くと既に起きていたサエが、一時間前は全く降っていなかったのだと言って笑う。テーブルの上には既に朝食の準備が出来ていて、拓夢は慌ててサエに頭を下げた。

「すみません。なんかすっかりサエさんに任せっきりで……」

「ああ、いいのいいの。みんな撮影で疲れてるんだから」

サエはそう言うと、それに楽しくなってきたしね、と言って笑う。

「料理がこんなに面白いなんて知らなかったよ。レパートリーも増えたしね」

サエは応用は苦手だが、レシピ通りに作るのは得意だ。本当に嬉しそうに笑うサエを見て、拓夢は少し

だけ顔を曇らせた。

「お、今日はオープンエッグか」

そこへ、ボリボリと腹を掻きながら佐竹がやって来る。その後から佐竹に叩き起こされたらしい残りのメンバーも現れて、ダイニングは途端に賑やかになった。

「昨日もリビングで寝たの？」

寝癖の残る佐竹のだらしない格好を見て、サエが呆れたように鼻に皺を寄せて言う。

「朝からカワイイ顔してんじゃねーよ」

佐竹はサエの鼻をギュッと摘まむと、拓夢に視線を移してコロリと笑い崩れた。

「おはよう、拓夢ちゃ〜ん」

「差別だ！」

途端にサエがプッと頬を膨らませて怒る。

「いいもん！ 僕にはモトくんがいるから！」

その言葉に拓夢の胸がズキンと痛んだ。

「あれ、モトくんは？」

須崎の姿だけ見えないことに気付いてサエが尋ねる。

「あ、なんかシャワー浴びてみたいで……」

下りる前に声を掛けようとしたら、須崎は既にベッドにいなかった。そう言うと、みんなが声を揃えて、あ〜〜、と言う。

「剃ってるな」

「剃ってますね」

「ツルツルですね」

佐竹の言葉に、細川と丸山が頷きながら言う。拓夢は、えッ、と声を上げると、思わず赤くなって俯いた。

「もう！ くだらないこと言っていないで食べるよ！」

子供のように面白がる三人プラス弟を叱り付けて、サエがキッチンに向かう。拓夢も慌ててその後にくくと、味噌汁をよそるのを手伝った。

「サエさんは俳優はしなかったんですか？」

脚本家を目指していたサエはずっとラブストーリーが撮りたくて女優を欲しがっていたのだと佐竹が言っていたのを思い出す。これほどの美人だ。女優も立派に出来たのではないかと思って尋ねると、サエはウ〜ンと言って笑った。

「僕ね、文章を書くのは得意なんだけど、演技するのは苦手だねえ」

特にカメラの前では緊張して動けなくなってしまうのだと言う。

「だから、護は絶対に撮ってくれなかったんだけど……」

サエはそう言って言葉を切ると、何かを思い出したように遠くを見た。

「ああ、そう言えば一度だけ撮ったことがあったなあ。体育祭の時にジャージに着替えようとしたら、護が急にビデオを向けてきたんだよね〜」

当時はまだホームビデオで、画面もブレているしBGMも無かったと言ってサエが笑う。

「あの映像、どこに行ったのかな〜」

その言葉に、不意に拓夢は何かを思い出し掛けてサエを見る。すると、そこへようやく須崎が下りて来てキッチンに顔を覗かせた。

「遅くなりました。何か手伝うことありますか？」

「あ、モトくん。おはよー！」

サエはご機嫌でニッコリ笑うと、味噌汁の乗った盆を目で示す。

「じゃあ、それ運んでくれる？ 拓夢ちゃんにはフルーツを運んでもらうから」

「わかりました」

須崎が味噌汁の乗った盆を持って消えると、それを見送ったサエが拓夢を振り返った。

「今日、モトくんとラブシーンだね。緊張してる？」

サエの言葉に、拓夢は苦笑しながら、はい、と答える。

「イヤなら断ってもいいんだよ？ 別にキスシーンだけ撮って、後は暗転にしてもいいんだからね？」

サエの心配そうな言葉に、しかし拓夢は首を横に振ってにっこりと笑った。

「大丈夫です。みんな頑張ってるんだし、僕も頑張らなきゃ！」

安心させようとして言ったのに、しかしサエはハッとしたように息を吞んで顔を曇らせる。

(あ……)

その傷付いたような顔を見て、途端に拓夢も顔を曇らせた。

(やっぱりイヤだよな……)

自分の好きな相手が、演技とはいえ自分以外の人間とラブシーンをするのだ。見ているだけしか出来ないサエはきっとイヤに違いない。もともと台本には『固く抱き合った』としか書かれていなかったのである。そこにベッドシーンを入れることを決めたのは佐竹だ。

(サエ先輩……)

拓夢は胸の内でサエに謝る。裸の撮影はもちろんイヤだったが、他の誰かと……例えばサエと須崎がラブシーンを演じるのはもっとイヤだった。

「化粧直すね～」

明るいうちは拓夢だけのシーンなので、須崎は部屋の隅で見学している。拓夢はちょっと緊張しながら、丸山に言われるままに目を閉じた。丸山は拓夢の頬にファンデーションを軽く叩くと、紅筆で唇をスイとなぞりながら笑う。

「緊張してる～？」

髪を直しながらにっこりと問われて、拓夢は、少し、と小さく答えた。今撮っているのは、自分の想いを青年に伝えようとした少女が嵐で逢えずに絶望するシーンだ。一人のシーンはそうでなくともみんなの視線が自分だけに向けられるので緊張するのに、今日はその中に須崎もいる。思わず顔を引き攣らせて笑うと、それを見た佐竹が近寄って来て拓夢の頭をポンポンと撫でた。

「うまく演技しようと思わなくていいからねー。拓夢ちゃんは一人の女の子として切ない恋をしてくれればいいんだから」

「切ない恋……」

拓夢は佐竹を見ながらぼんやりと返す。

「そう。得意でしょ？ 『切ない恋』」

佐竹が含みのある言い方をして、ニヤと片目をつぶって笑う。

「切ない恋……」

拓夢は口中でもう一度繰り返すと、部屋に置いてある鏡台の前に立った。そこには長い髪を白いレースのカチューシャで留めた少女がジッと自分を見詰めて立っている。

(切ない恋……)

今まで自分は、恋をすると全てがキラキラと輝いて見えるのだらうと思っていた。嬉しくて楽しくて、毎日がウキウキの連続なのだらうと……。しかし、須崎に恋をしてからの自分は切ないばかりで、何度落ち込んだり涙ぐんだりしたかわからない。両想いになった今でも、サエの出現だけでこんなにも動揺してい

るのだ。誰から見ても魅力的な須崎に恋をしている限り、自分の心に平穏は訪れないのではないだろうか
と拓夢は思った。

『我慢するだけの恋なんて、ツライだけだぞ？』

以前、佐竹に言われた言葉を思い出す。

(でも……)

拓夢はキュッと唇を引き結ぶと、鏡の中の少女を見詰めた。

(僕はそれでも基央先輩が好き……)

『君は？』と拓夢は目の前の少女に尋ねる。その途端、少女の澄んだ瞳からポロッと涙が零れて落ちた。透き通った涙は後から後から溢れ出し、目の縁から零れてポトポトと落ちる。やがて少女は拓夢をジッと見詰めると、好き、と声に出して呟いた。

「それでも好き……」

鏡の中で少女が涙をこぼしながら拓夢に告げる。その切ない言葉は、そのまま拓夢の答えだった。

大型の台風はいよいよ本島に迫り、日没頃には風雨は怖いほどになった。

「ほんとにこの中で撮影するんですか？」

副部長の高科が心配そうに言いながら、佐竹の頭からスッポリと大きなビニール袋を被せる。もちろんビニール袋はカメラを守る為で、佐竹を心配してではない。

「外に立つのは須崎だ。心配するな」

カメラはあくまでも室内なのだが、それでも掃き出しの窓を全開にすれば風雨は室内にまで吹き込む。

「短時間で撮るぞ！ 失敗するなよ！」

佐竹は全員を見渡すと、窓の前に立ってカメラを構えた。バルコニーには既に須崎と丸山が待機している。窓の外にはいくらか傘が出ているが、二人は既に頭から爪先までズブ濡れだ。時折強い風が吹きつけて、その度に丸山がヒーッと騒いでいるのが見える。

「よし！ 窓を開ける！」

場面は、須崎が豪雨の中、真っ暗なバルコニーに現れるシーンである。拓夢は入って来た須崎と抱き合い、口付けを交わすことになっている。持ち込んだネグリジェは一枚しかないので、濡れたら撮り直しは利かない。

「よーい……スタート！」

窓が開いて激しい突風が雨と共に室内に吹き込んで来る。途端に拓夢は全身びしょ濡れになり、ヨロけそうになって踏ん張った。

(須崎先輩……)

目の前でズブ濡れの須崎がゆっくりと部屋の中に入って来る。その姿を見た瞬間、拓夢の心臓がドキンと大きく音を立てた。

「あ……」

拓夢はゴウゴウと吹き付ける風雨の中、まるで引き寄せられるようにしてフラフラと須崎に向かって歩き出す。須崎は怖いほど真剣な眼差しで拓夢を見詰めると、突然ぶつかるような激しさと拓夢に駆け寄り、抱き締めた。

「好き……！」

拓夢は須崎に抱き締められながら、夢中で心の内を打ち明ける。

「あなたが好きです……！」

二度目の言葉は、しかし最後まで言えずに途中で須崎の唇に奪われた。両手で自分の頬を掴み、捻じ込むようにして激しく口付けて来る須崎に、拓夢は夢中になって応える。須崎は何度も角度を変えながら荒々

しく拓夢の唇をむさぼると、ようやく少しだけ離して間近で拓夢を見詰めた。

「俺も好きだッ……」

須崎が両手を激しくわななかせながら、熱い声音で熱っぽく囁く。雨の雫がビシヨ濡れの髪からポタポタと落ちて、拓夢の顔を冷たく濡らした。

「好きだッ……！」

ゴウゴウと荒れ狂う風雨の中、須崎の押し殺した声が響く。須崎は真剣な眼差しで拓夢の瞳を見詰める。再び抱き締めて荒々しく口付けた。

「ウヒョ〜〜〜！」

カットが掛かると同時に、丸山が情けない声音で叫びながら室内に飛び込んで来る。待機していた高科と細川が急いで窓を閉め、室内はようやく静かになった。

「ハアアア……」

拓夢は思わず長い溜息をつく。ペタリとその場にヘタリ込む。

「大丈夫か？」

須崎が心配して覗き込んだが、拓夢は顔いたきり顔を上げられなかった。撮影時の須崎は見たこともないほど情熱的で、激しいキスは拓夢には未体験のものだった。その衝撃に頭の中がクラクラして、なかなか立ち上がることが出来ない。胸は激しくドクドクと脈打ち、何より下半身の興奮が治まらなかった。

(イクかと思った……！)

キスだけで達っしてしまいそうになった拓夢は、ドクドクと体中を脈打たせながら床を見詰める。

「拓夢ちゃん、大丈夫かい？」

佐竹も心配して歩み寄って来たが、拓夢は俯いたまま、はい、と答えることしか出来なかった。

「すみません……もう少しこのまま……」

拓夢は消え入りそうな声でそう言うと、目を閉じてジッと興奮の波が引くのを待つ。

「大丈夫か、拓夢」

再び須崎に心配そうに尋ねられ、拓夢はようやく顔を上げると顔いた。

「大丈夫です……もう少しだけ待ってください」

とてもじゃないが、こんな状態で普通に立って歩くことなど出来はしない。すると、それを見た須崎が不意に手を伸ばして拓夢の体を抱き上げた。

「とりあえずソファの上で休め」

須崎の言葉に、拓夢は一瞬慌てたがコクンと頷く。ソファの上に横たえられる瞬間、気付かれないように素早く下半身の位置を直すと、それに気付いた須崎が微かに目を見開いた。

「あ……」

思わず声を漏らした須崎が慌てて、悪い、と小声で謝る。

「やり過ぎたか？」

声をひそめながら尋ねられて、拓夢は真っ赤になって俯いた。

「少し休めば大丈夫ですから……」

何より、次はベッドシーンなのに、このままでは服を脱ぐことも出来ない。いたたまれずにボソボソ言うと、須崎が溜息をこぼしながら拓夢の前髪を優しく撫で上げた。

「誰もいなけりゃ、今すぐここで押し倒すんだけどな」

奥手の拓夢がせっかくその気になったのだ。口惜しそうな須崎の言葉に、拓夢は真っ赤になって狼狽える。そして、いじわる、と言って唇を尖らせると、クルリと背を向けて顔を隠した。

「んじゃ、いつもと同じにやってくれればいからー」

照明板や三脚をセットし終わると、カメラを構えた佐竹を残して全員が部屋から出て行く。拓夢は佐竹の言葉に赤くなると、横たわったベッドの上から須崎を見上げた。拓夢の上で四つん這いになっていた須崎も、同じように拓夢を見て少しだけ赤くなる。

(『いつもと同じように』って言われても……)

佐竹は二人が付き合っているのを知っているので気軽に言っているのだろうが、二人は実はまだ一線を越えてはおらず、拓夢などは情熱な口付けだけでクラクラしてしまう有様である。思わずジッと見詰め合っていると、佐竹が、あ、と言ってから付け足した。

「中には挿れるなよー。ホンバン撮る気は無えからなー」

「冗談はやめてくれ」

須崎が眉をしかめて言い、拓夢はそれこそ真っ赤になって狼狽える。途端に緊張が高まり、心臓がドキドキと騒ぎ出した。

「カメラで撮るのはベッドの後方三箇所からだけだけど、両サイドから拓夢ちゃんの顔も撮るからねー。演技始めたら俺のことは忘れて、とにかく須崎のことだけ考えて『好き好き』って思いながら抱かれてくれるー？」

後は須崎がちゃんとするからー、と言って佐竹が須崎にプレッシャーをかける。

(『好き好き』……)

拓夢は佐竹の言葉を胸の内で繰り返すと、再びフワリと頬を染めて須崎の顔を見上げた。

「よ、よろしくお願ひします……」

覚悟を決めて頭を下げると、須崎が困ったように苦笑する。

「悪いが、俺もベッドシーンは初めてなんだ」

そして小声でそう言うと、屈み込んで拓夢の唇にそっと口付けた。

「演技とか無理だから、本気で抱くぞ……」

須崎の言葉に、再び拓夢の胸がドキンと震える。拓夢は真っ赤になって狼狽えたが、しかし既に覚悟は出来ていた。

「ぜ、全力でついていきます……」

拓夢の言葉に、須崎が嬉しそうに笑みを浮かべる。そして不意に真剣な眼差しになると、拓夢を見詰めて屈み込んだ。

「あッ……」

須崎の舌と唇が、拓夢の性感帯を一つ一つ確かめるように辿って行く。先行する指先で胸の尖りを愛撫されて、拓夢は思わずビクンと体を震わせると小さく声を上げた。

「大丈夫」

拓夢の足の間に体を割り込ませた須崎が、そっと囁きながらその尖りに口付ける。舌での愛撫は指で捏ねられるよりも緩やかで、拓夢は目を閉じると、うっとり顔を仰け反らせた。

「ああ……ん……」

須崎の愛撫に、下腹部がジンと痺れる。優しいゆったりとした愛撫は拓夢の官能をジワジワと高まらせ、体の強張りを少しずつ解していく。

「拓夢……」

須崎が愛しそうに拓夢の名を呼び、自分の失敗に苦笑する。今のは後で細川に修正してもらわねばならない。須崎は手を下方に伸ばして拓夢の下腹部に触れると、熱く変化してきているのを確認してから拓夢の膝の下に手を入れた。

「あッ……！」

うっとり目を閉じて息を喘がせていた拓夢は、突然両足を抱え上げられて声を上げる。下腹部に須崎の熱い強張りを押し付けられて、その熱にピクリと体を震わせた。

「そのまま……」

須崎が低い声音で囁いて、熱く昂ぶったものを拓夢のそれに擦り寄せる。

「アッ……！」

須崎の熱い強張りで敏感な部分を擦られた拓夢は、思わず仰け反って声を上げると、咄嗟に須崎の肩を掴んだ。

「拓夢……」

須崎が体を屈めて拓夢の唇に口付けながら、ゆっくりと体を前後に揺らす。

「ん……ん……ん……」

唇を塞がれたまま須崎の動きに合わせて息を詰めていた拓夢は、耐え切れずに唇を離すと、顔を仰け反らせて、あぁっ、と愉悦の声を漏らした。

「拓夢……！」

その艶のある声音に煽られたように、須崎が更に腰の動きを早める。須崎の熱い屹立を何度も自分の強張りに擦り付けられた拓夢はあっという間に追い上げられると、自慰とは比べものにならない快感に激しく喘いだ。

「ああッ、ああッ、ああッ」

ギシギシとベッドのスプリングが小さく音を立て、拓夢の嬌声と重なる。

（好き、好き、好き……！）

胸の中で叫んだ言葉が、そのまま口を突いて出た。

「好きッ……ああッ！」

途端に拓夢の先端がトロリと蕩ける。激しい快感の波に攫われながら夢中で目の前の体にしがみ付くと、須崎が耳元で息を喘がせながら囁いた。

「イッていいぞ、拓夢」

「んんッ！」

拓夢は須崎の言葉に、首を横に振りながらも体を強張らせる。絶頂へののぼり詰める瞬間の目の眩むような快感に、頭の中が真っ白に沸騰した。

「好きだ、拓夢ッ……」

須崎が荒い息をつきながら、更に拓夢を追い上げる。

「愛してるッ……！」

耳の中に熱く吹き込むように囁かれ、腰をグイグイと押し付けられて、拓夢はビクンと激しく震えると、体を大きく仰け反らせて全身を強張らせた。

「んああッ……！」

その時。

突然階下で大声がして、ダダダッとして誰かが階段を駆け上って来る。そして、まっすぐこちらに向かって走って来たかと思うと、突然撮影している部屋のドアがバタンと勢いよく開けられた。

「拓夢ちゃん！」

部屋に飛び込んで来たサエが、ベッドの上で重なっている二人を見て真っ青になって凍り付く。

「酷い！」

そして、そう叫んで突然ベッドに駆け上がると、須崎を両手で突き飛ばした。

「拓夢ちゃんッ……！」

サエは自分を見上げてびっくりして固まっている拓夢を見下ろすと、ハッと息を吞んで顔を強張らせる。拓夢の腹の上には二人分の白濁した体液が生々しく散っていた。

「酷い……！」

サエは再び叫ぶと、その上にガバッと自分の体を投げ出して拓夢の体を覆い隠す。

「こんな本格的なシーン撮るなんて言わなかったじゃないか！」

そして、そう言って佐竹を睨むと、ワアッと泣き出して拓夢の体を抱き締めた。

「ごめん！ ごめんね、拓夢ちゃん！ ごめん！」

「サ、サエ先輩……？」

拓夢はいったい何が起きたのだろうかと思いきや、半ば放心状態で声を掛ける。サエはそんな拓夢をギュウッと抱き締めると、再び激しく慟哭した。

「護がこんな酷いことをするヤツだとは思わなかった！ 見損なったよ！」

サエの泣きながらの叫びに、佐竹がボリボリと頭を搔く。

「いや、途中でストップかける方が酷だろうと思ったからさあ」

最後まで撮ってないから大丈夫だぞ、という佐竹の言葉も興奮したサエには届かない。

「拓夢ちゃんのこと好きなくせに！ お見合いしたりッ、他の男に抱かせたりッ、もう信じらんない！」

「何言ってんだ、お前」

どうやら何か勘違いしているらしいと気付いた佐竹が溜息混じりにベッドに歩み寄って肩を掴んだが、しかしサエは身を振ってその手を払い除ける。

「離してよ！ 護なんか大嫌いだ！」

そしてそう叫ぶと、再び拓夢を抱き締めてワアッと泣き出した。

「サエさん」

須崎は立ち上がって部屋の隅に放置してあった毛布を掴むと、それをバサリと二人の上に掛ける。途端に、モトくんも大嫌いだッ、とサエに泣きながらなじられ、須崎は溜息をつく、と、ベッドの縁に腰掛けてポンポンとサエの背を宥めるように叩いた。

「いろいろ誤解があるようだから言っときますけど、拓夢と付き合ってるのは『俺』ですからね？」

須崎の言葉に、サエの泣き声がピタリと止む。

「……え？」

サエは止まらない嗚咽に喉を震わせながらも顔を上げると、目の前にある拓夢の顔を見下ろした。

「本当です。僕が好きなのは須崎先輩です」

拓夢は急いでそう言うと、もしかして、と言って続ける。

「サエ先輩が好きな人って、部長だったんですか？」

躊躇いがちに尋ねると、途端にサエが真っ赤になって狼狽える。

「そ、そんなこと……！」

そう言ったきり真っ赤になって絶句してしまったサエを見て、固唾を呑んで見守っていた拓夢は途端に全身から緊張を解くと、ハアアッと安堵の溜息をつきながら両手で顔を覆った。

「良かったあああ……」

拓夢の心底ホッとした声音に、須崎が怒ったように佐竹を睨む。

「あんたが悪い！ あんたがはつきりしないからこういうことになるんだ！ サエさんに妬き餅焼かせようと思ったのかどうなのかは知らないが、結婚する気もないのに見合いなんかして大人気無いんだよ！」

須崎の言葉に、途端に佐竹が変な顔をする。

「あれはちょっとしたジョークだろーがよ。『見合い』つつっても相手は人間じゃなくて企業だぞ？」

そしてそう言うと、親が『地元で就職しろ』と言って煩いのだと言ってガリガリと頭を搔く。

「とりあえず面接だけ受けて断って来た。どうせ就職するなら、こっちで撮影関係の仕事を探そうと思ってたしな」

「ほんと……？」

佐竹の言葉に、サエが半ば放心状態で訊き返す。

「嘘言ってどーするよ」

佐竹はバツの悪そうな顔をして返すと、サエの頭を乱暴に撫でてから部屋を出て行った。佐竹とサエのやり取りを見ていた拓夢は、どうやら全ての誤解が解けたらしいと気付いてホッとする。視線を向けると、須崎が溜息混じりに苦笑しながらソファの上に放置してあった服を拾い上げた。

「拓夢、シャワー浴びるぞ」

「わッ、待って！」

須崎に呼ばれて、拓夢は慌てて起き上がろうとする。しかし、サエの胸元を見てハッと目を見開くと、うわッ、と声を上げて真っ赤になった。

「ごめんなさい、サエ先輩。あの……」

さっきまで拓夢に覆い被さっていたサエの胸元は、見事に自分たちのもので汚れてしまっている。半ば放心状態だったサエは拓夢の視線に気付いて自分の服を見下ろすと、思わず苦笑してから拓夢を助け起こした。そして、両腕でギュウッと拓夢の体を抱き締める。

「拓夢ちゃん、ごめんね。君を傷付けてしまっていたら本当にごめんなさい」

サエの心底からの言葉に、拓夢はフワリと微笑む。やはりサエは純粋な人で、そしてとても優しかった。

「大丈夫です」

拓夢はにっこり笑ってそう言うと、自分もサエの体を抱き締め返す。サエの体はびっくりするほど華奢で、そして、やはりイイ匂いがした。

「そうだ。サエ先輩、イイこと教えてあげますね」

拓夢はふとあることを思い出してそう言うと、にっこり笑ってサエを見詰める。

「たぶん、なんですけどね」

そして、そう前置きすると、サエの耳元に唇を寄せた。何事かと拓夢の言葉に耳を傾けていたサエが、びっくりしたように目を見開いて息を呑む。それから蕩けるような笑みを浮かべると、ありがとう、と言って拓夢を再び抱き締めた。

「僕も頑張ってみるよ」

全裸のままシャワールームに駆け込んだ拓夢は、先に体を洗っていた須崎に腕を掴まれて引き寄せられる。

「なに内緒話してたんだ？」

抱き締められ、耳元で囁かれて、拓夢はくすぐったさに身を振ると須崎を見上げた。

「教えない」

途端に須崎がムッと口を曲げて拗ねたような顔をする。拓夢はプッと吹き出すと、笑いながら須崎の体を抱き締め返した。

「良かった……サエ先輩が基央先輩のこと好きなんじゃなくて」

思わず溜息混じりに言うと、途端に須崎が顔をしかめる。

「俺はサエさんのことなんか何とも思っていないって言っただろ？ 信じてなかったのか？」

ちょっと傷付いたように言われて、拓夢は苦笑交じりに首を横に振る。

「違います。基央先輩のことを信じてなかったんじゃないんで……」

拓夢はそう言うと、少し躊躇ってから続けた。

「自分に自信が無かったです。基央先輩に好きでいてもらえる自信が……」

そしてそう言うと、今も無いんですけどね、と言ってエヘへと笑う。その顔を見て須崎は『思わず』といった風に苦笑すると、大きな溜息をついた。

「自信なんか俺にだって無いさ」

須崎の予想外の言葉に、拓夢は驚いてその顔を見上げる。

「拓夢を部長に盗られるんじゃないかと思って、毎日ヒヤヒヤしてたんだから」

「ええッ？」

拓夢は須崎の言葉に驚いて目を丸くする。須崎は、それだけじゃないぞ、と言うと、拓夢を抱き締める腕に少しだけ力を籠めて首筋に口付けた。

「拓夢の同期とか、毎日一緒に講義受けてる奴とか、一緒にランチ食べてる奴とか心配したらキリが無くて、死にそうだった」

そしてそう言うと、片手を下ろして拓夢の下腹部に触れる。

「あッ……」

イッたばかりでまだ敏感なそこをいきなり掴まれた拓夢は慌てて身を振ると、やッ、と声を上げて須崎の肩にしがみ付いた。

「あッ、あッ、あんッ」

熱い手の平で握られ、執拗に何度もシゴかれて、拓夢は甘い声を上げて喘ぐ。須崎は拓夢の口を自分の唇で塞ぐと、もう片方の手を拓夢の後ろに伸ばした。

「んんッ……！」

いきなり体内にもぐり込んで来た指先の感触に、拓夢はびっくりして体を強張らせる。須崎は前をシゴく手の動きを速めると、弓なりに体を仰け反らせて喘ぐ拓夢の中へと探るように指を挿し入れた。

「んんッ、んんッ、んんッ」

拓夢は須崎の指の感触と追い立てるような手の動きに翻弄されて、甘い声を上げながらガクガクと膝を

震わせる。やがて四肢を強張らせて息を詰めると、須崎の背にしがみつきながら大きく体を震わせた。

「んああッ……！」

ビクンビクンと体を震わせながら、拓夢は須崎の手の中に熱い欲望を解放する。

「好きだ……好きだ、拓夢」

須崎は弛緩した拓夢の体を抱きすくめると、首筋に愛おしそうに熱い唇を押し当てた。

「遅くなりました……」

顔を赤くしてリビングに行くと、既にテーブルの上には宴会の準備が整っていた。

「お、スッキリしたか？」

並べたコップにビールを注いでいた佐竹が、入って来た拓夢に気付いて声を掛ける。すかさず隣に立っていたサエに肘鉄を喰らい、ウウッと呻いて脇腹を押さえた。

「んだよ！ シャワー浴びて、って意味だろッ？」

サエはツンと澄まして佐竹の言葉を無視すると、すぐにニコニコ笑って拓夢をテーブルに呼ぶ。

「ここでの合宿も今夜で最後だからね。今日は打ち上げだよ」

そして、そう言って拓夢にコップを持たせると、さあ、乾杯、乾杯ッ、と言いながらジュースを注いだ。

「ありがとうございます」

拓夢は恐縮して頭を下げると、テーブルに並んでいる料理を見て思わず目を丸くする。

「凄い料理ですね。これを全部サエ先輩が作ったんですか？」

驚いて問うと、サエが恥ずかしそうに笑った。

「昼間からずっと作ってたんだよ。買って来た食材、全部使わなくちゃならなかったからね」

大変だったんだよー、と言ってサエが笑う。オードブルも料理も全て美味しそうで、拓夢は改めてサエを凄いと思った。『コレ』と思ったらとことん極める人なのだ、サエという人は。

「んじゃ、乾杯するぞー。みんなコップ持ってるかー？」

佐竹がみんなの顔を見回し、ビールの入ったコップを頭の上に揚げる。

「それじゃ、撮影の成功を祝して！」

「まだ明日があるけどね」

すかさずサエが突っ込み、みんながドッと笑う。

「乾杯！」

佐竹がコップを掲げて声を張り上げ、みんなも一斉に、かんぱーいッ、と声を揃えた。

「うひゃ〜！」

ガチャンガチャンとコップをぶつけ合い、割れる割れるッ、とみんなで大笑いする。拓夢も笑いながらみんなと順に乾杯すると、最後に隣に立っている須崎を見上げてコップを目の高さに掲げた。

「乾杯」

須崎がカチンとコップを合わせ、中のビールをグッとあおる。

「あまり呑み過ぎないでくださいね」

打ち上げと言っても、明日はまだ早朝の撮影が残っている。映画のラストは日の出のシーンなので、酔っ払って起きられなかったらそれこそアウトだ。そう言うと、須崎が拓夢の耳元に顔を寄せた。

「……？」

拓夢は須崎の方に体を傾けて、メンバーの喧騒で須崎の声を聞き漏らさないように耳をそばだてる。その途端、OK、という言葉と共にいきなり耳に口付けられて、拓夢はびっくりして目を丸くすると硬直した。

「拓夢ちゃん、どれ食べる？」

そんなことなど知らないサエが、山盛りにした皿を佐竹の目の前に置いて拓夢を振り返る。

「あ……う……」

拓夢は真っ赤になって狼狽えると、肩を震わせて笑っている須崎の太ももをテーブルの影で思い切りつねった。

大宴会は夜中まで続き、気付けば丸山たちはソファで寝落ちていた。

「あれ？」

トイレから戻った拓夢は、佐竹とサエの姿が無いことに気付いて辺りを見回す。

「部長とサエ先輩は？」

ソファに座って一人で飲んでいて須崎に尋ねると、須崎は階段の方に顎をヒョイと上げて、寝た、と短く答えた。

「え？」

拓夢は目を丸くして階段を見ると、寝室のある方向に視線を移す。

「一緒に？」

思わず尋ねると、須崎が、たぶんな、と答えて頷いた。

「そっか……」

拓夢は小さく呟くと、そっと笑みをこぼす。では、サエは勇気を出して佐竹に告白したのだ。いや、もしかすると佐竹の方からサエを誘ったのかもしれない。どちらにしても、長いこと思い合っていた二人がようやく一歩を踏み出したのである。

「知ってる？ 部長は一度だけサエ先輩を撮ったことがあるんですよ？」

そう言うと、須崎が、ああ、と答えて頷く。

「サエさんの『ナマ着替え』だろ？ 部長、DVDに焼き付けて毎日のように観てるだろ」

「知ってたんですか？」

拓夢は須崎の言葉に驚いて目を見開く。では、やはりそうだったのだ。拓夢が来るといつもすぐに止めてしまっていたあのDVD。佐竹はアダルトビデオだと言っていたが、あれがサエの唯一の映像なのだろう。

「ずっと好きだったんですね」

思わず微笑んで言うと、拓夢の言葉に須崎が、スケベなだけだろ、と言って不満そうに鼻を鳴らす。

「サエさんがいるくせに、拓夢にまで手を出しやがって」

結局それが不満なのかと拓夢は笑う。

「でも、あれはなかなか進展しない僕たちを心配してやってくれたことですから」

そうフォローすると、須崎は再びフンと鼻を鳴らして口の端を上げた。

「くやしいから、今夜はベロベロになるまで飲ませてやった」

「え？」

拓夢は驚いて目を丸くする。そういえば、まだラストが残っているとはいえ、無事に撮影を終えた佐竹は上機嫌で、みんなに勧められるままかなりの量の酒を飲んでいったような気がする。

「大丈夫かな……」

心配して言うと、須崎が、さあな、と答えて笑いながら立ち上がる。

「良くて『勃たない』、悪くて『最中に爆睡』か？」

「うわ……」

須崎の言葉に、拓夢は思わずサエに同情する。せっかく想いが通じ合ったというのにそれでは、あまりにもサエが気の毒である。

「大丈夫かな」

心配になって再び言うと、須崎が、残念、と言って親指で二階を指差した。

「大丈夫だったみたいだぞ」

耳を澄ますと、サエのものらしい、か細い喘ぎ声が階下にまでこぼれて来る。その艶っぽい声音に拓夢が思わず赤くなると、それを見た須崎が両腕を広げた。

「俺の部屋に来るか？」

甘い微笑と共に呼ばれて、拓夢はドキリと胸を高鳴らせる。もちろん、迷いは無かった。

「うん」

頬を染めて頷くと、拓夢は自分から歩み寄って須崎の腕の中にすっぽりと収まる。須崎は嬉しそうに微笑むと、拓夢の体を両腕でしっかりと抱き締めた。

「いいのか……？」

耳元で囁かれて、その言葉の意味を正確に理解した拓夢は更に赤くなる。その途端、シャワー室で須崎に指を挿し込まれた場所が甘く疼いた。

「あ……」

拓夢は須崎のシャツの背中を掴むと、思わず甘い息をこぼす。須崎と一つになりたい。一つになって、体の奥でもっと須崎を感じたい。そして何より、須崎に自分の中でイッて欲しかった。

「拓夢……？」

須崎が躊躇いがちに拓夢の名を呼ぶ。拓夢は恥ずかしさに耳まで赤くなると、須崎の胸に顔を埋めてもう一度小さく頷いた。

翌日は台風一過の晴天だった。夜明け前に起き出した一行は、海岸で最後の撮影に臨む。二人の会話のシーンを撮り終えた拓夢は、化粧直しの為に腰掛けた椅子の上で最後の場面をチェックする為に台本を開いた。

「はあ……」

思わず知らず溜息が漏れる。演技とは言え、須崎の口から別れの言葉を聞いた時には胸が潰れそうになった。主人公である自分が決めた別れなのに、寂しくて悲しくて泣いてしまいそうだった。実際に涙を浮かべていたのだろう。カットが掛かると、すぐに丸山が飛んで来て化粧を直してくれた。

「最後まで出来るかな……」

拓夢は小声で呟きながら、再び深い溜息をこぼす。すると、そこへ佐竹が丸めた台本でポンポンと肩を叩きながら寄って来た。

「まだ眠いかい、拓夢ちゃん」

「いえ、大丈夫です」

拓夢は佐竹を見上げてにっこりと笑う。昨夜遅くまで須崎と肌を合わせていた拓夢は、すっかり寝不足をして目を腫らしてしまった。それはサエも同様で、拓夢が起きてリビングに行くと、サエは泣き腫らしたような真っ赤な目をしてソファに座り、台本に何かを書き込んでいた。おはよう、と挨拶した声もすっかり囁れていて拓夢は思わずギョツとしたが、しかし、笑った顔はとても幸せそうに見えたので敢えて何も言わなかった。

「最後のシーンはエンドロールになるからね。カメラも引いてるし、音も拾わないから気楽にやってくれていいけど、日の出の瞬間は一度しか無いからよろしくねー」

佐竹はそう言うと、それと、と言って続ける。

「少し変更が入ったんで、それも須崎に指示しておいたからー」

「えッ？」

拓夢は佐竹の言葉に驚いて目を見開く。

「変更って、どこが変わったんですか？」

確かラストは、手を繋ぎ合った二人がゆっくりと離れて、波打ち際を左右に分かれて歩き去るシーンだった筈である。慌てて尋ねると、佐竹はにっこり笑って拓夢の頭をポンポンと叩いた。

「大丈夫。拓夢ちゃんは須崎の言う通りに動いてくれればいいからねー」

「え、でも！」

慌てて立ち上がると、そこへ高科から、そろそろスタンバってくださいッ、と声が掛かる。

「拓夢！」

サエと何か話していたらしい須崎が、波打ち際に向かいながら拓夢を呼ぶ。拓夢は慌てて、はいッ、と答えると、急いで須崎の後を追い掛けた。

「撮り直しはきかないからなー！ 頼むぞ須崎ー！」

佐竹が三脚の上に座ってカメラを構え、須崎に向かってメガホンで声を張り上げる。

「了解」

須崎は手を上げて答えると、拓夢に向かって右手を差し出した。

「いよいよ最後だな」

須崎の言葉に、拓夢は思わずグッと胸を詰まらせる。

(いよいよ最後……)

何か言ったら泣いてしまいそうで、拓夢は無言で唇を噛むと、その手を掴んだ。

(これで終わりなんだ……)

真夏の炎天下での撮影は想像以上に大変だったが、みんなと一緒に過ごした一週間は最高に楽しかった。拓夢は思わず切なくなると、瞳を揺らして須崎を見上げる。その途端、拓夢の胸に感傷とは違う別の切なさが生まれた。

『……別れたくない』

ふと湧き上がった一つの想いに、胸の奥がズキンと痛む。

(そうだよね……別れたくなんかないよね……)

拓夢は主人公の少女の気持ちを想い、唇を噛んだ。例え家の為とは言え、好きでもない男のところへ嫁ぐなど絶対にイヤだったに違いない。ましてや、少女は恋を知ってしまったのだ。

『別れたくない……』

拓夢は思わず顔を歪めて須崎を見詰める。その時、よーいッ、と叫んで佐竹がカメラを構えた。

「スタート！」

いよいよ最後の撮影が始まり、拓夢と須崎は向かい合って見詰め合う。そして、佐竹の声を合図に手を離すと、ゆっくりと背を向けて歩き出した。

最後のシーンにセリフは無い。ただ右と左に分かれて歩き去るだけである。やがて水平線の彼方に太陽が昇り、輝く海を背景にエンドロールが下から上へと流れることになっている。前方をまっすぐ見詰めて歩き出した拓夢の頬を、その時不意に何かが伝った。拓夢は慌てて唇を噛み、グッと目蓋に力を入れる。

(泣いちゃダメだ……っ)

カメラはかなり引いているので写り込む心配は無いが、泣けば涙で足下が見えなくなる。ここで無様に転んだりしたら、もう撮り直しはきかないのだ。

しかし、切ない涙は次から次へと溢れ出し、拓夢は堪えきれずに嗚咽をこぼす。途端にサンダルの踵が砂に取られ、転びそうになった拓夢は慌てて踏ん張った。その途端。

「拓夢ッ！」

突然須崎が叫んで拓夢を呼び止める。拓夢はハッと顔を上げると、反射的に振り返った。しまった、と

思ったのは一瞬で、背を向けて歩いている筈の須崎がこちらを向いて立っているのを見て驚く。

「基央……先輩？」

いったいどうしたのかと思って呟くと、須崎が拓夢を見詰めながら両手を広げた。

「来いッ！」

須崎の言葉に、拓夢は驚いて目を見開く。しかし、迷ったのは一瞬だった。拓夢は思わず駆け出すと、夢中で須崎目掛けて走る。そして、転がるようにして腕の中に飛び込むと、須崎の体に抱き付いた。

「基央先輩ッ……！」

拓夢は須崎の胸に顔を埋めて声を震わせる。

「拓夢……！」

須崎は腕の中の体を愛しそうに抱き締めると、少しだけ体を離して拓夢の顔を見詰めた。

「サエさんからストーリーの変更だ。キスするぞ、拓夢」

「えッ？」

拓夢は驚いて須崎を見詰める。須崎は目を細めて微笑むと、サエからの指示を伝えた。

「バックに日の出を入れたいからOKが出るまで唇を離すな、だそうだ。わかったか？」

その言葉に、徐々に状況を理解した拓夢は小さく頷く。

「よし」

須崎は拓夢を見詰めて甘く微笑むと、ゆっくりと屈み込んで唇を合わせた。

(あ……)

その瞬間、唇の先を触れ合わせただけのくすぐったいような優しいキスに、拓夢の胸がトクンと震える。

(これって……)

拓夢は胸中で呟くと、うっとり目を閉じたまま頬を染めた。

(これってまるで、誓いのキスみたいだ……)

新郎新婦が祭壇の前でそっと唇を合わせる光景を思い出し、拓夢は感動に胸を詰まらせる。その時、水平線から太陽が顔を出して、温かな陽光が拓夢の横顔を照らした。

(ああ……)

海面が朝日を反射してキラキラと輝き、まるで世界中が自分たちを祝福してくれているかのような幸福感に包まれて拓夢は胸がいっぱいになる。途端に温かな涙が頬を伝い、拓夢はうっとり目を閉じたまま、いつまでも須崎と唇を合わせていた。

夏休みが終わると、途端に大学内は学園祭の準備一色となった。

「凄い数の人ですね！」

学園祭当日、クラスの当番から戻って来た拓夢は、視聴覚室の外にまで溢れかえっている人の群れを見て思わず目を丸くする。

「第一回も第二回も立ち見が出たからな。今、丸山がドリンクを買い足しに行ってる」

入り口で入場券をさばっている高科の隣で、佐竹が上機嫌で言う。上映は無料だが、観客にはドリンクを一杯百円で買ってもらうことになっていた。かなり多めにペットボトルを用意したつもりだったが、まだまだ読みが甘かったようだ。

「今年はポスター作ってあちこちにバンバン貼ったからな。須崎のファンはもちろんだが、『このヒロインは誰だ！』って言って男たちの間でもかなりの評判になってたらしいぞ」

「えッ！」

佐竹の言葉に拓夢は驚いて声を上げる。

「DVDの売り上げも好調だぞ。今のところ全て完売だ」

DVDは売り切れを予想して、あらかじめ上映時間ごとに分けて売っている。買えなかった人の為に予約も受け付けていて、箱の中にはたくさんの受付票が入っていた。

「これならあつという間にカメラのローンも返せるなあ」

佐竹が嬉しそうに言い、ここで金の話はしないでくださいッ、と高科に追い払われる。

「どれ。中でも手伝うか」

拓夢は佐竹について視聴覚室に入る。視聴覚室には前と後ろにドアがあり、前方のドアがスタッフオンリーになっていた。

「うわ、拓夢ちゃん！ 助かった〜〜〜！」

入って行くと、紙コップにペットボトルからお茶を注いでいたサエが途端に大喜びで声を上げる。

「これ渡すの手伝ってくれる？ なんかもういっぱい……！」

ドリンクは会場の入り口で手渡すことになっているが、用意が間に合わずに長い列が出来ている。

「はい！」

拓夢は大急ぎで駆け寄ると、紙コップの並んだ盆を手にとって入り口へと急いだ。

「ドリンクを受け取ったらお好きな席にお座りください。出来れば席を空けないで、詰めて頂けると助かります！」

拓夢はズラリと並んだ観客に声を掛けながらドリンクを渡す。

「お、拓夢ちゃん。頑張ってるね！」

佐竹の友人と思しき顔触れに声を掛けられ、拓夢は、はいッ、と元気よく答えてにっこり笑った。そこへ突然、きゃあッ、と女性の黄色い歓声が上がり、途端に会場が騒がしくなる。どうしたのかと思って顔を向けると、同じように紙コップのたくさん載った盆を持った須崎がこちらへと歩いて来るのが見えた。途端に観客から、須崎くんッ、と声が上がり、キャアキャアと会場は凄い騒ぎになる。

「うわ……！」

拓夢はそこで初めて、本当に須崎が売れっ子俳優なのだということを認識する。須崎が入り口脇にある机の上に盆を置くと、途端に女子学生たちからワラワラと手が伸びた。

「須崎さん、握手してください！」

「ずっとファンなんです！」

「会えて嬉しいです！」

次々と飛び出す黄色い歓声に、拓夢は内心呆気にとられながらもサクサクとドリンクを捌く。すると、同様にドリンクの載った盆を持ってやって来た佐竹が、拓夢の空になった盆と取り替えながら須崎の腕を掴んだ。

「お前邪魔だ。丸山が戻って来たから裏方やれ」

熱狂的なファンのお陰で列が止まってしまったのを見て佐竹が言う。

「そうします」

須崎は苦笑しながら答えると、拓夢に、後でな、と耳打ちしてから暗幕の向こうへと戻って行った。

「細川先輩の方は大丈夫なんですか？」

細川はずっと映写の方を担当している。こちらはパソコンとプロジェクターの操作だけなので一人でも十分だと言っていたが、それでも付き切りの仕事は大変だろう。そう思って問うと、佐竹が、あっちは大丈夫だろ、と答える。

「一度セットしちまえば、後は傍にいるだけだからな。さっきも映写室にカノジョが遊びに来てたぞ」

「えッ！」

驚いて声を上げた拓夢は、慌てて口を押さえる。

「細川先輩、カノジョさんがいらしたんですかー」

思わず言うと、佐竹がニヤニヤと笑った。

「幼馴染みなんだそうだ。大学は違うけど、もう五年くらい付き合ってるらしいぞ」

「うわああ……」

拓夢は思わず感心して呟く。すると、二階にある映写室の窓に噂の人物が現れて佐竹に合図を送った。

「おう！」

佐竹がそれへと手を上げて応える。

「初日最後の上映だ。ブザーが鳴ったら電気を消すから、観客が全員中に入ったら廊下に出てドアを閉めてくれ」

「わかりました」

拓夢が笑顔で頷くと、佐竹はポンポンとその頭を撫でてから暗幕の奥へと引っ込んだ。やがて、最後の観客が会場に入り、拓夢は外に出る。そして、ブザーの音を合図にドアを閉めた。

「お疲れ様〜」

裏方に戻ると、さっそくサエが笑顔でお茶を入れてくれる。

「ありがとうございます」

拓夢はそれをありがたく受け取ると、コクリと飲んだ。

「サエ先輩はもう観たんですか？」

そういえば自分はまだ試作品しか観ていなかったのを思い出して問うと、途端にサエがプッと頬を膨らませて拗ねた顔をする。

「聞いてよ、拓夢ちゃん！ 護ったら、『お前はDVDで観ればいいだろ』って言って観せてくれないんだよ！」

サエは声を荒げてそう言うと、酷いでしょッ、と言いながら佐竹を恨めしげに睨んだ。

「いーんだよ、お前はDVDで観れば！」

佐竹はうるさそうに顔を顰めて言うと、テーブルの上のタコ焼きを拓夢に勧める。

「入場料代わりに貰ったんだ。旨いぞ」

どうやら佐竹の所属している専攻ではタコ焼きを売っているらしい。小腹が空いていたので遠慮なく食べようとすると、その時突然会場から『うおおおお……！』とどよめきのような歓声が上がった。

「な、なにっ？」

驚いて暗幕の方に視線を向けると、サエがタコ焼きを頬張りながら、あ、始まったみたいだね、と平然と言う。

「あの声は何なんですか？」

不思議に思って尋ねると、サエは、さあ、と言って首を傾げた。

「それが毎回なんだよねー。オープニングの前だと思うんだけど、何が映ってるの？」

サエに視線を向けられた佐竹が、同じように紙コップに手を伸ばしながら、さあ、と答える。そして、中のお茶を一口飲むと、再び顔を上げて拓夢を見た。

「そういえばさ、次の部長はどっちがやるんだ？」

突然別の話題を振られた拓夢は、慌てて、えッ、と聞き返す。

「須崎先輩じゃないんですか？」

佐竹や四年次の先輩は全員卒業してしまうので、残るのは須崎と自分だけである。当然のように言うと、そこへ、俺は無理だぞ、と言って須崎がスタッフ用のドアから入って来た。

「俺は四年になってもバイト漬けだからな。卒論もあるし、とてもじゃないが部長なんてやってる暇は無い

ぞ」

その言葉に拓夢は内心で溜息をつく。では、やはり自分は来年も寂しい思いをするしかなさそうだ。しかし、須崎の気持ちがはっきりとわかった今では、全然不安ではなかった。会いたくなったら自分から酒屋に遊びに行けばいいのだ。

「いいですよ。その代わりに、僕が部長になったら毎日部室で映画三昧の日々を送らせてもらいますからね！」

ブンと拗ねたように言うと、途端に佐竹がプツと噴き出す。そしてサエに視線を向けると、ほらな、と言って笑った。

「だから言っただろ？ お前にそっくりだって」

そしてそう言うと、楽しそうに笑いながらサエを指差す。

「こいつもさ、このビデオサークルを作った時に、俺にジャンケンで負けて部長になったんだけどさー。その時のセリフが、今の拓夢ちゃんのセリフと全く同じだったんだよなー」

「えっ？」

その言葉に、拓夢は驚いてサエを見る。

「だってねえ」

サエは拓夢を見て言うと、肩をすくめながら溜息をついた。

「そうとでも言うしかないじゃないか。相手がやりたくないって言うんなら」

ねえ、とサエが拓夢に同意を求め、眉尻を下げて苦笑する。そうなのだ。全ては『惚れた弱み』。拓夢は思わず同感すると、頷いて笑った。

「ま、寂しかったら後輩をたくさん勧誘してくれよ。俺たちは最後にこんなイイのが作れて大満足だったけどさ」

まだまだ潰れて欲しくないからなあ、と言って佐竹が笑う。

「でも、細川や丸山みたいな優秀な技術者を探すのはホネだろうけどな！」

「だよねえ」

佐竹の言葉にサエもウンウンと頷き、拓夢は思わず溜息をつく。すると、その名前に何かを思い出したらしい須崎が、ああ、と言った。

「そういえば、映写室に細川先輩のカノジョが来てましたよ」

須崎の言葉にサエが、えッ、と驚いた顔をする。既に知っていた拓夢は、会ったんですか、と訊ねた。

「ああ。さっきまで映写室で細川先輩を手伝ってたんだ。アップの拓夢が可愛かったぞ」

須崎の言葉に、途端にサエがパツと目を輝かせる。

「観たのッ？」

そしてそう言うと、ウキウキと身を乗り出して須崎に尋ねた。

「ねえねえ、最初に何が映ってるの？ 毎回みんなが歓声を上げるんだけど」

サエの言葉に須崎が、ああ、と言ってニヤリと笑う。あれは、と説明しようとする、途端に佐竹が、こらッ、と叫んだ。

「言うなよ、須崎！ それ以上言ったら許さねーからな！」

するとそこへ、買い出しに行っていた丸山が笑いながら入ってくる。

「最初に映ってるのは部長からのメッセージですよ。よくあるじゃないですか〜。小説の最初のページに『ナニナニに捧ぐ』みたいな〜」

「えッ？」

途端にサエが驚いて目を見開く。

「あッ、この……丸山！」

佐竹の焦った声音に丸山は楽しそうにイヒヒと笑うと、ドアの外を指差して言った。

「外でもその話題でもちきりでしたよ～。『サエ』って誰だって言って」

その言葉に、サエはそれこそ驚いて目を丸くする。そして、ガタッと音を立てて立ち上がると、テーブル越しに身を乗り出した。

「僕にッ？　なんて書いてあったのッ？」

「言うな、丸山！」

サエの言葉に、佐竹が慌ててそれを遮る。丸山は再びイヒヒと笑うと、タコ焼きを一つ摘まんで口に放り込んだ。

「それはご自分れ観た方がいいれふよ～。感動が違いまふからね～」

「このバカ！」

佐竹が慌てて丸山を怒鳴り、須崎は手を伸ばして佐竹の口を塞ぐ。

「静かにしてください。上映中ですよ」

そしてそう言うと、サエを見て笑った。

「メッセージはDVDには入ってません。消されると困るから、今の上映が終わったら細川に言って、もう一度頭だけ流してもらおうといいですよ」

「マジでッ？」

途端にサエが色めき立ち、頼んで来るッ、と言って部屋を飛び出して行く。佐竹はそれを見て慌てて立ち上がると、部屋を飛び出そうとして戸口で振り返った。

「後で覚えてろよ！」

まっすぐ顔を指差された須崎が、ニヤリと笑って肩をすくめる。

「往生際が悪いですよ、部長。ラブレターは本人に見せなきゃ意味が無いんですからね」

須崎の言葉に、佐竹が真っ赤になってドアの向こうに消える。

「ラブレターッ？」

拓夢は驚いて須崎を見ると、問うように丸山を見た。

「もう一回流すみたいだから、拓夢ちゃんも観てきたら～？」

丸山はノホホンと笑いながらそう言うと、残ったタコ焼きをパックごと持つ。そして、これは受付に持って行ってやろうね～、と言うと、お茶と一緒に盆に載せて部屋を出て行った。途端にスタッフルームは静かになり、拓夢は持ったままでいた紙コップの中のお茶をコクリと飲む。すると、その静寂を破るように、須崎が拓夢を呼んだ。

「なあ、拓夢」

拓夢は、はい、と答えて隣の須崎に視線を向ける。

「俺が大学を卒業したら、一緒に暮さないか」

「え？」

拓夢は一瞬何を言われたのか解らなくて口をポカンと開けると、次の瞬間ハッと目を見開いて、慌てて凭れていた椅子の背から飛び起きた。

「ええッ？」

「卒業後もあの店を手伝うつもりでいるから、贅沢はさせてやれないと思うけど」

須崎はそう言うと、真剣な眼差しで拓夢を見詰める。

「大切にするよ」

拓夢は須崎の言葉に驚き過ぎて言葉を失う。

「それって……」

信じられずに大きな目をまん丸にして見返すと、須崎が少しだけ顔を赤くして言った。

「一応プロポーズ……のつもりなんだけど、いいかな」

「えっ……」

その言葉に、拓夢は途端にカアアッと耳まで真っ赤になる。そして、大きな瞳を揺らして須崎を見詰めると、ダメですッ、と答えて首を横に振った。

「二年になったら僕は寮を追い出されちゃうんです。そんなには待てません」

そう言って笑うと、途端に神妙な顔をしていた須崎がホッとしたように頬を緩める。

「わかった。じゃあ、三月になったら攫いに行くよ」

須崎の言葉に、拓夢はにっこり笑ってコクンと頷く。そして、抱き寄せられながら目を閉じると、自分から口付けをねだった。

了